

福岡市埋蔵文化財調査報告書第924集

今宿五郎江 6

—今宿五郎江遺跡第9次調査報告(2)—

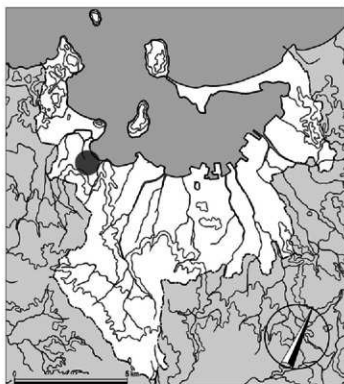
2007

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第924集

いま じゆく ご ろう え
今宿五郎江 6

—今宿五郎江遺跡第9次調査報告(2)—



調査番号 0255
遺跡略号 IMG-9

2007

福岡市教育委員会



図 1 今宿五郎江遺跡遺景 (西から)



図 2 3区完形 (西から)

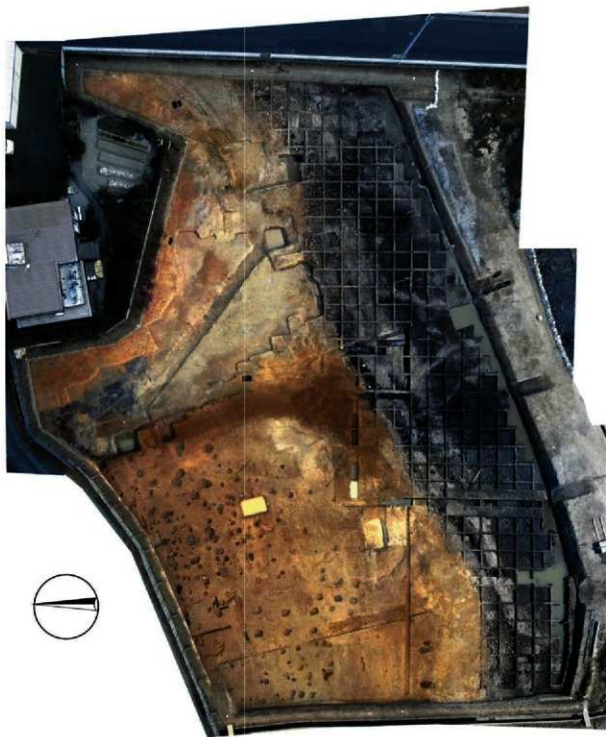


图3 3区全景(2層下面)(西から)



図 4 溝427 (S区東半部)
(西から)



図 5 溝427 (S区西半部)
(西から)



図6 溝427-27層遺物出土状況(35-67区東半)(東から)

M4-2層

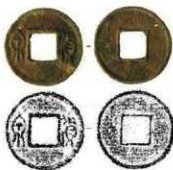


787



1771

901



1211(M4-1下層)



左から
401
980
947
1817



577

788



M509-3636



M435-2244



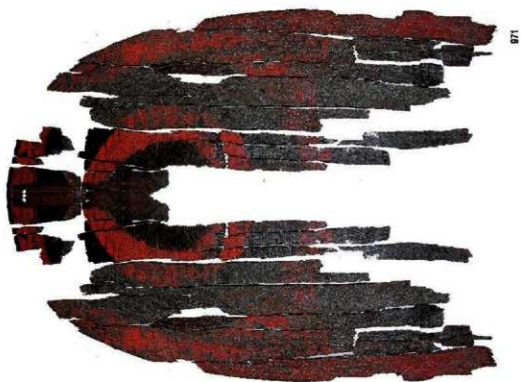
M427-5074(42層)



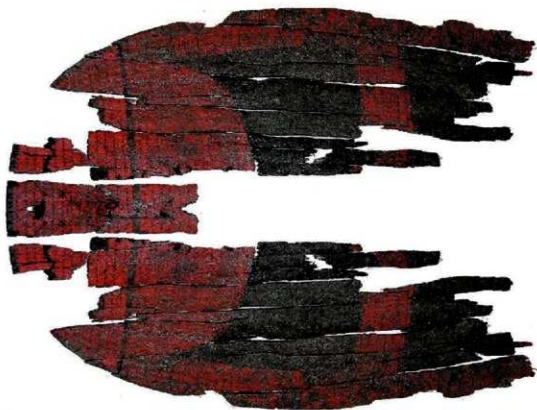
M427-4016(21層)

1:1

図7 谷4出土遺物



971



1:6

图 8 拓971 (清427-27册)

序

福岡市の西部に位置する今宿平野は、中国の史書にその名を残す糸島平野の東を占め、歴史的にみても重要な位置にある地域です。しかしいま、大規模な土地区画整理事業の進行に伴い、急速に変貌を遂げつつあります。

福岡市では、工事等により現状保存のできなくなった埋蔵文化財について、記録による保存を図ることとし、そのための発掘調査を行ってきました。本書は、この目的で伊都土地区画整理事業地内埋蔵文化財について実施した、調査報告第2冊として刊行するものです。

ここに至るまでには関係各位の多大なご理解とご協力があったことをここに記し、心からのお礼を申し上げます。

また、本書が今宿平野の歴史について、理解を深めるための資料として資するところがあれば幸いです。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会
教育長 植木 とみ子

はじめに

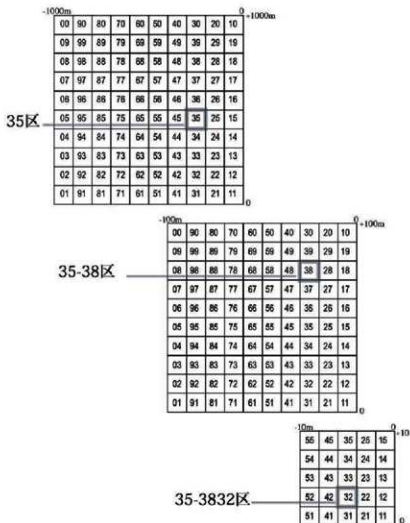
- 1 本書は、2002（平成13）年度から2003（平成14）年度にわたり、福岡市西区今宿町地内伊都土地画整理事業地で福岡市教育委員会がおこなった、埋蔵文化財発掘調査の報告であり、同地内埋蔵文化財調査報告第2冊である。
- 2 報告する調査は、調査番号0255今宿五郎江遺跡第9次調査で、分割して報告するうちの2である。
- 3 発掘調査は、文化財保護法57条の3（改正前）に基づく通知を受け、埋蔵文化財保存についての協議を行った結果、福岡市都市整備局伊都区画整理事務所の依頼により、記録保存を目的として、教育委員会埋蔵文化財課が実施したものである。現場作業は、関係各位のご理解とご協力のもと、円滑に遂行することができた。この場で深く感謝申し上げる。
- 4 整理に際して、木製盾について橋本達也氏（鹿児島大学）からご教示いただいた。
- 5 発掘調査は、埋蔵文化財課 杉山富雄・阿部泰之が担当した。本書編集は担当者協議のうえ、杉山がおこなった。遺物実測・掲載図作成は編者がおこなった。
- 6 出土資料および調査記録は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵管理し、利用に供する予定である。

凡 例

- 1 書名は、埋蔵文化財調査報告書としての利用を考え、遺跡名によることとし、簡略化を図るため『今宿五郎江』とした。前回報告に続けて第6冊とする。
- 2 位置の記録は、伊都土地画整理事業にともない設置された基準点（日本測地系）を利用し、その座標値で示すこととした。
- 3 図中に用いる方位は国土座標の座標北であり、真北から0° 19′ 西偏している。
- 4 遺物実測図は、特に記さない限り縮尺4分の1で図示している。そのほかの縮尺の場合は、遺物番号に続け、それを付記した。
- 5 報告中では、遺構・遺物に対し、調査中から整理の過程を通じて登録した通し番号で表記した。また、報告後、これを収蔵管理に際しての登録番号とする。このため、報告中の表記が煩雑となるが、調査から収蔵までの過程の情報を一貫して管理し、台帳・図・日誌等関係情報を極力参照、検証できるようなかたちで残してゆきたいとの意図からである。また、番号の種別を明示する必要のあるときは、遺構については区分の記号M、遺物については記号Rを付している。

調 査 番 号	0255			
調 査 地 地 番	福岡市西区今宿町 地内		遺 跡 略 号	1MJ-9
			分布地図番号	112(今宿)
工 事 面 積	130ha	調 査 対 象 面 積	5,080㎡	
調 査 実 施 面 積	3,520㎡	調 査 期 間	2002年12月22日～2003年3月31日	

6 調査に際して、位置の表示に座標系の格子を利用した。1000mの格子を基に、100mごとにX軸（南北）方向、Y軸（東西）方向に各10等分した格子を設定し、南東隅を基準に、2桁の数字で各格子を表示する。同様に100mの格子をX・Y軸方向に各10等分して10m格子を、さらに10m格子を各5等分した2m格子までを設定した。各単位の格子は上の桁がY軸（東西）方向の、下の桁がX軸（南北）方向の位置を示す。これを下図の示すように組み合わせて、100m、10m、2mの格子単位で位置を記録、表示に利用した。この区画は続く、10次調査、11次調査に用いて位置の表示の標準化を図った。



7 表：遺構出土遺物構成で出土分量について、整理時の記号をそのまま掲載した。各記号の意味は下記のとおりである。

- sp：10号ポリ袋以下の分量、mp：13号ポリ袋以下の分量、lp：17号ポリ袋以下の分量
- sc：容量18Lコンテナ換算、mc：容量22Lコンテナ換算、lc：容量36Lコンテナ換算

本文目次

I 今宿五郎江遺跡第9次調査の概要

1. 今宿五郎江遺跡第9次調査と隣接調査地点	1
今宿五郎江遺跡第9次調査(付図1)	1
谷遺跡第1次調査(付図1)	
2. 今宿五郎江遺跡第9次地点谷部調査の概要	2
谷4	2
1層	2
1下層	2
2層	2
23層	2
3層	2

II 谷4出土の遺構と遺物

1. 谷4-1層出土の遺物	4
1層(図3・12~14・16・18)	4
出土遺物(図11)	4
2. 谷4-1層上の遺構と遺物	6
流路431(図15・16)	6
出土遺物	6
流路435(図17・18~21)	6
出土遺物(図22)	10
3. 谷4-1層下面の遺構と遺物	12
溝423(図23・24)	12
出土遺物	12
溝424(図23・24)	14
出土遺物(図27)	14
溝425(図24・25)	15
出土遺物(図27)	15
溝432(図26)	16
出土遺物(図27)	16
4. 谷4-1下層および1下層下面の遺構と遺物	16
1下層(図12・13・28~30)	16
出土遺物(図31)	16
土壇600(図32~34)	20
出土遺物(図37)	20
土壇601(図33・36・35)	22
出土遺物(図37)	22
5. 谷4-2層と2層下面出土の遺構と遺物	22
谷4-2層(図38~41)	22
溝603(図50)	39
出土遺物(図51)	39

土城229 (図52・53)	40
出土遺物 (図54・55)	40
杭列230 (図52・53)	44
杭列228 (図57～59)	44
流路448・449 (図60・64)	46
出土遺物 (図65・66)	46
流路448	48
流路449	48
流路597・598・599 (図67～71)	52
出土遺物 (図72・73)	52
流路597	56
流路598	56
流路599	56
凹地604 (図74～81)	59
出土遺物 (図82・85)	59
流路602 (図86～89)	68
出土遺物 (図90)	68
5. 溝427出土の遺構と遺物	70
溝427 (図2～6・91～115)	70
出土遺物 (図7・8・116～139)	70
土層	70
出土遺物 (図7・8・116～139)	70
21層出土遺物 (図7・116・117・120)	70
31層出土遺物 (図117)	70
22層出土遺物 (図118・119・121)	71
42層出土遺物 (図7)	71
27層出土遺物 (図8・122～134)	71
29層出土遺物 (図135～139)	123
6. 谷4-23層と出土遺物	132
谷4-23層 (図3・4・5・140～144)	132
出土遺物 (図145～148)	132
III まとめ	134

目次

図1 今宿五郎江遺跡遺景 (西から)	図版1	図35 土壙601(南から)	21
図2 3区完掘(西から)	図版1	図36 土壙601(1:20)	22
図3 3区全景(2層下面) (西から)	図版2	図37 土壙600・601出土遺物(1:4)	22
図4 溝427(3区東半部) (西から)	図版3	図38 谷4-2層遺物出土状況 [35-85~96区](東から)	24
図5 溝427(3区西半部) (西から)	図版3	図39 谷4-2層遺物出土状況 [35-0545区](東から)	25
図6 溝427-27層遺物出土状況 (35-67区東半)(東から)	図版4	図40 谷4-2層遺物2331出土状況 [35-4733区](北から)	25
図7 谷4出土遺物	図版4	図41 谷4-2層遺物2909出土状況 [35-7653区](南から)	25
図8 盾971(溝427-27層)	図版5	図42 谷4-2層出土遺物1(1:4)	26
図9 今宿五郎江第9次地点層序模式図	6	図43 谷4-2層出土遺物2(1:4)	27
図10 今宿五郎江第9次地点遺構分布 (1:500)	7	図44 谷4-2層出土遺物3(1:4)	30
図11 谷4-1層出土遺物	4	図45 谷4-2層出土遺物4(1:4)	32
図12 谷4-1層・1下層遺物出土状況 (35-55区)(東から)	5	図46 谷4-2層出土遺物5	35
図13 谷4-1層・1下層遺物出土状況 (35-55区)(西から)	5	図47 谷4-2層出土遺物6	36
図14 谷4-1層遺物出土状況 (35-46~58区)(西から)	5	図48 谷4-2層出土遺物7	37
図15 流路431(1:80)	6	図49 谷4-2層出土遺物8	38
図16 流路431(南から)	6	図50 谷4-2層出土遺物9	39
図17 流路435(1:80)	7	図51 溝603(1:80)	39
図18 流路435(南から)	8	図52 溝603出土遺物(1:4)	39
図19 流路435(北から)	9	図53 土壙229・杭列230(東から)	40
図20 流路435 遺物出土状況(北から)	9	図54 土壙229・杭列230(1:40)	41
図21 流路435 遺物出土状況(西から)	9	図55 土壙229出土遺物1(1:4)	42
図22 流路435出土遺物(1:3、1:4)	10	図56 土壙229出土遺物2(1:4、1:2)	44
図23 溝423・424(東から)	12	図57 杭列228(1:40)	44
図24 溝423・424(1:80)	13	図58 杭列228(北から)	44
図25 溝425(東から)	14	図59 杭列228(北から)	45
図26 溝432(1:40)	14	図60 谷4-2層下の流路分布 (1:400)	46
図27 溝423・424・425出土遺物 (1:3、1:4)	15	図61 流路449(東から)	47
図28 谷4-1下層遺物出土状況 [35-38区](東から)	17	図62 流路449(南から)	47
図29 谷4-1下層遺物出土状況 [35-38区](東から)	17	図63 流路448(南から)	48
図30 谷4-2層遺物出土状況 (35-58区)(東から)	17	図64 流路449遺物3521出土状況 (西から)	48
図31 谷4-1下層出土遺物(1:4)	18	図65 流路448・449出土遺物1	49
図32 土壙600(1:20)	20	図66 流路448・449出土遺物2(1:4)	50
図33 土壙600・601(東から)	20	図67 流路597・598・599(1:200)	52
図34 土壙600(南から)	21	図68 流路597・598(南から)	53
		図69 流路597・598(南から)	53
		図70 流路599(南から)	54
		図71 流路599土層(東から)	54
		図72 流路599出土遺物1	55
		図73 流路599出土遺物2(1:4)	56
		図74 凹地604(1:80)	58
		図75 凹地604(南から)	59

図76	凹地604(南から) ……………	60	図109	溝427層971出土状況 [35-0653区4a層] (東から) ……………	87
図77	凹地604遺物出土状況(西から) ……	60	図110	溝427梯子3662出土状況 [35-6713区27・30層](西から) ……	87
図78	凹地604遺物出土状況(北から) ……	60	図111	溝427土器3501出土状況 [35-6713区27・30層](北から) ……	87
図79	凹地604遺物出土状況 (北から・R4234ほか) ……………	61	図112	溝427 [1区](南から) ……………	88
図80	凹地604遺物出土状況 [35-4733区底部](東から) ……………	61	図113	溝427 [3区西半部](東から) ……	88
図81	凹地604遺物出土状況 [35-4721・22区] (東から、R4581) ……………	61	図114	溝427 [3区東半部](東から) ……	89
図82	凹地604出土遺物 1 (1:4) ……………	62	図115	溝427 [3区中央部](東から) ……	89
図83	凹地604出土遺物 2 (1:4) ……………	64	図116	溝427-21層出土遺物 1 (1:4) ……	90
図84	凹地604出土遺物 3 ……………	66	図117	溝427-21層出土遺物 2・31層出土遺物 (1:4) ……………	92
図85	凹地604出土遺物 4 ……………	67	図118	溝427-22層出土遺物 1 (1:4) ……	94
図86	流路602 (1:40) ……………	68	図119	溝427-22層出土遺物 2 (1:4) ……	96
図87	流路602土層(東から) ……………	68	図120	溝427-21層出土遺物 3 ……………	98
図88	流路602(南から) ……………	69	図121	溝427-22層出土遺物 3 ……………	99
図89	流路602(南西から) ……………	69	図122	溝427-27層出土遺物 1 (1:4) ……	100
図90	流路602出土遺物 (1:4) ……………	69	図123	溝427-27層出土遺物 2 (1:4) ……	102
図91	溝427土層 [35-95~05] (1:80) ……	75	図124	溝427-27層出土遺物 3 (1:4) ……	104
図92	溝427土層 [35-76~85] (1:80) ……	77	図125	溝427-27層出土遺物 4 ……………	106
図93	溝427土層 [35-58~66] (1:80) ……	79	図126	溝427-27層出土遺物 5 ……………	107
図94	溝427土層 [35-38~47] (1:80) ……	81	図127	溝427-27層出土遺物 6 ……………	108
図95	溝427上面 [21・27層](西から) ……	82	図128	溝427-27層出土遺物 7 ……………	109
図96	溝427土層 [35-85・95] (東から) ……	82	図129	溝427-27層出土遺物 8 ……………	110
図97	溝427土層 [35-96] (東から) ……	83	図130	溝427-27層出土遺物 9 ……………	111
図98	溝427土層 [35-76] (東から) ……	83	図131	溝427-27層出土遺物10 ……………	112
図99	溝427土層 [35-66・67] (東から) ……	83	図132	溝427-27層出土遺物11 ……………	113
図100	溝427遺物出土状況 [35-6731区] (西から) ……………	84	図133	溝427-27層出土遺物12 ……………	114
図101	溝427遺物出土状況 [35-6751区27層] (北西から) ……………	84	図134	溝427-27層出土遺物13 ……………	115
図102	溝427遺物出土状況 [35-67区27層] (北から、R3577ほか) ……………	84	図135	溝427-29層出土遺物 1 (1:4) ……	116
図103	溝427遺物出土状況 [35-95区] (北から) ……………	85	図136	溝427-29層出土遺物 2 (1:4) ……	118
図104	溝427遺物出土状況 [35-48区27・29層層] (北から) ……………	85	図137	溝427-29層出土遺物 3 ……………	120
図105	溝427遺物出土状況 [35-6713区27・30層] (北から) ……………	85	図138	溝427-29層出土遺物 4 ……………	121
図106	溝427遺物出土状況 [35-6723区27・29層] (北から) ……………	86	図139	溝427-29層出土遺物 5 ……………	122
図107	溝427遺物出土状況 [35-6751区27・29層] (北から) ……………	86	図140	谷4-23層 3区東半部(南から) ……	124
図108	溝427遺物出土状況 [35-8612区27・29層] (北から) ……………	86	図141	谷4-23層土層(東から) ……………	124
			図142	谷4-23層(西から) ……………	125
			図143	谷4-23層遺物出土状況(西から) ……	125
			図144	谷4-23層遺物出土状況 [35-6654] (東から、M729) ……………	125
			図145	谷4-23層出土遺物 1 (1:4) ……	126
			図146	谷4-23層出土遺物 2 (1:4) ……	128
			図147	谷4-23層出土遺物 3 (1:4) ……	130
			図148	谷4-23層出土遺物 4 (1:4) ……	132

付図1 今宿五郎江遺跡第9次調査区(1:200)

付図2 谷4遺物出土状況(1下層~2層下面)1:200

I 今宿五郎江遺跡第9次調査の概要

1. 今宿五郎江遺跡第9次調査と隣接調査地点

報告する調査は伊都土地区画整理事業に伴い実施したものである。今宿五郎江遺跡第9次調査はその第1次の調査として2002（平成14）年度から、2003（平成15）年度にかけて発掘作業を行った。

2002年度調査範囲は今宿五郎江遺跡から隣接する谷遺跡に及んだ。調査時、1区とした調査区が前者の範囲、2区とした調査区が後者の範囲に該当する。続いて2003年度、1区の東に隣接して調査区を設定、調査を行った。これを今宿五郎江遺跡第9次調査の継続としたことから3区とした。

以上調査のうち、谷遺跡第1次地点（調査1区）と今宿五郎江遺跡第9次地点（調査1・3区）の台地部の遺構遺物については既に報告した（『今宿五郎江5』福岡市埋蔵文化財調査報告書第872集2006年）。残る谷部（谷4として記録）の調査成果について、今回報告する。

既報告範囲について、概要を以下に記す。

今宿五郎江遺跡第9次調査（付図1）

遺跡が立地する台地の南端部の調査である。今回報告する谷部との比高は小さく、平坦である。調査区北辺部が遺跡最高所となっており、そこから北側に向かい緩く傾斜が始まる。3区東半部は粘土採掘により大きく破壊されており、遺構は全く遺存しない。

遺構は調査区北半部に集中し、谷部との間に空地を生じている。遺構は柱穴を含む小穴が主である。1・3区合わせて22棟の掘立柱建物を復原できた。規模は1×1間の建物が多く、加えて1×2間の建物がある。後者は柱穴に大規模なものがある。このほかに、竪穴住居1棟、溝、土壇を検出した。

竪穴住居とする遺構は、今宿五郎江遺跡の調査では従来確認されていなかったものである。住居内に柱穴は検出できないが、中央部に地床炉、東辺部に土壇があり、通有の形態をとる。重複して2棟を確認した。建て替え等あったものか。

溝は1区で遺存状態の良好なものがあり、細く比較的深い。遺物を多く出土することなど、従来調査されている状況に合致する。谷部に流れ込むような位置にあるが、その末端の状況は明確にすることができなかった。遺構の多くは遺物から弥生時代後期のものと考えられる。

このほかに、以上述べた遺構群とは離れて、谷部(谷4)に近い位置で弥生時代中期の土壇2基を離れた位置で検出した。

谷遺跡第1次調査（付図1）

今宿五郎江遺跡第9次調査地点と谷部を挟んで対する位置に立地する。調査区の西半部は南西からの勾配をもった緩傾斜面で、南方丘陵の末端部にあたるものと考えられる。東半部は谷底の堆積面となり、この位置では砂層が卓越し、埋もれ木が分布する。クスの大木の根株が複数遺存する。

谷底と西の傾斜面の境界部で北東方向に向かう溝があり、弥生時代後期・終末期の土器のほか、銅鏃、貨泉の出土があった。上記斜面には、調査区外から続く遺物包含層が形成される。弥生時代後期、終末期の土器片が主であり、洗い出し状を呈す。これに接して北面する傾斜面にはこの層は遺存せず、古墳時代以降の遺物を出土する不整な土壇が分布し、部分的に古代の遺物を含む包含層が生成している。

調査区北端部には黒褐色泥炭質粘土層が分布しており、谷部（谷4）の南岸を示すものである。

2. 今宿五郎江遺跡第9次地点谷部調査の概要

今回報告するのは、今宿五郎江遺跡第9次地点のうち、南半部を占める谷部とそれにかかる範囲で調査した遺構・遺物である。

谷4 調査地点の原状は、鐘撞山から伸びる丘陵末端と今宿五郎江遺跡が立地する段丘の微高地にはさまれた、北東方向に極緩く傾斜する低地であり、水田として利用されていた。これは鐘撞山北麓に発し調査区南西方向から調査区南辺部を北東方向に流下する谷の埋没した結果である。この谷の埋没過程で包含層が形成され、また各段階で遺構が残される。この、遺構・遺物が分布する平面上の範囲と層位上の範囲とで限られる空間について谷4と呼称し、調査記録した。

谷4埋没後の堆積を表土層とする。調査地の基本的な層序については前回報告中に図示した(報告第872集 図29)。そこでは、谷部に厚い堆積により、全体が次第に平坦化する過程をみることができるが、そのうち谷部での深さ0.8m、台地部で0.4mまでを表土層として機力により鋤き取った。

この位置で、1区および3区東半部では1層の分布を確認した。それ以外の範囲では、下位の2層上面まで鋤き取っている。調査はこの位置から開始した。以下、谷4の基本層序と遺構面について概要を記し、詳細は各項で説明する。

1層 黒褐色粘質土である。砂粒を含み、シルト質。遺物包含層である。下面に集中して出土する部分がある。台地裾部から谷中にかけて分布する点、以下の層とは分布範囲が異なる。上位の遺構(431・435)と下面の遺構(423~425・532)を検出した。

1下層 1層として調査中に、性状の異なる部分を確認し、1下層とした。黒褐色強粘質の粘土層である。見た目では殆ど黒色。1区と3区東半部を中心に分布する。2d層とした部層もこれに含めて報告する。台地裾部から谷中にかけて分布する。遺物包含層。層中若しくは下面とみる遺構を検出した(600・601)

2層 谷4中に最も広く分布する泥炭質の粘質土で遺物包含層である。下面で流路(448・597~598・599)、凹地(604)を調査したほかに溝(427)を検出した。2c層を含め報告する。

23層 2層下で検出した。部分的に分布し、後述するように人為的に形成された層である。遺物包含層。

3層 暗褐色灰色の粘土層である。均質で以下、谷堆積層となる。3区35-57区のトレンチでは、下位は厚い泥炭層となり、その下底面は基盤層である段丘礫層で終わる。3層以下は無遺物層。

以下、縦層となる、1層・1下層・2層を基準に遺構・遺物を報告する。

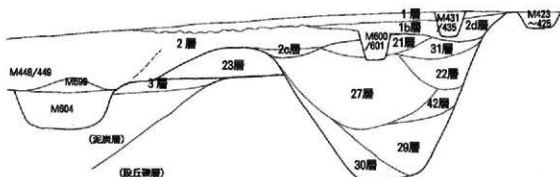


図9 今宿五郎江第9次地点層序模式図

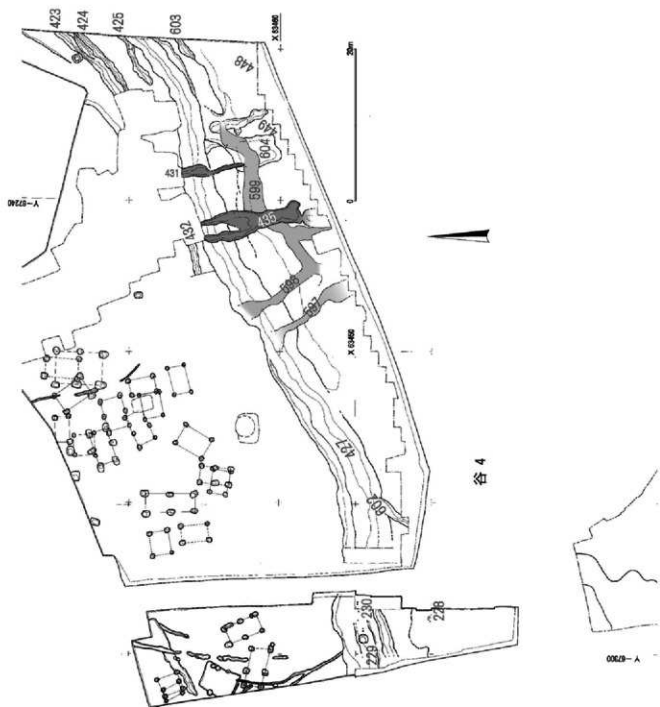


图10 今宿五郎江第9次地点遺構分布 (1:500)

II 谷4出土の遺構と遺物

1. 谷4-1層出土の遺物

1層 (図3・12~14・16・18)

前述のとおり、調査開始面とした遺物包含層である。実際は表土層とした層の下部とした部位で、上位から漸移する。黒褐色、砂混じりの粘質土で、台地部ではより砂質である。調査区内の台地部は開田により削平されており、本来は谷部を離れて台地部にも分布の範囲があったものと思われる。

谷4の肩部から2層上部にかけて遺物が集中する範囲が分布する。ただし、いずれも細片化した資料で、磨耗が顕著なことが多い。

出土遺物 (図11)

上述したように、遺物は散漫に出土する地点と密集する地点とがある。いずれも、遺物の大半は後期弥生土器の細片である。それに混じり、下図に示すような遺物が出土した。しかし、これらが全体に占める割合は極小さい。

5358は鏡片である。縁部の細片で、復原径9.3cm、縁部断面形は低い三角形で、厚さ0.5cm、重量は9.3gを測る。

662は須恵器坏である。平底で、器表は平滑である。

5460は越州窯系青磁である。鉢か。外面の底部付近まで軸が掛かる。内底面に目痕が残る。

791・2377は丸瓦である。ともに瓦上面に格子目の叩き調整痕、下面には布目が残る。須恵質。

2377の叩き調整痕は791より細目である。

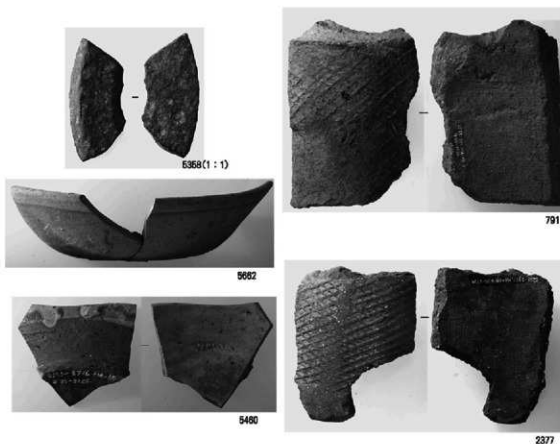


図11 谷4-1層出土遺物



図12 谷4-1層・1下層遺物出土状況
(35-55区) (東から)



図13 谷4-1層・1下層遺物出土状況
(35-55区) (西から)

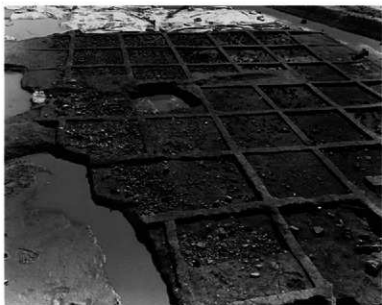


図14 谷4-1層遺物出土状況
(35-46～58区) (西から)

2. 谷4-1層上の遺構と遺物

3区東半部で1層の土器細片層を掘り込んだ状態で検出した。いずれも流路とみられるものである。

流路431 (図15・16)

北方の台地部から谷4に向かい南方に流下する流路である。平面形は不整で蛇行する。断面は逆台形状で浅い。谷中で消失する。現況の長さ8m、幅0.4m、深さは0.2mを前後する。

出土遺物

遺物は覆土中から散漫に出土した。遺物の構成を8頁表に示す。弥生土器が大部分を占めるなかに陶器捏鉢の細片が混じって出土した。

流路435 (図17・18～21)

流路431と同方向に流下する流路である。北半部では流路428・429に分かれていたものが、合流し、谷4中で次第に広がり、高低差が不明瞭となって消失する。北端部は攪乱により切断されており、上流側の状況は不明である。南半部ではこれに伴うものが判然としなが、小径の丸木杭が散在する。流路

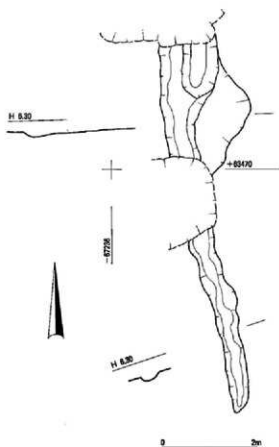


図15 流路431 (1:80)



図16 流路431 (南から)

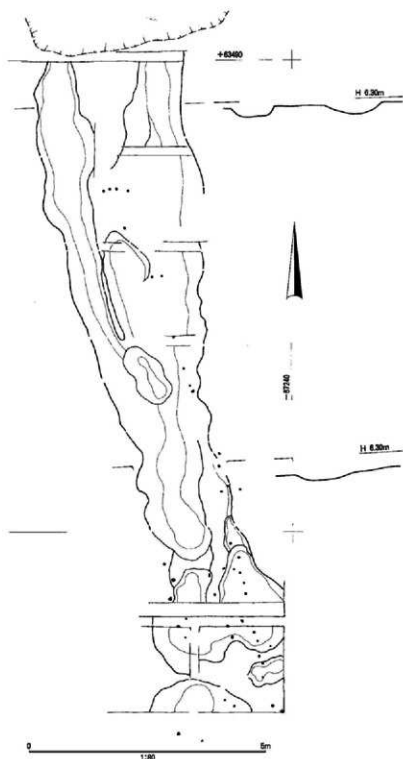


図17 流路435 (1:80)

中位以南では、覆土中に樹枝を主とした多量の木片と、拳大から小児頭大の礫が、流水により押し流されたような状態で堆積している。樹枝は硬質で遺存状態は良好である。スギか。礫には地山起源の円礫のほか、明らかに搬入された玄武岩亜円礫、円礫などを含む。打製石器も含まれて、水流による洗い出しというには余りにも集中しているような印象を受ける。底面は全体に不整であり、下流側では次第に浅くなり、谷に流れ込んで浅く広がり消失しているような状態となる。



図18 流路435 (南から)

遺構番号	単位遺構	遺物量	遺物構成		
431	431	mp	+弥生土器 ・ +陶磁器	+後期 + [器台の他は体部破片、器種・時期不詳]。 +陶器	+壺 (体部細片)。 +捏鉢 (底部細片、内底面の磨耗顯著、器表の遺存状態良好)。
435	428	lp	+須恵器 +弥生土器 ・ ・ ・	+ +後期(中葉~) +中期	+壺? (細部細片、器形・時期不詳)。 +壺 (口縁部・頸部細片)。 +壺 (丹塗りの頸部細片)。 +壺 (口縁部細片) 複数。 +その他 (いずれも細片の資料で、殆どは体部破片、器形・時期不詳)。
435	429	lp	+弥生土器 ・ ・	+後期 +中期 +壺 (底部細片)・高環 (環部細片) 他があるが、いずれも細片の資料で、殆どは体部破片、器形・時期不詳)。	+壺 (口縁部細片)。 +壺 (頸部細片)。
435	435	mc×5	+緑釉陶器 +土師器 ・ +須恵器 +瓦 ・ +弥生土器 ・ ・ ・ ・ ・	+平安 +平安? ? + +平安 ・ +後期~終末期 ・ ・ +中期 ・ ・ +時期不詳	+筒 (底部細片)。 +高台碗 (底部細片)・永切底環 (底部小破片)。 +壺? (粗い蹴削り調整を残す体部細片)。 +壺 (複数の体部細片、器形・時期不詳)。 +丸瓦 (小破片、玉縁、格子目叩き調整)。 +平瓦 (細片、格子目叩き調整)。 +壺 (口縁部・底部細片)。 +大形壺 (口縁部細片)。 +器台 (細片)。 +壺 (口縁部細片)。 +壺 (丹塗り頸部細片)。 +高環ほか (大部分は体部破片、器形・時期不詳)。



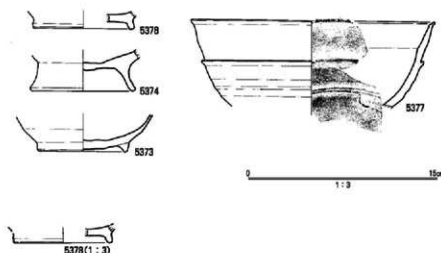
図19 波路435（北から）



図20 波路435遺物出土状況（北から）



図21 波路435遺物出土状況（西から）



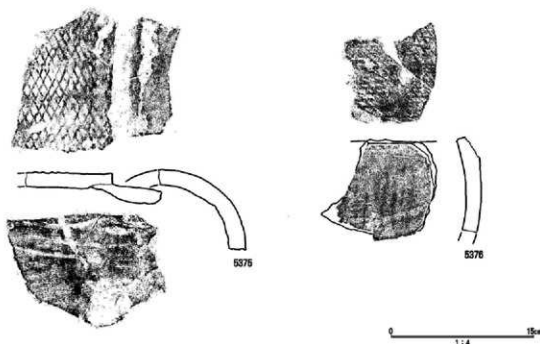
遺物番号	遺構番号	区	出土位置	遺物種別	年代	遺物特記	材質(胎土・焼成・施釉)
5373	435	3	G35-56	土師器 高台碗			胎土：やや粒状性、均質。 断面：団粒状。 器表：薄茶明るい灰みの黄赤(4YR 7/4 薄赤)。
5374	435	3		土師器 高台碗			胎土：緻密、粗砂を含む。暗褐色粗粒を含む。 断面：やや団粒状。細孔を生じる。 器表：くすんだ黄赤(2YR 6/8?)。
5375	435	3	G35-56	瓦 丸瓦			胎土：緻密、粗砂を少量含む。黒褐色粗粒子を含む。瓦質。 断面：液状の層状。器表付近が明るい灰みの黄(2.5Y 7.5/2 砂色)を呈する以外は、器表に同じ。 器表：暗い灰色(2.5PB 3.5/0.5 スレートグレー)。
5376	435	3	G35-56	瓦 平瓦			胎土：緻密、粗砂を少量含む。瓦質、硬。 断面：団粒状。細孔を生じる。 器表：暗い灰色(2.5PB 3.5/0.5 スレートグレー)。
5377	435	3	G35-5725 底部洗い出し層	須恵器 高坏			胎土：やや粒状性、均質。 断面：やや団粒状。 器表：灰色(N 6.5 鼠色)。
5378	435	3	G35-56	緑釉陶器 碗?			胎土：精緻、均質。明るい灰色(N 7 薄鈍色)。 釉：開部を中心に歯にかかる。発泡して半透明、ガラス状光沢を呈す。貫入を生じる。 器表：蓋軸部は緑みの明るい灰色(10GY 7/1.5 深川紺)。

図22 流路435出土遺物(1:3, 1:4)

出土遺物(図22)

流路435覆土からは、コンテナ6箱ほどの遺物が出土した。特に中央部で、樹枝や籾に混じり多量に出土した。遺物の構成を、8頁表に示す。分流部428・429はそれぞれ個別に構成を示す。

遺物の大部分は弥生土器であるが、その中に少量ながら、須恵器、陶磁器、瓦が細片となって混じり、出土した。



成形・調整	計測 精度	口径/ 長さ	底径/ 高/径	器高/ 厚さ	計測値 備考	遺存 〔破・欠集〕
成形：巻き上げ 内底面：往復方向の撫で調整（丁寧に器表平滑、成型時の波状の凹凸は残る）。 外底面：高台貼り付け→高台を中心に帯状に周回方向の撫で調整。	実測		74			底部破片
器表の荒れ顕著で、調整不詳。 内底面：撫で調整、平滑。	実測		83			底部破片
上面：細かな格子目叩き調整。 下面：布目圧痕。	復原		164	18		側端部小破片
上面：格子目叩き調整。 下面：布目圧痕。	実測			11		側端部破片
内面：周回方向の撫で調整→下半部左下がりの撫で調整。 外面：周回方向の撫で調整→櫛描波状文施・下半部周削り調整（右回転）。一把手貼り付け。	復原	192				坏部の破片
高台：回転を利用した鋭削り調整により、削りだす。	復原		80		底部は高台径	底部破片

5374は、土師器高台碗である。底部のみの破片で、高台は高く、外方に張り出す。内底面には往復方向の撫で調整が行われる。5373も土師器高台碗である。底面はやや湾曲し、低い高台を貼り付ける。高台の断面は台形状。

5377は、須恵器高坏の坏部細片である。胎土はやや粒状性を感じるが均質、体部中位に断面三角形の細い突帯2条をもつ。上位の突帯は貼り付けによる。突帯間に細かな櫛描きの波状文を描く。復原口径19.2cmを測り、器壁は薄い。資料は把手のつく部分にあたり、その貼り付けの痕跡が残る。

5375は丸瓦である。後端近くの小破片である。後端部の嵌合わせ部は、瓦本体端部内面に粘土帯を貼り足し形成する。瓦質で、瓦内面に布目圧痕、外面に粗い格子目叩き調整を施している。外面の径16.4cmを復原できる。5376は平瓦側縁部の極細片である。瓦下面に粗い格子目叩き調整、上面には布目圧痕が残る。瓦質。

5378は緑釉陶器である。底部の極細片で、削り出しの高台をもつ。釉はガラス光沢を呈し、隅部を中心に斑に残る。

2244は銅鐵である。錆の進行で器表は粉状に剥落している。長さ3.6cm、幅0.8cm、厚さ0.3cm。

3. 谷4-1層下面の遺構と遺物

掘り取り、および掘り下げにより1層除去後の調査面で検出した遺構である。谷4中というよりは谷際の台地縁辺部に位置する。いずれも溝である。このうち、溝423・424・425は35-39区を中心とした位置にあり、ほぼ平行して流れる。溝432は離れて西方に位置する。

溝423 (図23・24)

35-39区に位置する。最も谷4から離れた位置にある。南西方向から次第に北寄りに向きを変えながら北東方向に流れる。溝424と平行、あるいは一部重複している。前後関係は不明である。覆土は黒褐色砂質土で灰色みが強い。現状で長さ11m、幅1.3mを前後し、深さは0.2mほどである。

出土遺物

遺物はごく少量が覆土中から散漫に出土した。遺物の構成を15頁表に示す。弥生土器細片のほかに土器高台碗、糸切底土器器皿、陶器、鉄滓などがある。土器類はいずれも細片資料で、器表の磨



図23 溝423・424 (東から)

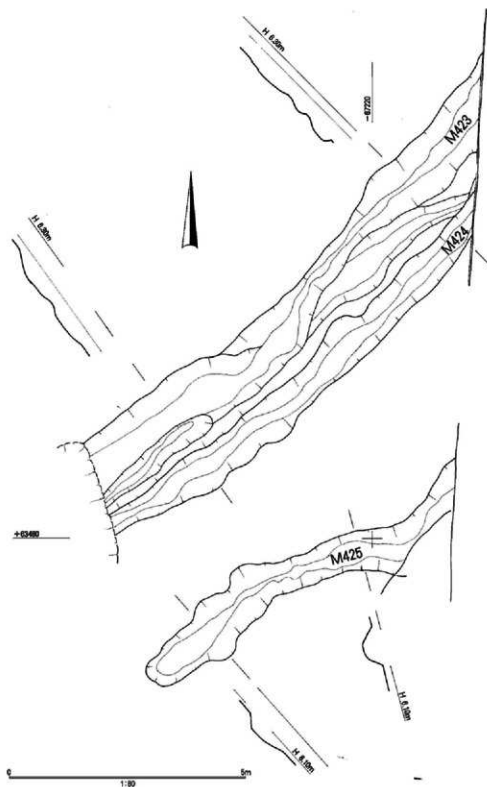


図24 溝423・424 (1:80)

耗が顕著である。

5368は備前系陶器插鉢である。口縁部の細片資料で、粗い擦り目が1単位残る。端部の肥厚は顕著でない。備前Ⅲ期とされる資料か。

溝424 (図23・24)

35-39区に位置する。溝423と平行、重複して谷4側を流れる。溝423よりやや幅が狭く0.8m前後、深さ0.2mほどである。覆土も溝423と同様砂混りの黒褐色粘質土である。

出土遺物 (図27)

遺物は覆土中から散漫にごく少量が出土した。遺物構成を15頁表に示す。瓦器、瓦が含まれる。

5370は瓦器碗口縁部極細片の資料である。胎土は均質、やや粉状を呈す。器表の荒れは著しい。



図25 溝425 (東から)

溝425 (図24・25)

35-39区に位置する。上記溝423・424に平行して最も谷4に近い位置にあり、谷4の際を流れる。蛇行が著しく、より不正な平面形となる。西端は消失している。覆土も上記遺構と同様黒褐色砂質土で灰色みが強い。現状で長さ11m、幅1.3mを前後し、深さは0.2mほどである。

出土遺物 (図27)

遺物は覆土中から散漫に少量が出土した。遺物の構成は15頁表に示す。細片の土器が大半を占める。土師器高台碗、須恵器坏皿・甕、瓦が混じる。

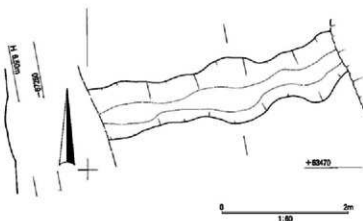
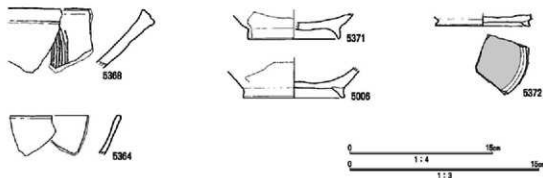


図26 溝425 (1:40)

遺物番号	遺構番号	区	出土位置	遺物種別	年代	遺物特記	材質 (胎土・構成・施釉)
5368	423	3					胎土：粗粒、細塵を含む。 断面：団粒状、赤みの暗い灰色 (1.5R 3.5/1 ガンメタルグレー)。 器表：暗い灰色 (2.5PB 3.5/0.5 スレート)。
5370	424	3		黒色土器 碗			胎土：精良、均質。やや粉状。 断面：明るい灰みの赤みを帯びた黄 (10YR 8/2 亜麻色)、芯部：黒化。 器表：内外面黒化、暗い灰色 (N4 鈍色)。
5006	425	3	G35-3911	土師器 高台碗			胎土：やや粒状性、均質。まれに粗砂を含む。 器表：器表の大部分剥落。灰みの赤みを帯びた黄 (9YR 5.5/2.5 空五倍子色)。
5371	425	3		土師器 高台碗			胎土：緻密、粗砂を少量含む。やわらかい赤みの黄 (8YR 7/6 小変色)。 器表：剥落して、粉状。
5372	432	3		須恵器 高台坏		壁に転用？ 外底面高台内は磨滅し、うすく黒色の付着物が残る。	胎土：やや粒状性、粗砂を少量含む。 断面：団粒状。 器表：黄みの灰色 (5P 4.5/1 スチールグレー)、高台部は酸化炎焼成。

遺構番号	単位遺構	遺物量	遺物構成	
423	423	sp	+土師器 ・ +備前系陶器 +陶器 + [須恵質の甕?体部細片] +弥生土器? + [体部破片、器形・時期不詳]。 +鉄滓 [少量]。 +石器 +表片 [玄武岩]。	+糸切底皿 [底部小破片]。 +高台碗? [底部の極細片]。 +摺鉢 [口縁部細片]。
424	424	sp	+瓦器 +瓦 +弥生土器 +石器 ・ +石髓 [両部打ち潰し]。	+碗 [口縁部細片]。 +平瓦 [格子目叩き調整]。 + [体部破片、器形・時期不詳]。 +表片 [玄武岩]。 +石髓 [両部打ち潰し]。
425	425	sp	+土師器 +須恵器 ・ +瓦 +弥生土器 ・ + [体部破片、器形・時期不詳]。	+高台碗 [底部小破片]。 +坏・皿 [平底、底部細片]。 +甕 [外面：平行叩き目、内日：同心円当て具痕→平行叩き目]。 +平瓦 [細片、軟質]。 +後期 + 甕 [頸部細片、突帯1条]。 + 甕 [口縁部細片]。 + [体部破片、器形・時期不詳]。
432	432	lp	+須恵器 ・	+甕 [高台対の底部細片]。 +甕・甕 [体部細片、器形不詳]。



成形・調整	計測 精度	口径/ 長さ	底径/ 幅/径	器高/ 厚さ	計測値 備考	遺存 (體・状態)
内外面：周回方向の強で調整。 口縁端面：自然輪、莖状。						口縁部細片
						口縁部細片
内外面：器表剥落のため、不詳。	復原		80		高台径	
器表剥落のため調整不詳。	復原		74			底部細片
内底面：周縁部周回方向の強で調整、中心部往復方向の強で調整。 外底面：鋭削り調整→高台貼り付け。	復原		101			底部細片

図27 溝423・424・425出土遺物 (1:3, 1:4)

5371は土師器高台碗である。器表は剥落して調整は不詳。復原高台径は7.4cm。5006はも土師器高台碗である。同様器表の遺存状態不良。復原高台径8.0cm。いずれも高台は低く、やや外方に張り出す。

溝432 (図26)

35-58区に位置する。谷4に沿う東西方向の溝である。西側は表土掘き取り時に一段深く下げたことから欠失する。東側は昭和10年代の粘土採掘により破壊されて残らない。現況で全長4m、平面形は不整で、幅0.7mを前後し、極浅くわずかに窪む程度の遺存状態である。深さ0.1m。

出土遺物 (図27)

遺物は覆土中から散漫に少量出土した。遺物構成を15頁表に示す。

5372は須恵器高台杯である。底部の外縁に沿い低く外方に張り出す高台を貼り付ける。復原した高台径10.1cmを測る。高台より内側の外底面は磨滅し、薄く黒色の付着物が残る。硯に転用したものであろう。

4. 谷4-1下層および1下層下面の遺構と遺物

1下層 (図12・13・28~30)

1下層とするのは、黒色あるいは黒色に近い黒褐色の粘土層で、1層下、2層上に位置づける層である。1区において1層除去後、2層掘り下げ中、谷4北岸に沿う分布を検出した(図12・13)。2層より風化が進んだような粘土層で、粒子が極細かく、粘性が強い。1区のほか、3区中部から東部にかけて谷の北岸際に部分的に分布する。特に35-48区以東では、本層中に、谷岸部に沿って投棄されたような状態で、土器包含層が生成している(図28・29)。それより西側の岸部では、流れに沿う凹地あるいは溝状の部分に生成したような状態で1下層が分布し、そこから比較的集中して遺物が出土する(図30)。2d層とした部層が該当する。3区中央部で、灰、木炭の薄層を挟む部層があり、これも本層と同位か。

出土遺物 (図31)

1下層からは大量の遺物が出土した。その殆どは土器片資料である。特に1区と3区東部に偏って出土している。1区の資料は細片、小破片が殆どであった。3区東部の集中部については接合を試みたが、土器の遺存状態もあってか全体を復元できるような資料はなかった。図21に示す。

5267は碗である。成形は手捏ねにより、内面に刷毛目調整を施す。外面のほぼ全面、内底面に煤状の付着物が残る。斑状で黒色を呈す。口径13.1cm、高さ6.3cmを測る。

5266は壺口縁部資料である。二重口縁部である。やや外向気味に立ち上がる頸部の基部に断面三角形の突帯を貼り付ける。器表の大部分は剥落しているが、遺存する部分から、内外面とも撫で調整が行われたことがわかる。復原した口縁径27.7cmを測る。

5399は器台である。くびれ部内面には縦方向の指押しえ痕が残る。外面には縦方向の刷毛目調整が行われる。基部を欠く。胎土には細礫を含む。上縁部の径は19.8cmを測る。高さは22cm以上である。

5264は器台である。くびれ部内面には縦方向の指押しえ痕が残る。外面は全体に撫で調整が行われているようであるが、器表の荒れが顕著で詳細不明。上縁部の端面には間隔を空けて刻み目が施されている。

図7に貨泉を示す。全体にやせており、銅の金属色を呈している。各所に細孔が空く。全体の形状



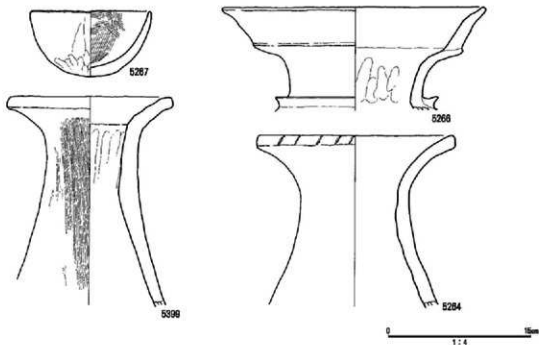
図28 谷4-1下層遺物出土状況
[35-38区] (東から)



図29 谷4-1下層遺物出土状況
[35-38区] (東から)



図30 谷4-2a層遺物出土状況
[35-58区] (東から)



遺物番号	遺構番号	区	出土位置	遺物種別	年代	遺物特記	材質〔胎土・焼成・施釉〕
5264	4	3	G35-3813 1 層下部	弥生土器 器台	弥生/後期		胎土：緻密、粗砂を顕著に含む。 断面：薄層状。 器表：明るい灰みの黄（2.5YR 7.5/2 砂色）。
5266	4	3	G35-3813 1 層下部	土師器 壺	古墳/前期		胎土：緻密、粗砂・細礫を含む。 断面：団粒状。 器表：柔らかい黄赤（6.5YR 7/6 燻羅色）。
5267	4	3	G35-7711 1 層下部	弥生土器 碗	弥生/終末期	外面のはげ全面、 内底面に煤状の付着物（斑状、黒色）	胎土：やや粒状性、粗砂を少量含む。 断面：団粒状。 器表：灰みの赤みを帯びた黄（9YR 5.5/2.5 空五倍子色 *やや赤み）。
5399	4	3	G35-2854 1 下層	弥生土器 器台			胎土：粒状性あり、細礫を含む。 断面：顕著な団粒状。

図31 谷4-1下層出土遺物（1：4）

はよく留めており、銭銘は明瞭に残る。現状で径2.1cm、縁部の厚さ0.1cm弱、重量0.8gを測る。



成形・調整	計測 精度	口径/ 長さ	底径/ 幅/径	器高/ 厚さ	計測値 備考	遺存 [継・伏部]
内面：縁れ部に縦方向の指押え、上下部撫で調整。 外面：外面全体撫で調整（器表荒れのため詳細不詳）。 口縁端面：左下がりの斜め目（縁）。	復原	209				上半部、器 表の荒れ顕 著
内面：頸部に縦方向の指押え、周回方向に並列。口縁部はか撫で 調整。 外面：口縁部など器表の遺存部は撫で調整。	復原	277				体部を欠く、 器表の大部 分は剥落
手捏ね成形。 内面：指押え→口縁に沿う方向で、粗目の刷毛目調整、底部では 口縁に直交する方向の刷毛目調整。	実測	131		63		口縁の一部 を欠く
器表：明るい灰みの赤みを帯びた黄（10YR 7/2.5 ベージュ）； 内面：縁れ部に縦方向の指押え、上下部撫で調整。； 外面：外面全体）縦方向の刷毛目調整（平行して密に）→受部） 周回方向の撫で調整。	実測	198				裾部を欠く

土壇600 (図32~34)

35-3832区に位置する。1下層遺物取り上げ後、溝427上面で検出した土壇である。覆土は1下層と同質で強粘質の黒褐色粘土である。平面では楕円形状を呈し長径0.7m、短径0.6mを測る。断面は深い逆台形状を呈し深さ0.4mを測る。

出土遺物 (図37)

遺物は覆土下半部で投棄されたような状態で土器片が出土した。また、木片が混じるなかに木器が1点出土した。遺物の構成を21頁表に示す。

弥生土器が破片で含まれるが、土師器は1個体の甕が投棄されたような状態で出土した。

4214は土師器甕である。1/2強の部分进行接合、復原することができた。体部内面は、中位から頸部直下まで水平に近い左方向の篋削り調整を行う。下位は縦方向に近くなる。頸部内面には指押さえ痕が並列する。体部外面は果てめ調整、口縁部の内外面には周回方向の撫で調整が行われる。肩部以下の体部外面には煤状の付着物、内面には黒褐色斑状の付着物が残る。また、胴部中位には穿孔が行われている。焼成後、外方からの衝撃によるものである。口径14.2cm、器高23.2cmを復原できる。

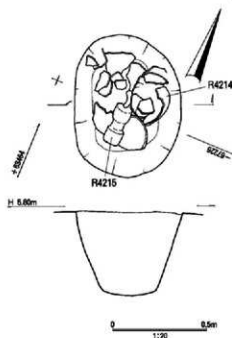


図32 土壇600 (1:20)



図33 土壇600・601 (東から)

遺構番号	単位遺構	遺物量	遺物構成		
600	600	lp	+土師器 +弥生土器 •	+古墳・前期 +後周 •	+甕(大破片)。 +器台(上半部)。 +大形甕(口唇部細片、丹塗り)。
601	601	mp	+土師器 +弥生土器 •	+時期不詳 +後期～終末期 +中期(須玖式)	+甕(厚い丸底部)。 +大形甕(体部細片、突帯部)。 +甕(口縁部細片)。



図34 土壙600(南から)



図35 土壙601(南から)

4215は編鐘である。丸木の両端を落とし、中央に溝を切る。長さ21.2cm、径10.1cmを測る。

土壌601 (図33・36・35)

35-3832区で、土壌600に近接した位置にあり、検出面を同じくする土壌である。覆土も同質で強粘質の粘土である。平面では楕円形状を呈し、長径1.1m、短径0.8mを測る。断面は逆台形状を呈し、深さ0.3mを測る。底面は平らである。底面近くに薄のような植物が敷き詰められたような状態で出土した。

出土遺物 (図37)

遺物は少量の土器片が覆土中から散漫に出土した。遺物の構成を21頁表に示す。中期から週環までの弥生土器が出土するなかに、土師器が混じる。

5234は土師器甕底部である。厚い底部で、内底面には指押さえ痕が残る。外面は刷毛目調整が行われる。底部外面の荒れが顕著である。

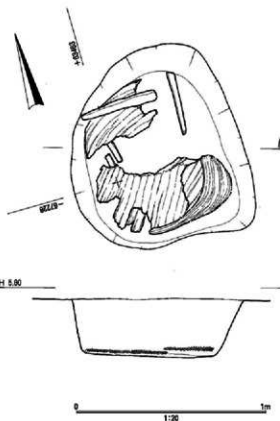


図36 土壌601 (1:20)

5. 谷4-2層と2層下面出土の遺構と遺物

2層出土遺物の報告に続けて、遺構、流路その他の順に報告する。

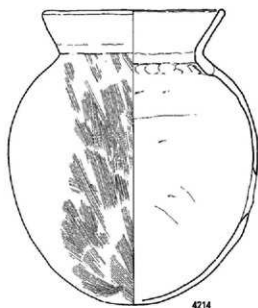
列記すると、谷4岸部の溝603、2層掘り下げ中に検出した土壌229、同深度で検出した杭列230、底面で検出した杭列228、流路448・449、流路597・598、流路599、凹地604、流路602の順である。

遺物番号	遺構番号	区	出土位置	遺物種別	年代	遺物特記	材質 (胎土・焼成・施塗)
4214	600	3	G35-	土師器 甕	古墳前期	肩部以下の体部外面に楕状付着物。内面には黒褐色斑状の付着物。	胎土：やや粒状性、粗砂、褐色相粒を少量含む。 断面：やや塊状。 器表：やわらかい赤みの黄 [7.5YR 6.5/4 芝敷茶]。
5234	601	3		土師器 甕			胎土：粒状性あり、細塵を含む。 断面：団粒状、細孔を生じる。 器表：くすんだ赤みの黄 [7YR 5.5/4 コルク]。

谷4-2層 (図38~41)

調査2区 (谷1次地点) 北端から1区・3区にかけて、3区東部を除き、谷埋積層の分布範囲の大部分を覆う層である。黒褐色で、繊維化した植物遺体を顕著に含む泥炭質の粘質土である。部分的に砂の薄層を挟むようなところがあり、別の流路などの可能性が考えられるが、調査中に確認することができなかった。

また、下部に砂質の泥炭層が分布する位置があり、調査時2c層と呼称したが、ここでは2層に含め遺物を報告する。3区東部では下面の調査の段階で流路を検出した (流路448・449・599) が、その上部はおそらく2層として掘り下げ、遺物を記録した部分に含まれるものとみられる。



4214



6234



4214



4215

1:2

成形・調整	計測 精度	口径/ 長さ	底径/ 幅/径	器高/ 厚さ	計測値 備考	遺存 (観・状態)
体部内面：左方向の捺刷り調整（水平に近い）。 体部外面：縦方向の刷毛目調整。 頸部内面：体部側と屈曲部の2段に指押し痕。 口縁部：内外面）周回方向の捺で調整。	復原	142		232		口縁部の一 部、底部を 欠く
内面：底面）指押し痕。 外面：刷毛目調整。底部は荒れが顕著。						底部

図37 土壙600・601出土遺物（1:4）

さらに、今回2層として報告する2層下面、3層出土とした遺物は、後述する溝427の掘削時、廃土層として形成された部層出土のものである可能性大である。

出土遺物（図7・42～50）

遺物は土器類については層中から散漫に出土したほかに1区谷4北岸、3区西端部谷部北岸では投棄されたように集中する出土状態がみられた。ただし、破片化したものがほとんどであり、接合復原は殆どできなかった。今回調査において2層出土遺物が最も多いが、試みにその土器重量を計測してみると、1.3t程の分量となった。

木質の資料については、部分的に出土状況を記録してみたところでは極端に偏る地点は無く、全体

に散漫に出土しているような感じを受ける。そのなかで木器については、下位の溝427に重なる位置からの出土が最も多いが、そのほかに35-66区から35-75区にかけての位置に偏って出土した。図40に示すのは前者の、図41に示すのは後者の位置での出土状況である。

以下、図7にガラス製品を示す。土器と石製品について図42～45・49・50に、木器については図46～48に示す。

図7上段にガラス管玉を示す。787は円筒形で、器壁の極薄い資料である。縦に引き延ばした筋が顕著である。縦に割れており、右図に断面を示す。長さ1.2cm、径0.3cm、重量0.1gを測る。1771はやや紡錘状、器表は風化白化する。長さ2.1cm、径0.5mm、重量1.2gを測る。981も同形状、遺存状態で、長さ2.1cm、径0.5mm、重量1.1gを測る。

図7下段にガラス小玉を示す。これは小形の401・980・947・1817と比較的大形の577・788とに分かれる。前者はあざやかな緑みの青色（2.5B 5/8）、後者は暗い紫みの青色（6PB 2 $\frac{2}{5}$ /4）を呈す。いずれも巻き付けによる成形か。以下、計測値を列記する。401は径0.4cm、高さ0.3cm、重量0.1g。980は径0.3cm、高さ0.2cm、重量0.1g未満。947は径0.3cm、高さ0.3cm、重量0.1g未満。1817は径0.3cm、高さ0.2cm、重量0.1g未満。788は径0.4cm、高さ0.3cm、重量0.1g。577は非常にいびつである。径0.7cm、高さ0.7cm、重量0.5g。

土器は大破片以上の資料を掲げる。図42・43に弥生土器壺を示す。以下、詳細は表中に示す。

5263・5257は口縁端が屈曲する広口壺である。2者では屈曲の度合いが異なる。5290は無頸の壺である。5259・5262は・5292は下半部の資料である。底面は平底か、ごくわずかに凸面状を成す。

図43に示す3701・5256は鬺先状口縁壺である。5256は相互に接合しない口縁部・体部・底部の資料がある。いずれも頸部基部に三角形の突帯を貼り付ける。

図44に甕を示す。大小の器形がある。比較的小形の5274・5260は全形がわかる。5260の外底面は浅い凹凸が残り、作業台の圧痕かと考えられる。5270・5272・5293は下半部破片である。底面は平面若しくはごくわずかに凹面を成す。胴部内面に左上がりの撫で調整が行われる。条線が明瞭に残りあるいは刷毛目調整とすべきか。

図45・49にそのほかの器形の弥生土器および土師器を示す。4268・5275は鉢である。5269・3703も鉢とするが、口縁が外反、端面を形成する。3703は大形である。5261は杓子形土器の身部である。

5276は把手付きの杯の体部である。弧状とみられる把手部は欠失して接合部が残る。

5285は土師器高坏である。坏部は下半部で屈曲外反して開く。口縁端は内外面の周回方向の撫で調整により端面を形成する。坏部、脚部とも縦方向の刷毛目調整をおこない、坏部はさらに撫で調整を銜える。坏部径20.9cm、脚部径13.9cm、器高13.3cmを測る。



図38 谷4-2 層遺物出土状況（35-85～96区）（東から）



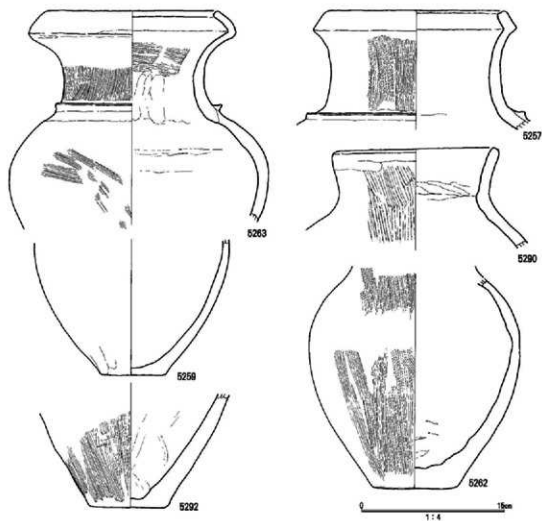
図39 谷4-2 厨造物出土状況
【35-0545区】（東から）



図40 谷4-2 厨造物2331出土状況
【35-4733区】（北から）



図41 谷4-2厨造物2909出土状況
【35-7663区】（南から）

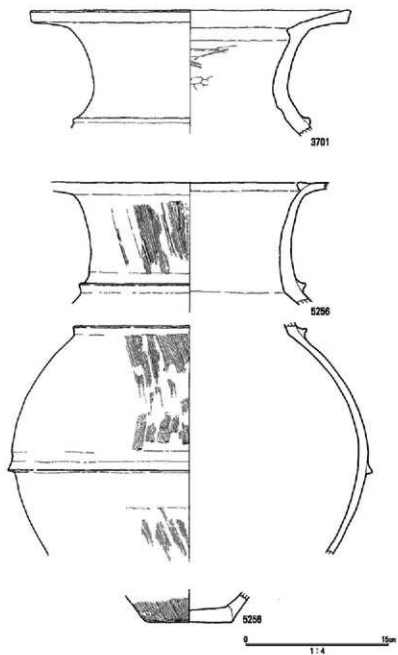


遺物番号	遺構番号	区	出土位置	遺物種別	年代	遺物特記	材質(胎土・焼成・施釉)
5257	4	3	G35-7612 3層上部	弥生土器 壺	弥生/後期	頸部以下の内面に火跳ね状の剥落。径は小さく、深い。	胎土：粒状性あり、粗砂、礫(花崗岩)を含む。 断面：薄層状、孔隙を生じる。 器表：くすんだ黄赤(2YR 6/8 細)を呈する部分は化粧掛けによるものか。それ以外は、やわらかい赤みの黄(9YR 7.5/4 低粉色)。
5259	4	3	G35-7623 2層	弥生土器 壺	弥生/後期		胎土：粒状性、粗砂を顕著に含む。胎しい。 断面：団粒状。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット)。
5262	4	1	G35-0545-1 2層下部	弥生土器 壺	弥生/後期		胎土：顕著な粒状性、粗砂～小礫を含む。胎しい。 断面：顕著な団粒状。 器表：明るい灰みの黄(2.5YR 7.5/2 砂色)、器表下はやわらかい赤みの黄(7.5YR 6.5/4 芝蔴茶)。
5263	4	1	G35-0545-1 2層下部	弥生土器 壺	弥生/後期		胎土：緻密、粗砂・礫を含む。 断面：団粒状。中央部黒化。 器表：明るい灰みの黄(2.5YR 7.5/2 砂色)。
5290	4	3	G35-7614 2層	弥生土器 後期	弥生/後期		胎土：粒状性、粗砂を顕著に含む。 断面：団粒状。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット)や赤み。
5292	4	3	G35-8555 2c層	弥生土器 壺	弥生/後期		胎土：粒状性あり、細礫を含む。 断面：顕著な団粒状。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット)。

図42 谷4-2層出土遺物1(1:4)



成形・調整	計測 種別	口径/ 長さ	底径/ 幅/径	器高/ 厚さ	計測値 備考	遺存 [量・状態]
内面：撫で調整。 外面：縦方向、粗目の刷毛目調整を密に施す。 口縁部：口縁端面整形→周回方向の撫で調整。	実測	211				口縁部
内面：体部全体に撫で調整（工具の当て痕が各所に残る）。 外面：大部分の器表が剥落。遺存部には縦方向の刷毛目調整。 底面：平底。縁部は部分的に丸み。	実測		72			底部、外面の器表剥落。
内面：撫で調整。 外面：縦方向の刷毛目調整。 底面：平底、縁部やや丸み。底面に粉圧痕。	実測		82			下半部
内面：口縁部付近に周回方向の撫で調整・頸部下半に縦方向の指押→上半部に斜方向の刷毛目調整(粗目)。体部中位の最大部に周回方向の撫で調整(強く、条線が残る)。 外面：頸部に縦方向粗目の刷毛目調整(密)・体部に斜め方向粗目の刷毛目調整(疎)。撫で調整→突帯貼り付け→突帯と上下の体部に斜め方向の撫で調整。 口縁部：周回方向の撫で調整。	実測	222				上半部
内面：口縁部下半以下の全体に指押え痕。 外面：口縁部以下短く区切左上方向の粗目の刷毛目調整。 →口縁部上半まで周回方向の撫で調整(口縁端面の成形)。	実測	173				口縁部
内面：撫で調整。部分的に斜行する条線を残す。 外面：縦方向の刷毛目調整。短い単位で上方に向かう。 底面：平底、縁部丸み。	実測	80				底部、器表の荒れ顕著。

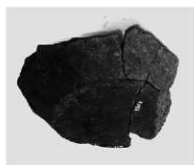


遺物番号	遺構番号	区	出土位置	遺物種別	年代	遺物特記	材質〔胎土・焼成・地味〕
3701	4	3	G35-6613 2 c層	弥生土器 壺	弥生 後期		胎土：粒状性、粗砂～細礫を顕著に含む。 断面：薄層状、孔隙顕著。 器表：暗い黄赤（10R 4/7）。
5256	4	3	G35-7615 2 層	弥生土器 壺	弥生 後期		胎土：やや粒状性、粗砂を顕著に含む。 断面：顕著な団粒状。 器表：くすんだ黄赤（2YR 5.5/6 土褐色）。

図43 谷4-2層出土遺物2 (1:4)

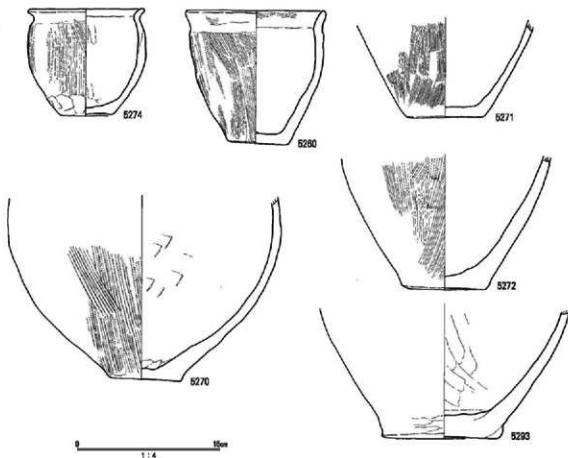


3701



5256

成形・調整	計測 精度	口径/ 長さ	底径/ 幅/径	器高/ 厚さ	計測値 備考	遺存 (部・状態)
内面：口縁部以下の全体に凹凸（指押えか）→撫で調整→頸部中位以上に斜め方向で凹線状の調整痕。 外面：頸部に斜方向で凹線状の調整痕（往復する）→口縁に沿う方向の刷毛目調整。 口縁部：端部に周回歩行の整形を行い、端面を形成、上面に短い単位の磨き調整。	復原	337				頸部以上で、1/3の破片
内面：体部）斜行する極粗目の刷毛目調整（撫で調整？）→頸部から体部）撫で調整。 外面：口縁部以下底部まで斜方向の極粗目の刷毛目調整→突帯貼り付け（肩部・体部、周回方向の撫で調整、幅広い）・口縁部と直下の頸部に周回方向の撫で調整。	実測	93		体部径：372、器高：400+		1/2の分量があるが、全体を接合できない。



遺物番号	遺構番号	区	出土位置	遺物種別	年代	遺物特記	材質(胎土・焼成・施釉)
5280	4	3	G35-5655 2層	弥生土器 甕	弥生後期		胎土：粒状性、粗砂を含む。 断面：団粒状。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(9YR 5.5/2.5 空五倍子色)。
5270	4	3	G35-7625 2層	弥生土器 甕	弥生後期		胎土：粒状性あり、粗砂・細礫を含む。 断面：薄層状、細孔を生じる。 器表：くすんだ黄赤(2YR 5/3?)を呈する部分は化粧掛けによるものか。それ以外は、やわらかい赤みの黄(9YR 7.5/4 磁粉色)。
5271	4	3	G35-7626 2層	弥生土器 甕	弥生後期	内面の全面に付着物(煤状、黒色、部分的に厚み)	胎土：やや粒状性、細礫を含む。 断面：薄層状。 器表：暗い灰みの黄赤(5YR 4.5/3 灰赤)。
5272	4	3	G35-7625 2層	弥生土器 甕	弥生後期		胎土：緻密、粗砂を顕著に含む。 断面：顕著な団粒状、孔隙を生じる。 器表：やわらかい赤みの黄(1.5YR 6.5/4 芝黄)。
5274	4	3	G35-6645 2層	弥生土器 甕	弥生中期		胎土：緻密、粗砂を含む。 断面：薄層状、細孔を生じる。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケケット)。
5293	4	3	G35-95 2層	弥生土器 甕	弥生後期		胎土：緻密、粗砂を含む。 断面：やや、薄層状。部分的に黒化、焼成は高い。 器表：明るい灰みの黄(2.5YR 7.5/2 砂色)。

図44 谷4-2層出土遺物3 (1:4)



5274



5260



5270



5271

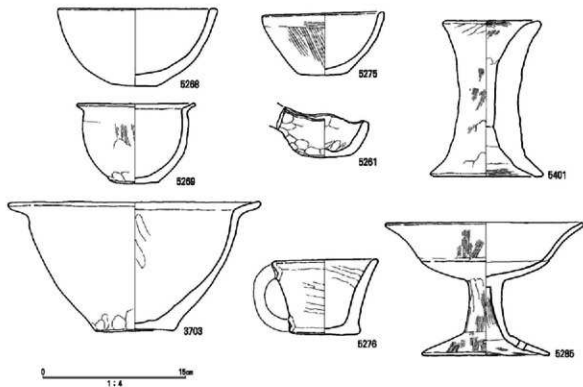


5272



5263

成形・調整	計測 精度	口径/ 長さ	底径/ 幅/径	器高/ 厚さ	計測値 備考	遺存 (口・状態)
内面：口縁部に周回方向の撫で調整→体部撫で調整。 外面：縦方向で粗目の刷毛目調整→口縁部周回方向の撫で調整。 底面：平面、浅い凹凸面が全体に分布(作業台圧痕か)。	実測	151	68	139		口縁部の一部を欠く
内面：刷毛目調整→左上がりの撫で調整(爪圧痕のような工具当て痕が残る)。 外面：縦方向、左上方向の粗目の刷毛目調整。 底面：やや凸面(周縁部が緩い曲面)、縁部は体部側にはみ出す部位あり。	実測		82		底径は平均値；実厚はいびつで、長径85、短径79の端円形状。	体部
内面：撫で調整。 外面：底部まで縦方向で粗目の刷毛目調整。	実測		83			底部(細片化、接合)
内面：撫で調整。 外面：縦方向の粗粗目の刷毛目調整→底部付近撫で調整。	実測		89			底部
内面：撫で調整→上半部に周回方向の撫で調整(断続)。 外面：体部縦方向で粗目の刷毛目調整→底部付近に撫で調整・口縁部付近から口縁端まで内外面周回方向の撫で調整。	復原	112	56	109		1/3を欠く
内面：内底面指押入(内底面粘土貼り付け)。体部に左上がりの撫で調整(条痕が明瞭、刷毛目調整?)。 外面：部分的に縦方向の刷毛目調整(粗目)。 底面：緩い凹面、縁部に丸み、つぶれ。	実測		122			底部



遺物番号	遺構番号	区	出土位置	遺物種別	年代	遺物特記	材質(胎土・焼成・施釉)
3703	4	3	G35-6813 2 c層	弥生土器 鉢	弥生 中期	内面に火跳ね状の 剥落。	胎土：顕著な粒状性、粗砂を含む。 胎色：薄層状。 断面：薄層状。 器表：薄く剥落。やわらかい赤みの 黄(8YR 7.5/4 磁粉色)。
5261	4	3	G35-7825 2 層	弥生土器 杓子 形土器	弥生 後期		胎土：やや粒状性、粗砂を含む。 断面：団粒状、細孔を生じる。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット)、内面はくすん だ黄赤(2YR 5.5/6 土褐色)。くら い灰みの赤みを帯びた黄(8.5YR 4. 5/2 フェーン *より黄み)。
5268	4	3	G35-9526 2 c層	弥生土器 鉢	弥生 後期		胎土：粒状性、粗砂を含む。 断面：団粒状。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット)。
5269	4	3	G35-9515 2 c層	弥生土器 鉢?	弥生 後期		胎土：緻密、細砂を含む(長石顕著)。 断面：薄層状。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット)。
5275	4	3	G35-5732 2 層	弥生土器 鉢	弥生 後期		胎土：やや砂質、粗砂を含む。 断面：やや団粒状。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット *やや赤み)。
5276	4	3	G35-7815 2 層	弥生土器 把手 付杯	弥生 後期		胎土：やや粒状性、粗砂を含む。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット)、内面はくすん だ黄赤(2YR 5.5/6 土褐色)。
5285	4	3	G35-4755 2 層	土師器 高坏	古墳 前期		胎土：緻密、粗砂をわずかに含む。 断面：均質、細孔を生じる。 器表：柔らかい黄赤(6.5YR 7/6 燻褐色)。
5401	4	3	G35-9535 2 層下部	弥生土器 器台	弥生 後期		胎土：粒状性あり、粗砂を含む。 断面：顕著な団粒状。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット)。



5268



5276



5269

成形・調整	計測 精度	口径/ 径さ	底径/ 幅/径	器高/ 取さ	計測値 備考	遺存 (體・状態)
内外面撫で調整→周回方向の撫で調整、底部に沿い指押え痕。 底面：わずかに凹面を成す。縁部やや丸み。	実測	266	81	137		口縁の一部を欠く。外面の剥落顕著。
内外面：指押え痕。 柄部：断面楕円形。	実測	88	50		本体部平面楕円形状	柄部を欠失
手捏ねによる成形？ 内面：撫で調整→底面に指押え痕。 外面：撫で調整。	実測	73		79		口縁部の一部を欠く
内面：口縁部に周回方向の撫で調整→体部に左上がりの撫で調整。底面に指押え痕。 外面：縦方向の粗目の刷毛目調整→口縁部から直下の体部に周回方向の撫で調整（右方向？）・体部下半に撫で調整・底部付近に指押え痕。 底面：縁部ややつぶれ。わずかに凸面を成す。	復原	125	50	85	*底径は実測	1/3を欠く
内面：撫で調整。 外面：縦方向で粗目の刷毛目調整→口縁付近に周回方向の撫で調整→全面に撫で調整。 口縁部：撫で調整により丸み。 底面：ごくわずかに凸面、縁部に丸み。	実測	125	52	65		完存（接合）
内面：撫で調整、左上がり部分は隠磨き調整か。 外面：縦方向で粗目の刷毛目調整→左上がりの撫で調整（隠磨き調整か）・把手貼り付け。 底面：わずかに凸面。	実測	113	73	78		把手部を欠く
坏部：内面撫で調整。外面：縦方向で粗目の刷毛目調整→撫で調整。口縁端部は、内外面に周回方向の撫で調整をおこない、端面整形。 脚部：踵部内面に絞り痕、踵部に縁部に沿う刷毛目調整。外面に粗目の刷毛目調整。	復原	209	133	139		坏部、脚部の一部
成形：板状の素材粘土を軸に巻き付け？ 受部内面・基部内面：縁部に沿う粗目の刷毛目調整。 外面：縦方向で粗目の刷毛目調整→撫で調整。	実測	104	119	166		端部を欠く

谷4-2層出土石製品を図50に示す。今次調査においては、礫利用の叩石など以外の石製品の出土は極少なかった。その中では、2層出土の資料が最も多い。

5427・5063・5435・5065は石鏝である。いずれも素材は滑石である。大小ある。5427は大形の石鏝で、片側に寄って穿孔がある。5063・5065は中央部に穿孔があり、それを通して長軸方向の溝を切る。5435では穿孔はせず、縦横に溝を切る。5427は長さ10.0cm、幅4.8cm、厚さ4.1cm、重量270g。5063は長さ6.7cm、幅3.0cm、厚さ2.4cm、重量56g。5435は長さ4.8cm、幅2.4cm、厚さ1.7cm、重量27g。5065は長さ6.2cm、径2.4cm、重量42g。

772は石杵である。くの字状の円礫の両側面と下面に叩き潰し状の加工を行う。下面のそれはおそらく使用によるものであろうが、平滑になるまですり減っている。素材は珪質砂岩。高さ16.6cm、幅8.4cm、厚さ5.7cm、重量1,482g。

図46～48に谷4-2層出土の木器を示す。図46に鎌ほかを、図47に尖頭器と区分した木器、他を図48に尖頭器をそれぞれ示す。

図46の1800は平鎌である。細身で刃部が弧状を成す。長さ30.0cm、幅10.1cm、厚さは頭部で1.9cmを測る。1806は二又鎌である。腐蝕が著しく進行している。長さ59.0cm、幅12.5cm、厚さは頭部で1.8cmを測る。576・2156・2058は鎌断片で、腐蝕が著しく進行している。

2057は板状で、一端に脚のような突起がある。長さ14.9cm、幅4.0cm、厚さ0.5cmを測る。スギ材か。3756は頭部を山形に整形している。長さ14.0cm、幅2.9cm、厚さ東部で0.8cmを測る。2056は反りのある脚状の部材とその支柱状の部分を削り出したものである。接合部から分離している。原形を推測できない。長さ26.5cm、幅2.3cm、厚さ1.6cmを測る。

図47の3191は横槌とする。細身で、柄部が短い。腐蝕が進んでいる。長さ41.0cm、径3.1cmを測る。554も横槌とする。長さ39.9cm、径4.8cmを測る。下段の789は鎌具か、2破片に分離して、接合しない。また、下端部を欠く。現状で長さ50.0cm、幅6.2cm、厚さ1.6cmを測る。2331は板状で、四隅付近と長側辺の片側に寄って長方形の穿孔がある。孔位置は不規則である。全体に腐蝕が進行しており、孔縁部の擦れ等は判然としない。長さ62.7cm、幅14.9cm、厚さ3.1cmを測る。図右端の2909は細い板状で、両端を薄く削いでいる。稜線や角部は擦れたように丸みを帯びている。細部を左に示す。長さ184.4cm、幅3.5cm、厚さ1.9cmを測る。

図上段中央は尖頭器である。2層出土例では長さに対する幅の大小2分できる。ここでは幅広の資料を示す。3204は長さ60.7cm、径2.6cmを測る。2052は長さ31.8cm、幅2.4cm、厚さ1.1cmを測る。5386は基部を薄くそぐ。長さ25.6cm、径1.2cmを測る。

図48に幅細の尖頭器を示す。3188は長さ38.2cm、径1.1cmを測る。基部を薄く削ぐ。2945・5449は基部で結束したような位置関係で出土した。2945は長さ32.2cm、径0.9cmを測る。5469は長さ33.1cm、径1.0cmを測る。いずれも基部は細く尖る。1804は長さ35.6cm、径0.8cmを測る。腐蝕が著しい。1802は基部を欠く。長さ29.9cm、径1.3cmを測る。

下段の1382は長さ24.9cm、径0.9cmを測る。925は薄く削いだ基部の資料。長さ29.0cm、径1.7cmを測る。923は長さ42.2cm、径1.2cmを測る。3190は先端部を欠く資料。長さ31.8cm、径1.7cmを測る。578は長さ39.2cm、径1.7cmを測る。1803は両端を欠く。現状で長さ11.3cm、径0.7cmを測る。773も両端を欠く。現状の長さ23.9cm、径1.5cmを測る。

1805は特に大形の資料である。先端は研磨されて鋭く尖り、体部中央から基部にかけて薄く削ぎ、着柄あるいは組み合わせのための形状を整えている。素材に規制されてか中央部に「く」の字形に屈曲する。長さ79.8cm、幅3.1cm、厚さ2.1cmを測る。

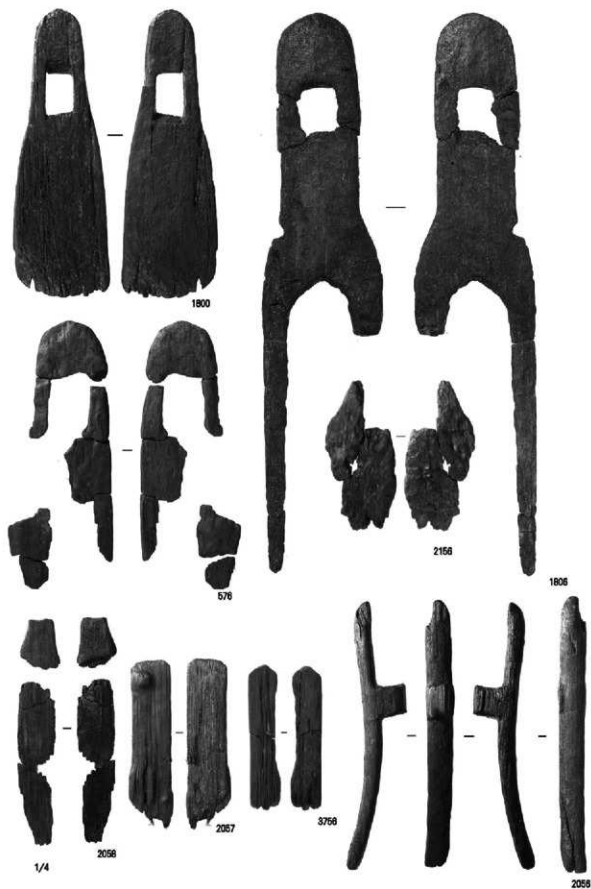


图46 谷4-2层出土器物5



圖47 谷4-2層出土遺物6



圖48 谷4-2層出土遺物7

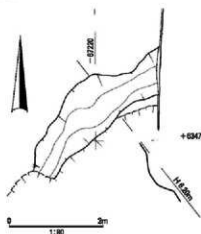


図49 谷4・2層出土遺物 8

遺物番号	遺構番号	区	出土位置	遺物種別	年代	遺物特記	材質(胎土・焼成・施釉)
5236	603	3	G35-2852	弥生土器 甕	弥生/ 後期?		胎土: やや粒状性、粗砂を含む。 断面: 薄層状、堅緻。 器表: 灰みの赤みを帯びた黄 (8YR 6.5/3 ビスケット)。
5237	603	3	G35-2852	弥生土器 甕	弥生/ 後期		胎土: 粒状性、細砂を含む。 断面: 団粒状。 器表: 灰みの赤みを帯びた黄 (8YR 6.5/3 ビスケット)。
5238	603	3	G35-2852	弥生土器 甕	弥生/		胎土: 粒状性、粗砂を含む。 断面: 団粒状、薄層状。 器表: くすんだ黄赤 (5YR 5.5/6.5 胡桃色)。



図50 谷4-2層出土遺物 9



溝603 (図50)

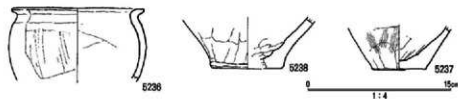
35-28区に位置する。溝423~425に平行して、谷4中にある。北東方向に曲流しながら流れたものと推測される。南西端で流路448または449により切り取られている。現況で、幅1.0m前後、深さ0.2mほどが遺存する。覆土は灰色みの強い黒褐色砂混じり粘質土。

出土遺物 (図51)

遺物は覆土中から散漫に出土した。内容を下表に示す。図示するものは、いずれも弥生時代後期土器の小破片資料である。

図51 溝603 (1:80)

遺物番号	単位遺物	遺物量	遺物構成	
603	603	mp	+弥生土器 +後期	+壺 +壺 +口蓋 (体部破片、頸部突起1条)。 +短頸壺 (口縁部破片)。 +その他 (底部他は体部破片、器形・時期不詳)。



成形・調整	計測精度	口径/長さ	底径/幅/径	器高/厚さ	計測値備考	遺存(破・状態)
体部内面：撫で調整・体部外面：縦方向粗目の刷毛目調整。一口縁部：やや下がった位置まで周回方向の撫で調整。	復原	140				上半部小破片
内面：底面に指押え痕→全体に撫で調整。一部に工具を当てた痕跡。 外面：底部近くの全周に指押え痕→縦方向の刷毛目調整。	実測	58			*底面の歪み顕著。	底部
内面：指押え。 外面：板状工具による撫で調整 (底部付近から上方に向かう)。	復原		78			底部破片

図52 溝603出土遺物 (1:4)

土壌229 (図52・53)

35-05区に位置する。谷4-2層を掘り下げ後、土層断面で初めて確認した。掘り下げ中、土器片が特に密集することには気づいていたが、水が抜けた状態で平面を確認することはできなかった。断面の状態から復元すると、径が1.2m、深さが0.7mほどの規模である。覆土は灰みのある黒褐色粘土塊が混じる灰オリーブ色の粘質土である。上部は広がった状態であり、自然に埋没したものか。掘り込み面は2層下面かそれ以上、中程に土器片が密集して出土する部分がある。

出土遺物 (図54・55)

遺物は密集して出土する部位がある。総量でコンテナ1箱ほどの分量である。土器遺存状態は良好で、比較的大きな破片がある。遺物の構成を下表に示す。

5241・5241は壺で、器壁が厚く、やや軟質。この資料のみ遺存状態が不良である。5291・5249・5240・5243・5244は甕である。全体として色調は、灰みがある。底部は、平底のものやや凸面を成すものがある。5245は甕である。5247は紡錘車未成品か。板状の素材の周縁部を擦り削りする段階の資料である。

遺構番号	単位遺構	遺物種	遺物構成
229	229	sc	+弥生土器 +後期 +壺 (口縁部、胴部の大破片を含む) ・ +甕 (接合して全形を復元できる資料を含む) +石製品 +紡錘車 (未成品)
230	228		+杭(丸木杭)



図53 土壌229・杭列230 (東から)

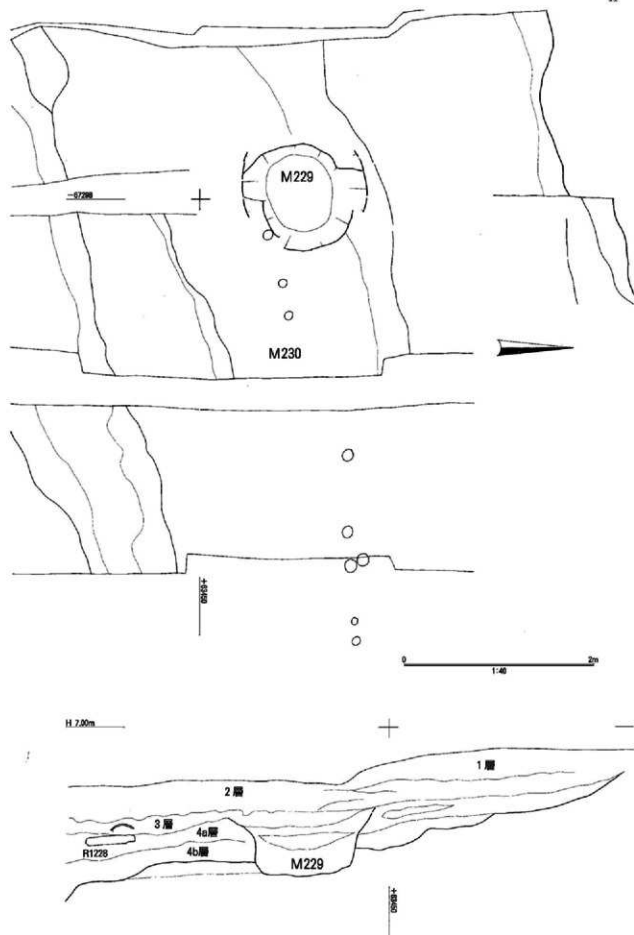
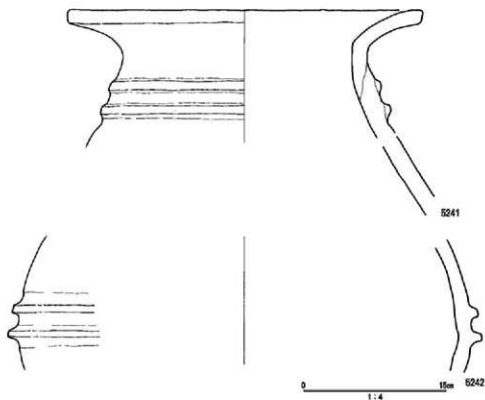
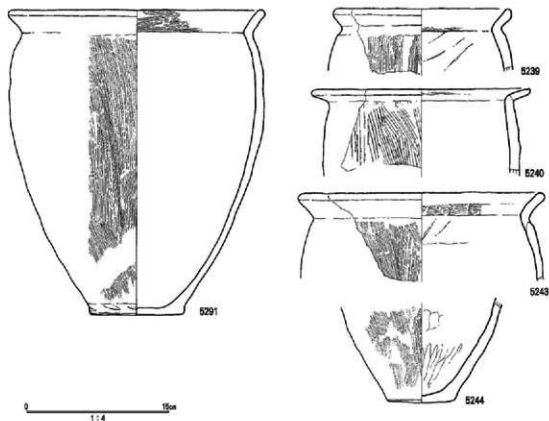


圖54 土坑229・坑列230 (1:40)

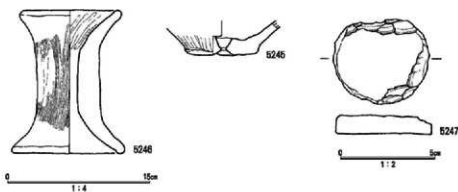


遺物番号	遺構番号	格子	出土部位	遺物種別	年代	遺物特記	材質(胎土・焼成・施種)
5239	229	1	上部密集部	弥生土器 甕	弥生/後期		胎土：粒状性、粗砂を含む。 断面：団粒状。孔隙を生じる。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(9YR 5.5/2.5 空五倍子色)。
5240	229	1	上部密集部	弥生土器 甕	弥生/後期	口縁端以下の外面全体に煤状の付着物。	胎土：やや粒状性、粗砂を含む。 断面：密い層状。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット)。
5241	229	1	上部密集部	弥生土器 甕	弥生/後期		胎土：緻密、細砂を多量に含む。 断面：顕著な団粒状(花崗岩起源か)。 器表：柔らかい黄赤(6.5YR 7/6 燻羅色)。
5242	229	1	上部密集部	弥生土器 甕	弥生/後期		胎土：緻密、原料の上下で色調が異なる。上部：灰みの赤みを帯びた黄(9Y R 5.5/2.5 空五倍子色)。下部：明るい灰みの黄(2.5YR 7.5/2 砂色)。 断面：団粒状。 器表：完全に剥落。
5243	229	1	上部密集部	弥生土器 甕	弥生/後期	外面に煤状の付着物(黒褐色、薄い)。	胎土：粒状性、粗砂を含む。 断面：団粒状。 器表：くすんだ黄赤(2YR 6/8 煤)。
5244	229	1	上部密集部	弥生土器 甕	弥生/後期		胎土：緻密、細砂を含む。 断面：団粒状。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット) やや明るい)。
5291	229	1	上部密集部	弥生土器 甕	弥生/後期	底部周辺から体部下部の内面に膠着物(黒褐色、薄い)。口縁端から底部付近の外面に煤状の付着物(斑状)。	胎土：粒状性、粗砂・細砂を含む。 断面：顕著な団粒状、孔隙を生じる。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(9YR 5.5/2.5 空五倍子色)。

図55 土坑229出土遺物1 (1:4)



成形・調整	計測 精度	口径/ 長さ	底径/ 深/径	器高/ 厚さ	計測値 備考	遺存 〔線・状態〕
内面：口縁部 口縁に沿う方向の刷毛目調整→撫で調整→体部撫で調整（右上方向）。 外面：口縁部から体部にかけ、縦方向で細目の刷毛目調整→頸部から口縁部 周回方向の撫で調整。	復原	188				口縁部細片
内面：口縁部 口縁に沿う方向の粗目の刷毛目調整→周回方向の撫で調整（密い）→体部撫で調整（方向は不整）。 外面：口縁部～体部縦方向で細目の刷毛目調整→頸部以上）周回方向の撫で調整（密い）→端面撫で調整内外面にはみ出し。	復原	231				口縁部細片
口縁内面：口縁に沿う方向で、短い単位の刷毛目調整。	復原	371				口縁部細片、 器表の大部分 脱落
器表は暗くして不詳。実帯には刻み目？（別資料から）。						体部細片
内面：口縁部 口縁部に沿い短い単位の刷毛目調整連続（左向きで左方向に進行）。・体部 撫で調整→頸部と直下の体部 撫で調整（工具の当て態が残る、右斜め上方向）。 外面：頸部以下の体部）縦方向の刷毛目調整（細目、密）→口縁部～頸部）周回方向の撫で調整。	復原	260				口縁部細片 （同一器体 資料多数ある が、接合 しない）
内面：体部）撫で調整・底部）簞状の工具による撫で？（条線が残り、溝状）。 外面：縦方向の刷毛目調整。	実測	69				底部
内面：口縁部 口縁に沿う方向の刷毛目調整→体部内面）撫で調整。 外面：体部の全体）縦方向で揃った粗目の刷毛目調整→口縁部に沿う方向の撫で調整。	復原	271	100	322		上半部の2/ 3を欠く



杭列230 (図52・53)

35-05区に位置する。谷4-2層を掘り下げ中に検出した。径10cm前後の杭が間隔を開けて打たれている。全体の配列は、現場では確認できず、図上での確認である。杭の1本は土塊229と重複してそれよりも新しい。調査区内で5mの距離で、谷4北岸に平行して配列している。いずれも丸木杭である。

遺物番号	遺構番号	格子	出土部位	遺物種別	年代	遺物特記	材質(胎土・焼成・施種)
5245	229	1	下半部	弥生土器 甕	弥生/後期		胎土：緻密、粗砂を顕著に含む。 断面：厚粒状。 器表：明るい灰みの黄(2.5YR 7.5/2 砂色)。
5246	229	1	下半部	弥生土器 器台	弥生/後期		胎土：緻密、粗砂を顕著に含む。 断面：厚粒状、明るい灰みの黄(2.5YR 7.5/2 砂色)。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(RYR 6.5/3 ビスケット)。
5247	229	1	上部密集部	石製品 紡錘車			滑石か(緑色を帯びた黒色)

図56 土塊229出土遺物2 (1:4, 1:2)

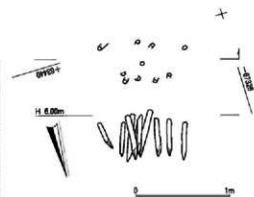


図57 杭列228 (1:40)

図58 杭列228 (北から)



成形・調整	計測 精度	口径/ 高さ	底径/ 厚さ	器高/ 厚さ	計測値 備考	遺存 [器・状態]
内面：底面～体部）指押え痕。穿孔）總成形、内外面両方向から。 外面：磨出し刷毛目調整（ほとんど凹凸のない板状の工具）。 底面穿孔部：焼成後外面からさらに削り取る？。	実測		74		穿孔部は 楕円形で 長さ9mm ほど。	底部
内面：体部）平滑、調整不明。上下部）放射方向に強く撫で調整 （成形？）。 外面：上下部）撫で調整。体部：縦方向の刷毛目調整（単位が平 坦面を成す）。	実測	109	120	153		一部欠
板状の素材を、工具により切削後、刷り削り整形（図上表面から の工具痕が側面に残る）。	実測	50		8	重量：3 7.3g	完存（未 成品）



図59 杭列228（北から）

杭列228（図57～59）

35-04区に位置する。谷4-2層の
下面で検出した。径10cm未満の丸
木杭が2条平行しているようにもみ
えるが、明瞭ではない。全体として
東西方向に配列しているようにみえ
る。検出した位置から東へ伸びる可
能性がある。

杭の打ち込まれた深さは一定して
いるようにみえる。杭の遺存する長
さは0.4mを前後する。この杭列に
関係して土層状が変化するなどの状
態は確認できなかった。

流路448・449 35-37区を中心とした位置にある。谷4-2層と同じ深さを掘り下げていたところ、2層とは性状が異なり、有機物混じりの砂質土、砂混じりの泥炭質の層が3区南東部に分布することが分かった。そこで、それを一時期の流路とし、遺物をとり上げた。間に微高地を挟んで北側の流れを流路448、南側のそれを流路449として記録した。両者ともその幅がわかるような岸部等を検出することはできなかった。また、2層との関係を土層断面で明瞭に観察することもできなかったが、遺物の構成からは流路448・449が後のものであるという可能性がいろいろある。流路448は、調査区東端部では谷4の岸近くをかなり浸食しているようで、溝603はこの部分でなくなっている。

出土遺物 (図65・66)

流路448・449では、ともに堆積層中に土器片、樹木片などが満遍なく全体に散布するような状態で出土した。ただ、木器類については、調査区東壁際で木質遺物が密集したなかから近接して出土した。

遺物の分量は流路でコンテナ6箱ほど、流路449ではコンテナ1.5箱ほどである。遺物の構成については、土器の分量に対して、石製品の割合が比較的高かった。

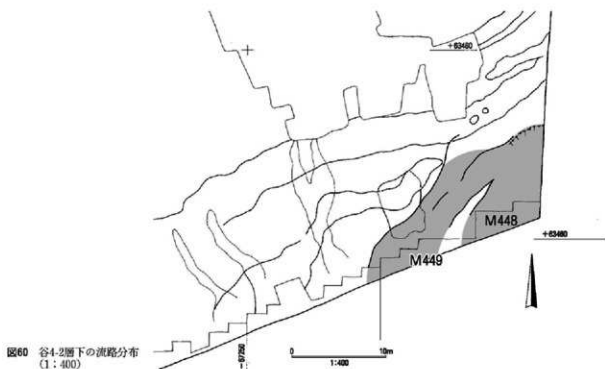


図60 谷4-2層下の流路分布
(1:400)

遺構番号	単位遺構	遺物量	遺物構成		
448	448	sc×9	+土師器 +弥生土器 ・ ・ ・ ・ ・ +石器	+古墳前期 +終末期~ +後期後葉~? ・ ・ ・ + [壺・甕・高環ほか大半は体部破片、器形・時期不詳]。 +石罎 / +叩石 / +砥石 / +石皿。	+壺 (口縁部細片、被熱?)。 +甕形蓋台。 +壺 (口縁部細片(鋭い「く」字状)、底部小破片(底面凸面))。 +壺? (長頸、櫛櫛の波状文)。 +高環 (脚部細片)。 +器台 (細片)。 +大形壺 (口縁部細片)。 +壺 (口縁部細片)。 +高環 (杯部細片)。
449	449	sc×2	+弥生土器 ・ ・	+後期 ・ ・	+大形壺 (口縁部細片)。 +壺 (口縁部細片)。 +高環 (杯部細片)。



図61 波路449 (東から)



図62 波路449 (東から)



図63 流路448 (南から)



図64 流路449遺物3521出土状況 (西から)

以下、図65に木器、図66に土器、石器類を示す。

流路448 殆どは細片の土器資料である。弥生土器に混じり、土師器等が少量ながら出土した。5380・5379は土師器高坏、5381は甕である。5383は須恵器か。細片のため器形も判断としないが、壺か。内外面とも回転を利用した撫で調整が行われる。

5204は砥石である。2614は石鏝、5053は叩石で、図上で四方の側面の中央が打ち潰し状の面を形成している。5225は石鏝。対抗する側縁部を打ち欠く。5010は石皿とする。両面とも、使用の結果か、中央に向かう凹面を形成している。

流路448 2625は、梯子である。下部は欠失する。上部は丸みをもち、

端部か。長さ98.1cm、幅15.1cm、踏棧部での高さ7.8cmを測る。板部の厚さは3cm弱である。カシ丸太を半截して、その断面を下面として加工したものか。

2624は鎌柄である。東部側1/2程の遺存か。現況で、長さ19.9cm、装着部の幅2.9cm、厚さ2.6cmを測る。鎌刃装着部は長さ5.5cm、幅1.0cmで、刃縁が柄に対して 134° の角度をもつ方向に傾斜する。このとき刃部の幅は3cm弱となる。カシか。

3521把手のついた板状の部分である。板上部は四周を欠失して原状をとどめない。扉とも考えたか、板状の部分が薄く、平滑であり、鏝のの可能性を考えた。把手部も断面楕円形で表面は平滑である。原状で、長さ29.0cm、幅6.2cm、把手部での高さ7.0cm、板状部の厚さ1.1cmを測る。カシ。出土状況を図64に示す。カシの板目材を使用している。

土器は後期弥生土器が出土している。いずれも細片資料である。5226は高坏である。

5034は板状の砥石である。中程に錐による穿孔の痕跡がある。深さは1mmほどで貫通していない。2616は石錘である。半球状で、中央と斜行する方向に穿孔している。中央の穿孔には突き錐状の工具痕が残る。斜行する孔は両側から回転による穿孔が行われる。

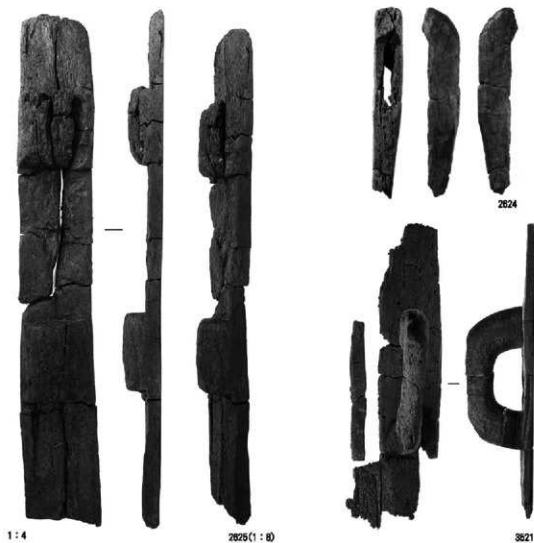
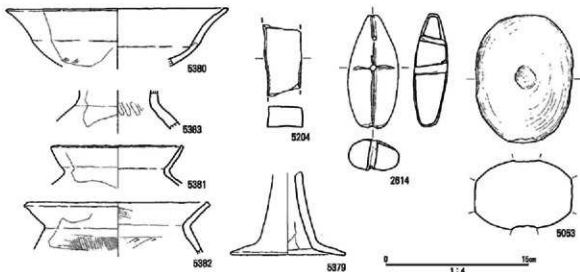
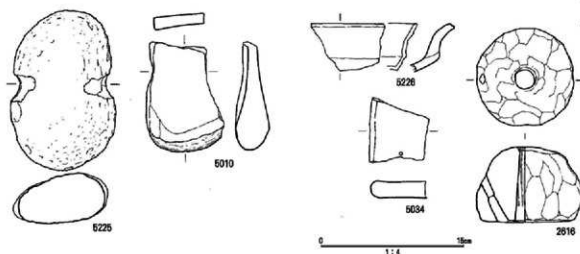


図65 流路148・449出土遺物1



遺物番号	遺構番号	区	出土位置	遺物種別	年代	遺物特記	材質(胎土・焼成・施釉)
2614	448	3	G35-3715 2 1層	石製品 石鉢			滑石
5010	448	3	G35-3812 粗砂	石製品 石皿			砂岩(細粒、やや軟質)、平らな円盤を利用。
5053	448	3	G35-3812	生成品 叩石			閃緑岩か
5204	448	3	G35-3741 3 2層	石製品 砥石			砂岩(細粒、硬質)
5225	448	3	G35-3735 3 2層	石製品 石鉢			滑石(扁平な円盤)
5379	448	3	G35-3715 3 2層	土師器 高坏			胎土: 緻密、粗砂を少量含む。やや塊状。 器表: くすんだ赤みの黄(7YR 5.5/4 コルク)。
5380	448	3	G35-3812 粗砂	土師器 高坏			胎土: 緻密、粗砂を少量含む。細孔を生じる。 断面: 団粒状。 器表: 薄茶明るい灰みの黄赤(4YR 7/4 薄茶)。
5381	448	3	G35-3741 3 2層	土師器 甕	古墳 前期		胎土: 緻密、細砂・暗褐色相粒を顕著に含む。細孔を生じる。 断面: 芯部は黒化。 器表: やわらかい赤みの黄(2YR 5.5/6 土褐色)。
5382	448	3	G35-3811	土師器 甕	古墳 前期		胎土: 緻密、細砂を顕著に含む。細孔を生じる。 断面: 芯部は黒化。 器表: やわらかい赤みの黄(2YR 7.5/4 磁褐色)、外面に黒炭。
5383	448	3	G35-3831 3 2層	須恵器? 甕?			胎土: 粒状性あり、粗砂を含む。 断面: 団粒状、薄茶明るい灰みの黄赤(4YR 7/4 薄茶)。 器表: 明るい灰みの黄(2.5Y 7.5/2 砂色)。
2616	449	3	G35-4713 上部砂層	石製品 石鉢			滑石
5034	449	3	G35-4712	砥石		砥面に回転を利用した穿孔が残る。断面扇斗状で、深さ3mm。	砂岩(細粒、硬質)
5226	449	3	G35-3732	弥生土器 高坏			胎土: 細密を含む。 断面: 団粒状、細孔を生じる。 器表: 灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット)



成形・調整	計測精度	口径/長さ	底径/幅/径	器高/厚さ	計測値備考	遺存(数・状態)
全面研磨により、平滑。 穿孔) 回転工具による穿孔後、工具により突き広げている。内面に溝状の工具痕が複数状残る。 溝) 尖頭状の工具により刻む。一部では断面箱状。	実測	117	53	38	重量: 0.32kg	完存
上下面を使用し、両面とも明瞭な凹面を形成。長辺側の側面にも研磨面を生成。	実測(現況)	110	82	9	縁部厚: 33mm、重量: 0.32kg	半ば以上を欠く
頂上、上下端は打ち潰し状となり平坦面を形成。上下表面の中央はすり鉢状に窪む。		135	102	70	重量: 1.723kg	
角柱状の断面4面を砥面として使用。一端に寄った各稜上、対向する位置に傷痕がみられる。	実測(現況)	72	39	20	重量: 116g	両端を各6g
素材側縁の中央部をおそらく敲叩により彫りくぼめる。縁部は、打ち潰し状となり丸みを帯びる。	実測	172	116	51	重量: 1.223kg	完存
内面: 基部下面) 撫で調整。縁部は周回方向の撫で調整→体部) 回転方向の鈍調整(粘土のはみ出しを生じる)。外面: 撫で調整、基部周縁部は周回方向の撫で調整。	復原		123			縁部の大破片
内面: 周回方向の撫で調整。外面: 撫で調整。下半部に刷毛目調整痕が残る。	復原		235			坏部細片、器表の荒れ顯著。
内外面とも荒れて調整不詳。	復原		140			口縁部細片、器表は顯著な荒れ。
内面: 撫で調整→口縁部) 周回方向の撫で調整→頸部直下以下) 右上がりの鋭削り調整。外面: 刷毛目調整(左→右下)→頸部以上) 周回方向の撫で調整。	復原		196			口縁部細片
内面: 頸部) 指押え→撫で調整→体部) 回転を利用した撫で調整。外面: 体部) 格子目調整→撫で調整→頸部) 周回方向の撫で調整。	復原				頸部: 84	頸部細片
半球状を呈す。全面削り面で形成され、面が成す稜は磨れて丸みを帯びている。 底面) 磨削され、平滑で平坦。やや凸面。 穿孔) 半回転に於て穿孔: 上下方向の工具痕が長軸に平行して、深く残る(径18mm)。斜め方向の穿孔: 側面、底部から対向するように回転による穿孔をおこなう(径: 9mm)。	実測		98	71	重量: 1.27kg	完存
板状を呈す。状下面とも砥面で、上面は緩い凹面を成す。下面は平坦面。上面の機軸から、左上右側の欠失部は大きくないことも推測できる。遺存する側縁部も磨耗して平滑である。	実測(現況)	63	60	16	重量: 12g	小破片
内外面とも周回方向の撫で調整。平滑。						口縁部細片

流路597・598・599 (図67～71)

流路597・598は35-66区、流路599は35-56区を中心とした位置にある。いずれも谷4-2層下面で確認した。いずれも帯状に堆積した砂層として残る。このうち、流路597・598は北側の台地部から流れ下る流路であり、流路599は谷4中で、南方から谷4の岸部に沿って方向を変える流路である。流路597・598と流路599とは交差重複している。これは現場での観察、空中写真での検討から、前者が後者より新しいと判断できる。その時間差はわからない。また、谷4-2層との関係は、掘り下げ途中には確認できなかったが、後述するように遺物の構成から考えると流路599は、谷4-2層より新しい。従って、流路597・598はさらに新しいこととなる。

出土遺物 (図72・73)

遺物は流路597ではコンテナ1.5箱、流路598、599では各コンテナ0.7箱ほどの分量が砂層中から散漫に出土した。いずれも極細片から細片の土器が殆どである。流路598では大破片の資料も含まれている。器表の遺存状態から流路597以外は、磨耗した資料を含み、遺物にかなりの移動があったこと

遺構番号	単位遺構	遺物量	遺物構成	
597	597	sc×2	+弥生土器	+後期 +壺 (頸部細片、1条の突帯)。 +後葉~ +器台 (細片、下部に叩き目)。 + (甕はか体部破片、器形・時期不詳)。
598	598	sc	+弥生土器	+後期 +甕 (上半部大破片、口縁部細片、底部小破片)。 +壺 (底面細片、凸面)。 +大形壺 (頸部細片)。 +中期 +甕 (口縁部細片(須玖式))。
599	599	sc	+弥生土器	+後期 +甕 (細片)。 +壺 (細片)。 +土師器 +古墳・前期 +甕(極少数)。 +須原器 +

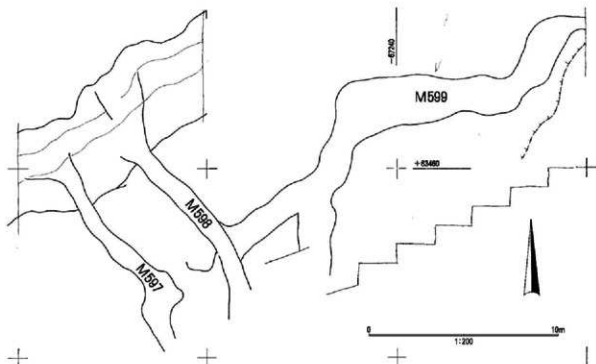


図67 流路597・598・599 (1:200)

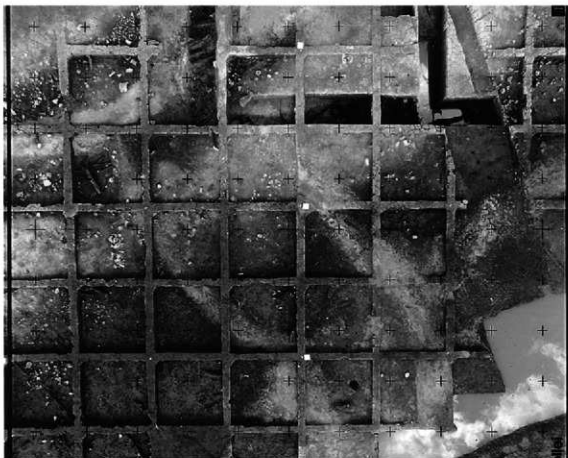


図08 流路597・598 (南から)



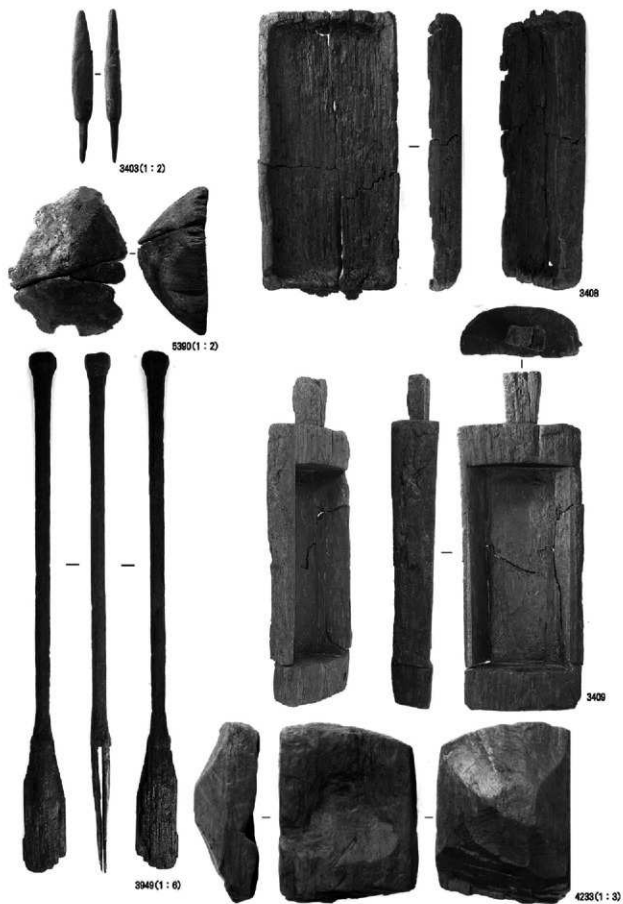
図09 流路597・598 (南から)

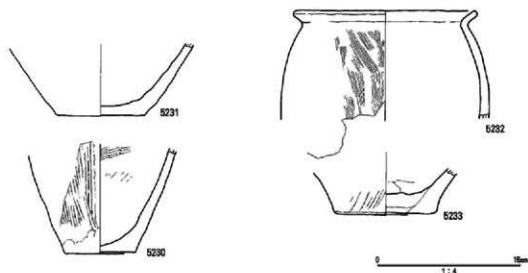


図70 流路599 (南から)



図71 流路599土層 (東から)





遺物番号	遺構番号	区	出土位置	遺物類別	年代	遺物特記	材質(胎土・焼成・施釉)
5230	597	3	G35-6612 2 c層	弥生土器 甕	弥生/後期		胎土：多量の粗砂を含む。 断面：緻密な団粒状、塵孔を生じる。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(9YR 5.5/2.5 空五倍子色)。
5231	597	3	G35-6613 2 c層	弥生土器 甕	弥生/後期		胎土：やや粒状性、多量の粗砂・細砂を含む。 断面：やや薄層状、層状に剥離。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(9YR 5.5/2.5 空五倍子色)。
5232	598	3	G35-6614	弥生土器 甕	弥生/後期		胎土：緻密、粗砂を含む。 断面：塊状。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット)。
5233	598	3	G35-6614	弥生土器 甕	弥生/後期		胎土：緻密、細砂を含む。 断面：塊状。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(9YR 5.5/2.5 空五倍子色、やや黄み)。
5227	599	3	G35-4715 砂層	弥生土器 甕			胎土：やや粒状性、細砂を含む。 断面：団粒状、塵孔を生じる。粉状に剥離。 器表：やわらかい赤みの黄(7.5YR 6.5/4 芝蕨茶)。
5228	599	3	G35-4722	須恵器 不詳			胎土：やや粒状性、細砂を極少量。 断面：団粒状。 器表：外面に自然釉、灰状。内面 明るい灰色(N6.5 鼠風)。
5229	599	3	G35-4715 砂層	土師器 甕		内面頸部の一部に煤状の付着物(鈍い光沢をもつ)	胎土：緻密、細砂を含む。 断面：団粒状、塵孔を生じる。 器表：やわらかい赤みの黄(7.5YR 6.5/4 芝蕨茶)。

図73 流路599出土遺物2 (1:4)

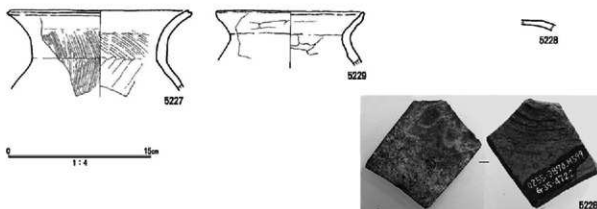
がわかる。

流路597 5231は弥生土器甕底部である。5230は弥生土器甕底部である。いずれも平底で、5230の外表面には粗い刷毛目調整が行われる。

流路598 5232は弥生土器甕上部破片である。5233は弥生土器甕の平底底部である。

流路597 5227は弥生土器甕口縁部である。5229は土師器甕口縁部である。器表はやわらかい赤みの黄色を呈し、内面頸部直下まで篋削り調整が行われる。内面頸部の一部に鈍い光沢をもつ煤状の付着物が残る。5228は須恵器極細片である。部位もはっきりしないが、内面に同心円状のあて貝殻が残り、外面には撫で調整が行われる。土器類の詳細は、観察表に示す。

図7に示す3825は勾玉である。灰白色の石材で硬質、研磨されて光沢をもつ。長さ1.9cm、頭部の



成形・調整	計測 精度	口径/ 高さ	底径/ 幅/厚さ	器高/ 厚さ	計測値 備考	遺存 (破片数)
内面：体部上半部) 右方向、短く繰り返す粗い刷毛目調整→底部 撫で調整。 外面：縦方向の粗い刷毛目調整。	復原		75		底部形状 はきわめ て不整形。	下半部1/3 の破片
内面：口縁) 周回方向で断続する刷毛目調整→口縁端以下体部ま で撫で調整。 外面：体部) 縦方向で細目の刷毛目調整→頸部から口縁部) 周回 方向の撫で調整。	復原	194				底部、器表 の荒れ顯著。
内面：指押え。 外面：底部近くまで、極粗目の刷毛目調整。 外底面：撫で調整。	復原		109			底部、器表 荒れ
口縁部：内面) 左上方向で、短く繰り返す刷毛目調整+外面) 右下方向の刷毛目調整→上半部の内外面) 周回方向の撫で調整。 体部：内面) 右上方向の撫で調整(平行)、外面) 口縁部から続 く刷毛目調整。	復原	195				口縁部細片
内面：同心円状の当て具痕(浅い)。 外面：撫で調整。						極細片(球 状の器形 の頂部?)
内外面：口縁部以下、指押え痕が全体に残る→不規則な撫で調整 →体部内面) 頸部直下まで断続調整。	復原	157				口縁部細片、 端部の磨耗 顯著。

幅0.8cm厚さ0.7cmを測る。孔は径0.1cm未満と極小さい。重量1.9g。

木器は流路599出土としてきたが、出土位置が35-47区に集中することから下位の凹地604に属する可能性が高い。

3403は、木鏝とする資料である。断面は楕円形を呈す。先端部はテーバーがかかりやや丸みをもつ。茎部は極端に細く尖る。径0.4cm。現況で長さ8.0cm、幅1.0cm、厚さ0.7cmを測る。器表が粉状に剥落しつつあり、調整などは観察が難しい。

3901は各雑状の形状をもつ資料である。長さ8.0cm、幅5.9cm、高さ3.9cmを測る。特定の形状を推測できないが、素材の可能性も考えらるのではないか。

3408は槽である。腐蝕が進み、両端の把手の大部分を欠く資料である。原状で長さ30.2cm、幅13.1

cm、高さ3.6cmを測る。底面長辺側、短辺側ともに丸みをもつ。内面は外面に合わせるように丸みをもたせてくり抜く。長辺側の立ち上がりは収縮した結果なのかもしれないが、やや内側に湾曲する部分がある。内法は長さ27.4cm、幅11.5cmを測る。カシの半割材を素材とし、芯側を上面に置いているように観察される。

3408は槽である。全体の形状を良く残している。片側に把手がつく。把手を含めた長さ34.5cm、身部の長さ28.7cm、幅12.3cmを測る。外面の横断面形は半円状で、両端を切り落とした形状となることから全体として蒲鉾状を呈す。断面は逆台形状、内法は状端部で長さ20.8cm、幅11.0cm、深さ3.4cmを測る。カシ材である。

3949は先端部以外は良く遺存する資料である。全体の形状は椀のようにみえるが、幅広で平らになる先端部の中央部を、幅1cmほど欠き取っており、先端部は2枚のうすい板に分かれたような形状となっている。この部分に対象物を挟むような使用法を想定すれば、柄としての機能を想定できる資料である。先端部の付け根は一段太く、柄尻も膨らませている。前兆81.9cm、柄の径2.1cm、先端部の幅6.6cmを測る。柄尻の径42cm。カシ材で、原状では器表の荒れが著しいがおそらく全体を研磨しているものとみえる。

4233は鉢形の容器未成品か。平面四辺形の角錐状を呈す。長さ36.6cm、幅27.8cm、高さ13.8cmを測る。容器とした場合の内面側を円形に上面から3.3cmの深さまで彫り窪めている。底部は丸底か、ごく小さな径であることが予想できる。カシ材。

遺構番号	遺物量	遺物構成
604	sc×4	+弥生土器 +後期(前葉~後葉) +壺 (口縁部大破片) +甕 (口縁部細片(接合する?))

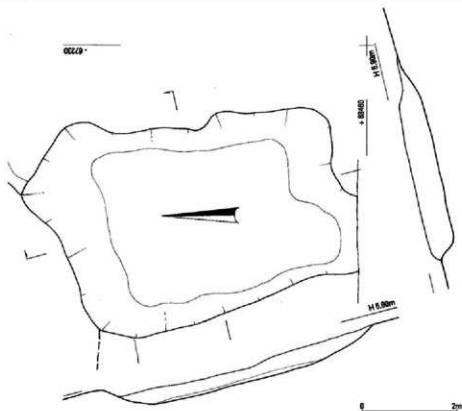


図74 凹地604 (1:80)

凹地604 (図74～81)

35-47区に位置する。谷4-2層下、流路448、流路599より下位で、後述する谷4-23層を部分的に切り込んでいる。平面では、南北方向に長い不整な隅円長形状を呈し、断面形は不整な逆台形状を呈す。中央部での規模を測ると、長さ5.9m、幅4.1m、深さ0.4mとなる。凹地604が人為的な掘削によるものであるのか、自然の営為の結果であるのか、判断が難しい。平面形が不整であり、断面形が、北・西辺では急な立ち上がりである一方対する辺では立ち上がりが緩くなっている点自然に形成されたものと考えたいが、湿地での作業とすれば不整な形状であることも考えられよう。いずれにせよ、最終的には自然に埋没しており、黒褐色泥炭質粘土で埋まる。

出土遺物 (図82・85)

遺物は木器類を除きコンテナ3箱ほどの分量が、出土した。木器類は、やや下半部に集中して出土した(図76～81)。木器以外の遺物の構成を下表に示す。主要な遺物のうち、弥生土器壺を図82・83、その他の弥生土器ほかを図83に掲げる。以下、その順で報告する。

5252は壺上部である。外面の全体に刷毛目調整が行われる。5255も壺上部破片である。下部をかく現状のままで出土した。外面の全体に刷毛目調整が行われる。5249は完形で完存する壺である。胴部の外面の一部が火跳ね状に剥落する。底面がわずかに曲面を成す。5250は壺で、底部を含めた体部の半ば以上を欠く資料である。

5251は無頭壺である。底面はやや凸面を成す。5253は壺下半部資料である。内面に交差する方向の刷毛目調整が行われる。



図75 凹地604 (南から)



図276 凹地604 (南から)



図277 凹地604遺物出土状況 (西から)



図278 凹地604遺物出土状況 (北から)



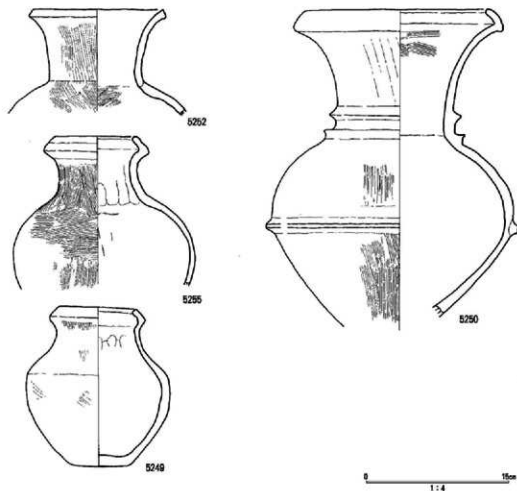
図79 凹地604遺物出土状況
(北から:R4234ほか)



図80 凹地604遺物出土状況
(35-4733区底部) (東から)



図81 凹地604遺物出土状況
(35-4721・22区) (東から、R4581)

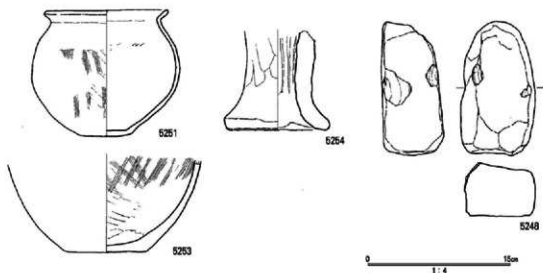


遺物番号	遺構番号	区	出土位置	遺物種別	年代	遺物特記	材質〔胎土・焼成・施釉〕
5250	604	3	G35-4732	弥生土器 壺	弥生/ 後期/ 後葉		胎土：やや粒状性、粗砂を含む。 断面：薄層状。 器表：明るい灰みの赤みを帯びた黄〔10YR 8/3 薄赤〕。
5249	604	3	G35-4722	弥生土器 壺	弥生/ 後期	体部に火跳ね状の剥落があり、孔があく。 体部下半に黒斑。	胎土：やや粒状性、細砂を含む。 断面：団粒状。 器表：灰みの赤みを帯びた黄〔8YR 6.5/3 ビスケット〕。
5252	604	3	G35-4722	弥生土器 壺	弥生/ 後期	口縁端面以下の外面全体に煤状付着物。内面の全体も付着物様の変化。	胎土：やや粒状性、粗砂を多量に含む。 断面：団粒状。 器表：全面に付着物様の変化(くろい灰みの赤みを帯びた黄〔8.5YR 4.5/2 フェーン〕)。
5255	604	3	G35-4733	弥生土器 壺	弥生/ 後期/ 中葉		胎土：緻密、粗砂を少量含む。 断面：団粒状。細孔を生じる。 器表：灰みの赤みを帯びた黄〔8YR 6.5/3 ビスケット〕。

図82 凹地604出土土物1 (1:4)



成形・調整	計測 種別	口径/ 長さ	底径/ 幅/径	器高/ 高さ	計測値 備考	遺存 [部・状態]
内面：(体部) 指押え一撫で調整。頸部・口縁部 指押え→口縁に沿う方向の房毛目調整(極厚い)→口縁端折り曲げ→口縁端) 周回方向の撫で調整(端面の整形)。 外面：(体部) 縦方向の房毛目調整(密) + 頸部) 縦方向の撫で調整(条線が残る)→突部貼り付け→突部部) 周回方向の撫で調整。	実測	222			底部を欠くが、器高以上。 330mm	体部の半ばを欠く。底部欠
内面：(体部) 撫で調整。口縁部) 周回方向の撫で調整→折り曲げ→頸部) 指押え。 外面：肩部以上の体部) 縦方向の房毛目調整・肩部以下の体部) 左上がりの房毛目調整→底部付近) 縦方向の房毛目調整→全面撫で調整。	実測	82	68	169		完存
体部内面：斜め方向の房毛目調整。 体部外面：斜め方向の房毛目調整。 頸部・口縁部：(外面) 縦方向の粗目の房毛目調整 + (内面) 口縁部に沿う方向の房毛目調整→撫で調整。→口縁部) 周回方向の撫で調整(口縁部端面整形)。	実測	145				口縁部
頸部・体部内面：工具痕(周回方向の整形による?) + 頸部) 縦方向の指押え→周回方向の撫で調整。 頸部・体部外面：体部) 縦方向の房毛目調整→頸部から体部上部に上方の房毛目調整・体部下部に縦方向不整な房毛目調整。口縁部：頸部調整後、内外面周回方向の撫で調整。外面は整形時の凹凸が残る。口縁部直下に沈状の凹部を形成。→口縁部直下の頸部に極薄い沈線が残る。	実測	112				上半部



遺物番号	遺構番号	区	出土位置	遺物種別	年代	遺物特記	材質(胎土・焼成・施釉)
5248	604	3	G35-4722	石製品 石錘			四角柱状の垂角錘(安山岩)
5251	604	3	G35-4723	弥生土器 無頸壺	弥生/後期		胎土: やや粒状性、粗砂を顯著に含む。褐色相粒を含む。 断面: 団粒状。 器表: 灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット)。
5253	604	3	G35-4722	弥生土器 壺	弥生/後期		胎土: やや粒状性、緻密。細礫を含む。 断面: やや塊状。 器表: 灰みの赤みを帯びた黄(8YR 5.5/2.5 空五倍子色)。
5254	604	3	G35-4732	弥生土器 器台	弥生/後期		胎土: やや粒状性、粗砂を多量に含む。 断面: 顕著な団粒状。 器表: くすんだ黄赤(2YR 6/8 糞)。

図83 凹地604出土遺物2 (1:4)

5254は器台である。上半部を欠く。

5248は、石錘である。角柱状の錘の各種線の中央部を打ち欠いて整形する。以上詳細は表中に示す。以下、木器類を図84・85に掲げる。前述したように、流路599出土とした木器類も、凹地604に含まれる資料である可能性が高い。ここで報告するのは8点であるが、このほかに割材、板が9点出土した。4581は一木造の鋤である。刃部、柄の端部を欠失する。原状で長さ77.5cm、身部の幅15.3cm、柄の径2.4cmを測る。身の上端近くには両側に三角形の切り込みが行われているが、特に擦れ等は観察できなかった。

4234は柄である。膝柄でナスビ形鎌の柄とされるものであろう。最大長64.7cm、柄の長さ56.5cm、装着部は細かく整形されており、長さ28.4cmを測る。柄は断面楕円形で、長頸2.8cm。装着部は先端



5251



5248



5253



5264

成形・調整	計測 精度	口径/ 長さ	底径/ 幅/径	器高/ 厚さ	計測値 備考	遺存 (種・状態)
素材、長辺側の各縁部中央部を打ち欠く(単刺雕面)。	実測	137	79	66	1259	完存
体部内面: 指押え(爪痕?) + 撫で調整。 体部外面: 縦方向で細目の刷毛目調整→上部1/3周回方向の撫で調整。 口縁部: 内外面周回方向の撫で調整(端面整形)。	実測	131	52	129	面形はゆがんで楕円形状。口径部は長さ131mm、幅径121mm。	一部を欠く(接合)
内面: 斜め方向の不整な刷毛目調整→底部付近) 鋭削り調整?→ 内底面) 撫で調整。 外面: 剥落して調整不詳。	実測		81			底部、外面剥落
内面: 軸部縦方向の撫み(絞り痕?)、裾部指押え。 外面: 全面指押え。	実測		112			基部

に向かって筒状に広がって薄くなっている。基部にあたる側は逆に細く厚くなっており、この部分に装着面に平行して長方形の孔をうがう。また、同様の形状で貫通しないもの1箇所がある。全体に腐蝕が進んでおり、装着部の擦れ等は観察できなかった。本資料の装着部の加工状態から見ると他の同形状の資料は未成品の段階ともみえる。

4197は槽である。ほぼ1/2が遺存するものか。長楕円形の平面形が復元できる。断面形は縁がごく緩く立ち上がる。全面に赤色顔料が塗布されている。現況で長さ54.8cm、幅9.1cm、底部の厚さ1.2cmを測る。顔料塗布部はくすんだ黄みの赤色(7.5R 5/8 潤朱)を呈す。

4198は、漆塗器である。圧潰して原状をとどめないが、外面に別材で帯を巻いたうえで漆を塗る。出土状態で長さ17.5cm、幅7.5cm、高さは4cmほどか。内部に別の木片があり、あるいは鞘のようなものであったのかもしれない。

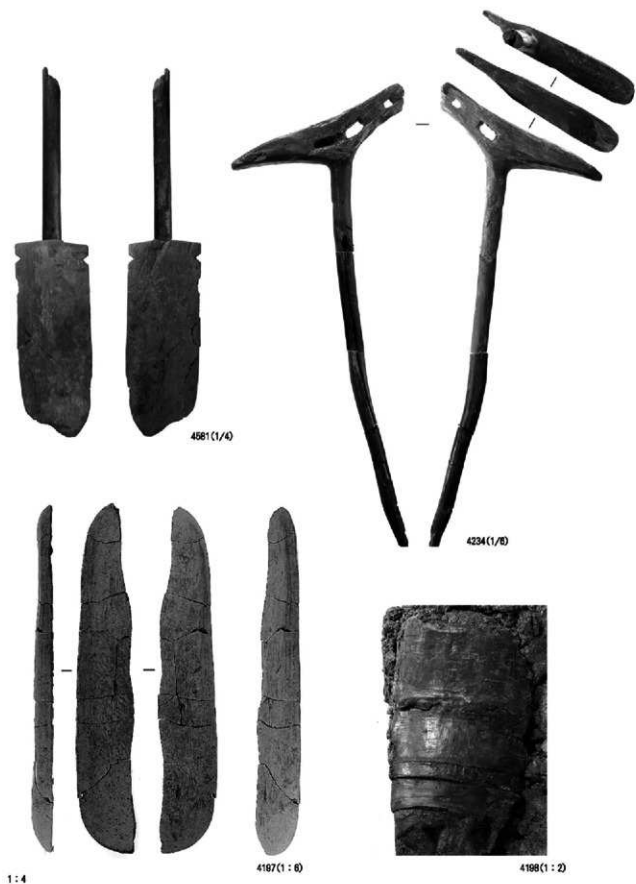


图84 凹地604出土遗物3

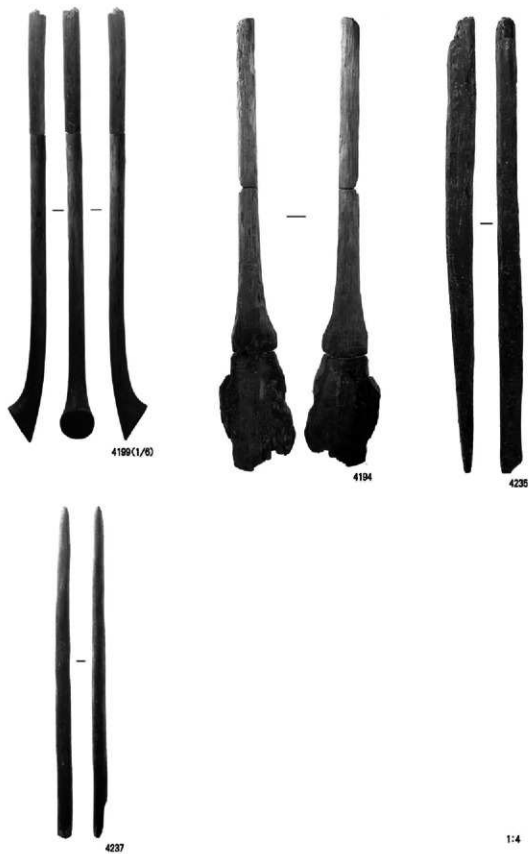


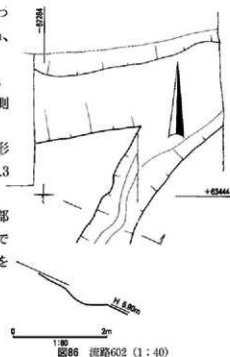
图65 凹地604出土遗物 4

4199は楕柄である。前端部を欠く。後端部は緩く曲げかつ肥厚させている。全面を研磨整形している。現況の長さ67.0cm、前端側の径2.6cmを測る。

4194は杓文字形の木器である。全体に腐蝕が進行している。長さ47.2cm、先端部で最大幅7.5cm、柄の基部で厚さ0.7cmを測る。

4235は角柱状の部材である。断面は四辺形、一端は薄く整形し、この部分で組み合わされていたことを推測できる。長さ47.3cm、幅2.6cm、厚さ2.2cmを測る。

4237は尖頭器とする木器である。基部側を欠失する。先端部はやや丸みを帯びて尖る。全面に腐蝕が進行して詳細は不明であるが、先端部は研磨整形したものか。長さ35.0cm、径1.4cmを測る。



流路602 (図86~89)

35-75区に位置する。谷4、2層下の砂層の堆積として、空中写真の検討により検出した(図88)。写真家らは後述する溝427へ流入する状況が見てとれるが、現場で詳細を掴むことができなかったが、溝最上部層の一部を構成するものか。土層の状況は図87に示す。堆積を掘り上げた下面是溝状に谷堆積層を削り込んでいる。この部分で幅0.9m、深さ0.1mほどである。

出土遺物 (図72・73)

遺物は少量の土器細片が散漫に出土した。器表の磨耗はない。遺物構成を下表に示す。

5235は弥生土器壺底部である。外面に刷毛目調整が施される。底面はやや凸面を成す。



図87 流路602土層(東から)

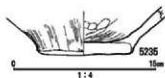
遺構番号	遺物量	遺物構成
602	mp	+弥生土器 +後期 +壺(底部小破片、底面凸面)。 +その他(体部破片、器形・時期不詳)。

遺物番号	遺構番号	区	出土位置	遺物種別	年代	遺物特記	材質(胎土・焼成・施釉)
5235	602	3	G35-9513 砂層	弥生土器 壺	弥生/後期		胎土:緻密、細砂・粗砂を少量含む。断面:やや粒状。器表:内面)黒色、外面)灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ヒスケットより暗い)。



図88 流路602 (南から)

図89 流路602 (南西から)



成形・調整	計測 精度	口径/ 長さ	底径/ 幅/径	器高/ 厚さ	計測値 備考	遺存 (種・状態)
内面：内底面から体部に向かう強い撫で調整。 外面：上方に向かう刷毛目調整。	実測		104			底部

図90 流路602出土遺物 (1:4)

5. 溝427出土の遺構と遺物

溝427は、今回報告する谷4中の遺構のうちで最も古い段階に属するものである。溝427については、その掘削に伴い生成した土層を検出することができたが、これは次節で報告することとし、以下溝427および、それを埋積する堆積層出土遺物について報告する。

溝427 (図2～6・91～115)

谷4-2層下面で検出した。谷4の北岸に沿って掘削された溝である。平面上では1区南西方向から伸びてきたものが、1区で一方向を東に変え、3区に入った所でやや北東方向に向かった後、3区東端でさらに北寄りに向きを変えている。このうち、35-76区より西側では谷堆積層である泥炭層を掘削していたものが、35-76区以東ではより台地側に向きをとり基盤礫層を掘削している。このため、35-76区以東では谷部堆積層上に廃土を盛り上げることとなり、23層の形成に至っている。一方35-76区以西では、谷堆積層上に同質の廃土が盛られたため、23層の確認まで廃土層存在に気づかなかった。このため、一部の土層断面で盛土層を確認した以外は、2層下部あるいはその下位層として掘りあげてしまった可能性が高い。調査中、該当層中に個体で投棄されたような土器の出土状態を見たが、これは23層中の遺物出土状況と良く似ており、そうした遺物の分布範囲が実は廃土層の分布を示していたものかもしれない。

溝427は上記のような地形環境に掘削されたこともあってか、西部で幅が広く、35-86区では5mであるのに対して東の35-38区では3m弱となっている。断面形は逆合形状を呈すが、溝の幅に対応して、西部では極緩く立ち上がり、東部では急に立ち上がる。底面の幅は地点ごとに変移が大きい。狭い位置では0.5m、拾い位置で1.5mを測る。底面の高さは、5.0mを前後してほぼ水平である。これが溝の埋積初期に泥炭層が厚く堆積した要因の一つか。

土層 谷427を埋積する堆積は、大きく3部層に分けられる。上位の層は粗砂を主とした槽である。調査区東半部で顕著で、21層と記録したものである。中位の層は全域に分布する。黒褐色粘質土と砂層の互層で、遺物を顕著に含む。3区で27層とする層であり、1区の4a層が相当する。下位層も全域に分布する。泥炭、泥炭質粘土層である。植物遺体を顕著に含む。当初3区東半部で29層とした層で、3区西半部の36層、1区の4b層が相当する。

以上の他、上記層の堆積の間に形成された層が部分的に分布している。そのうち、22層21層、27層間に位置づけられる黒褐色粘質土であり、まとめて遺物を出土した。31層・42層・43層は3区東半部に分布する。地山粘土層の流入により形成されたものである。31層からはまとまった遺物が出土した。以下、土層断面で模式的に性状と分布を示す(図91～94)。

出土遺物 (図7・8・116～139)

遺物は大量の土器の他木質の遺物が出土した(図100～111)。土器は破片となり分散したものが、接合復元できるものはごく少ない。石器類については、定型的な石器、石製品はごくわずかで、その殆ど溝に先立つ時期の石器類である。木質遺物は木器の他、割材および削片がある。後者は大量に出土した。以下、層ごとに出土遺物を報告する。

21層出土遺物 (図7・116・117・120)

弥生土器壺を図116に示す。5222は無頸壺である。口縁は袋状を呈す。5302は口縁が外方に開く。5397は袋状の口縁をもつ。

5300・5392は甔である。いずれも焼成前に穿孔している。

5298は蓋である。5412・5411は杵形器台である。5412は頂部に孔があく。5411は突起部をつまみ出す。5218は手捏ね土器である。図7に湿すのはガラス管玉である。両端を欠く資料で、長さ1.7cm、径は0.9cmである。

図120に木器を示す。全体に腐蝕が顕著である。3202は又鎌刃部である。長さ29.5cm、幅7.3cm、厚さ1.2cmを測る。2399は杓子である。断片化して接合できない。みの部分の内面には漆を塗ったものか黒色を呈す。接合する上半部で長さ17.1cm、身部の厚さ1.2cmを測る。

31層出土遺物（図117）

いずれも弥生土器である。5296は甕で底部を欠く資料。底部近く1/3の内面には黒褐色煤状の付着物が残る。5400は器台である。5208は手捏ね土器で底面が顕著な凹面を成す。

22層出土遺物（図118・119・121）

図118に示すのはいずれも弥生土器である。壺、甕、鉢。

3590は袋口縁の壺である。外面に刷毛目調整痕が残る。体部外面に火跳ね状の剥落、孔のほか穿孔がある5395は甕である。底部付近は直に立ち上がり、平底である。3845は、甕である。底部の穿孔は焼成後に行われる。5301は深鉢である。平底。

図119に示すのはいずれも弥生土器である。碗、器台がある。

5205・5215は碗である。やや凸面を成す底部である。5402・5407・5408は器台である。器高に大小がある。5303は杵形器台である。

図121に木器を示す。3284は一本造の鋤である。柄端部を欠失する。現状の上端部がわずかに曲面を成すことから環状の把手がついていたものである。現況で長さ64.5cm、幅17.0cm、身部の基部厚さ2.7cm、同長さ27.3cmを測る。柄は断面楕円形で長径3.1cm。刃部は研磨され、刃縁は営利である。

42層出土遺物（図7）

図7に示す5074は、ガラス勾玉か。滓をはさみ細かく裂けた状態である。長さ長さ1.8cm、幅7.4cm、重量は0.7gを測る。

27層出土遺物（図8・122～134）

図122に示すのはいずれも弥生土器である。5295・3585は甕である。3677・5294・5393は小形の器形である。底部はいずれも平底である。5294の器壁はごく厚い。5393の内底面には赤色の付着物が残る。

図123には弥生土器を示す。5296は、壺とする。最大部が下部にあり、頸部が不明瞭である。口縁部近くと胴部下部に刻み目をもつ突帯を付す。5216は甕、5265は深鉢とする小形の土器である。5214は無頸壺である。体部内面に赤色顔料の様な付着物が残る。5207は深鉢、5217は鉢とする資料である。いずれも器壁が厚い。5277は蓋である。化粧掛けを行っている。対向する位置にそれぞれ2孔をもつ。

図124は弥生土器である。器台、手捏ね土器を示す。5398は器台である。内面に指押さえ痕が残る。5403、5404は器台である。内面に絞り痕が残る。5406は器台である。一端押し出して突起を形成する。5210・5211・5212・5219は鉢形の手捏ね土器である。

図125～134は木器である。図125～127に鋤・鎌、図127～128に柄をまとめる。

3618は平鎌である長さ29.7cm、幅18.1cm、厚さは頭部で1.6cmを測る。身の部分中位に横方向の段をもつ。4212も同様の段をもつ平鎌である。頭部を欠失する。全体に腐蝕が進んでいる。長さ25.4cm、幅19.9cm、厚さは下部で1.0cmを測る。4213は平鎌で刃部を欠く。頭部が極端な三角形形状を呈す。長さ25.7cm、幅19.8cm、厚さは頭部で1.6cmを測る。

4557は鎌頭部である。長さ13.0cm、幅8.7 cm、厚さは2.0cmを測る。

4225は二又鎌である。刃部だけの資料で長さ20.0cm、幅6.0 cm、厚さは上端部で1.2cmを測る。

3389は三又鎌である。刃部の大部分を欠く。長さ33.3cm、頭部の幅7.3 cm、厚さは頭部で2.0cmを測る。

3194は鋤である。一木造で柄の端部を欠くものとみえる。長さ55.5cm、身部の幅16.3 cm、厚さは柄基部で2.6cmを測る。刃縁はやや曲面となり平滑である。3620は鋤身部である。柄、刃縁部を欠く。長さ35.4cm、幅9.6 cm、厚さは柄基部で1.6cmを測る。

3617はナスビ形鎌か。互いに接合できない2部分に分離している。上下部とも突起、切欠き等は認められない。長さは2資料合わせて46.6cm以上、幅は刃部側で10.2 cm、厚さは1.4cmを測る。

3869もナスビ形鎌とする資料である。身部と頭部とは明瞭な段によって分かれる。刃部は現状で弧状を呈す。頭部端と中位に突起をもうけている。断面は蒲鉾状を呈す。長さ42.3cm、幅は身部で9.2 cm、厚さは身部上端で2.1cmを測る。

4405は鎌柄である。柄の後半部を欠く資料である。個体資料が2破片に分離して接合しないものとみる。他部材と組みあわせる部分を除き平滑に研磨されている。2点を合計した長さ34.7cm、幅4.0 cm、厚さは.07cmを測る。なお、図示は後部の部材の配置が逆である。

3381は鎌柄の頭部資料である。固定具と組みあわせる部分を切り欠いて断面蒲鉾状となっている。現況で長さ18.7cm、幅3.3 cm、厚さは2.6cmを測る。

3621・3990・3576は鎌柄である。後端部付近の資料で現況の長さ27.2cm、径2.6 cmを測る。後端は鎌の使用状況を想定した場合の下方に緩く曲がり、ラッパ状に開いて大きな端面を形成している。現況の長さ27.2cm、径2.2cmを測る。他例と同様全面を研磨する。3990は前者と同様の端部を形成している。先端部を欠く資料で、長さ48.3cm、径2.3を測る。3576は使用状況を想定すると、前2者とは異なり端部が上方に湾曲した後鋭角に折れ曲がったような端部を作り出す。端面は小判形となる。一見すると斧柄の様にみえるが各部を丸めている。長さ48.3cm、2.4cmを測る。

図128-3395以下図129-3577までは大形の膝柄である。ナスビ形鎌の柄とされるもので67-32区を中心とした地点では集中して出土した。

3395・4224・3675・3577・3348は、膝柄でイの字形の頭部をもつ柄である。3395は柄に沿った長さ101.6cmを測る。柄はやや弧状を呈す。径2.8cmを測り、樹皮をそのまま残した状態で出土している。頭部は荒く削った角柱状を呈す。前面は湾曲し、装着を想定すると必ずしも安定した形状とはならない。頭部の長さは35.4cm、上部が幅広で3.8cm、下部は次第に細くなる。4224は、やはり角柱状を呈すが正面からの形状は逆に下膨れの状態である。柄基部の両側を大きく削り取り、前後の厚みを大きくとっている。頭部の長さ35.3cm、前後の厚み4.4cmを測る。腐蝕が著しい。3675は、頭部前面に素材の曲面を残し、全体は円柱状を呈す。それに代え柄基部以下の後面側に切欠きを作り出している。頭部の長さ24.9cm、径4.3cmを測る。35-5734区出土。3577は柄端部を欠く資料である。頭部は下方に尖る角柱状を呈す。下部は楔状に細くなり端部では長さ2.3cm幅0.5cmほどになる。柄に沿った長さ74.0cm、柄の径2.2cm、頭部の長さ35.5cm頭部状態端部では幅3.8cm長さ5.4cmとなる。35-6732区出土。3348は大部分が遺存する資料と思われるが、柄が細かく折れて接合でない。柄部材の長さの和183.2cmをはかる。頭部は前後方向に厚い角柱状で、下方に尖る。頭部の長さ26.0cm、前面からみた幅2.7cm、厚さ(奥行)4.0cmを測る。35-6731区出土。

3522・3509・3588は斧柄である。

3522は斧柄である。縦斧用の膝柄で装着部は袋状の金属斧装着するためにほぞを作り出している。

柄に沿った長さ63.8cm、柄の径2.6cm、頭部の長さ15.6cmを測るほぞ部は長さ4.2cm、基部の幅3.0cmの大きさである。

3509は斧柄頭部の資料である。横斧用の膝柄である。やはり袋状の基部を装着するためのほぞ部を作り出している。頭部の長さ11.4cm、幅4.3cm、ほぞ部の長さ4.4cm、幅は先端部で2.3cm、厚さは同位置で1.2cmを測る。

3735・924・1774は尖頭器とする資料である。いずれも大形で太い。3735は長さ48.5cm、断面は楕円形で長径2.5cm、短径1.4cmを測る。924は両端が尖る。長さ52.2cm、径2.3 cmを測る。1744は長さ12.7cm、幅1.2 cm、厚さ1.3cmを測る。

3380・1267・4570・4211は楕筒である。3380は細身で、長さ43.3cm、径4.4cmを測る。柄部が比較的長い。1267は柄とする部分が細く短く、他とは異なる。長さ31.7cm、径6.4cmを測る。4670は、楕筒部中に凹面が形成される。柄と楕筒部はなだらかにつながる。長さ27.1cm、径5.1cmを測る。4211も楕筒部中に凹面が形成される。短い柄がつく。長さ39.6cm、径7.7cmを測る。

4228は縦1/2が遺存する資料である。中央に方形の孔を開け、上下端の縁は斜めに削いで刃縁のように鋭利である。長さ36.3cm、幅7.2 cm、厚さ中央部で1.9cmを測り上下縁部に向かい薄くなる。

5384は白断片である。縦10.6cm、幅18.7 cm、厚さ6.3cmを測る。極度に腐蝕が進んでいる。

3418は先端部を角錐状に尖らせ、体部は円筒状、基部は茎状の作り出しがある。長さ17.8cm、径8.0cmを測る。

5385は板状の体部に蒲鉾状の把手を削り出す。乾燥して変形するが、饅か。長さ20.5cm、幅6.9 cm、高さ4.4cmを測る。

3679は紡錘車である。軸部は別作りであり、両端とも折れている。径4.9cm、高さ2.7cmを測る。

3813は截頂円錐形状、小形の製品である。径2.2cm、高さ4.4cmを測る。

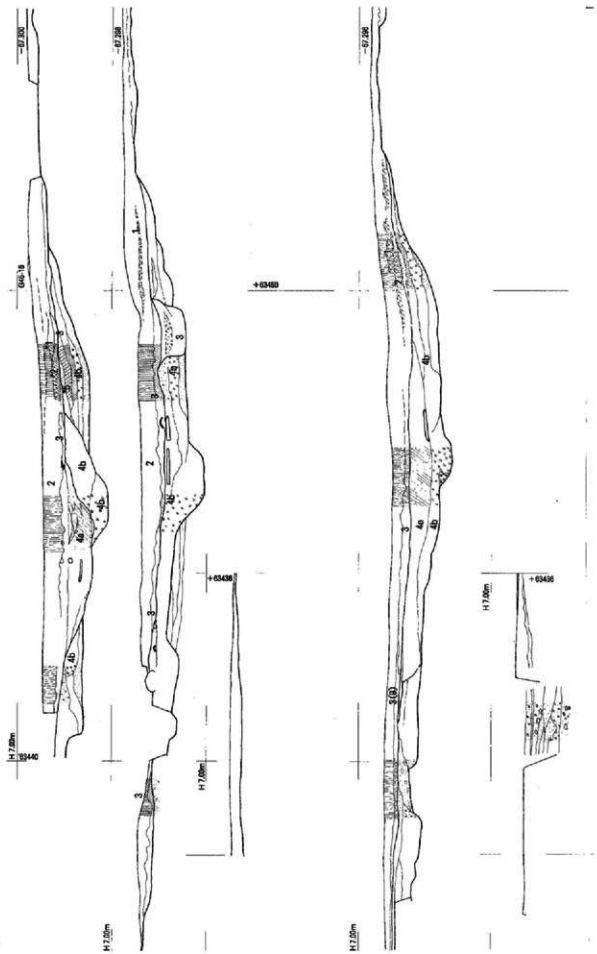
3690は槽である。平面形は楕円形、断面形は蒲鉾状を呈す。内面は長頸形状にくり抜く。内法は上縁部で長さ25.5cm、幅15.5cm、深さは3.0cmを測る。外寸は長さ38.0cm、幅18.3cm、高さ6.8cmを測る。

図133に蓋を示す。3691は柄付きの資料である。上面はやや膨らみをもつ。柄を含めた長さ31.5cm、幅16.4cm、厚さ1.2cmを測る。蓋となる部分の長さ23.4cmである。4210は、原形が管笠状を呈すものとみえるが、現状は縁部が破損し、不整な形状となる。長径32.1cm、短径28.0cm、高さ5.02cmを測る。下面は黒色を呈す。付着物によるものか、炭化したものか判然としない。図134は食器、調理具である。3589は杯の把手であろう。本体部は欠失して不明。現況で高さ10.6cm、断面円形で1.9cmほどを測る。

4209は杓子の柄部分である。4571は杓子身部である。両者は接合して右に示すような形状となる。接合した状態で、長さ40.7cm、幅6.9cm、身部の厚さ1.5cmを測る。材は非常に硬質で、広葉樹と思われる。

4017は杓子の身部、現況幅8.8cm、高さ4.9cmの細片である。4571も杓子身部、柄基部がわずかに残る。現況で、幅15.4cm、高さ10.4cm、柄基部の部分で厚さ1.6cmを測る。この2点とも同質の材で、硬質である。同一個体の可能性を考えたが、接合しない。

巻頭図8に示す971は盾である。取上時点で非常に脆弱であったことから、直接保存処理にまわし、現在その最終段階にある。そのため、写真は処理直前の原状写真である。ほぼ盾に1/2を欠く資料と考えられたので画像を反転して復原して示している。出土時は1268と2点分離した状態で出土した。接合する位置に配置した計測値は高さ83.6cm、幅63.7cmを測る。厚さは一定しないが1cm前後する。



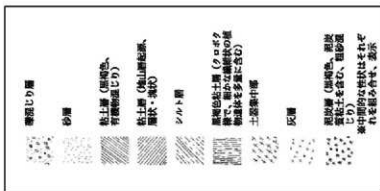
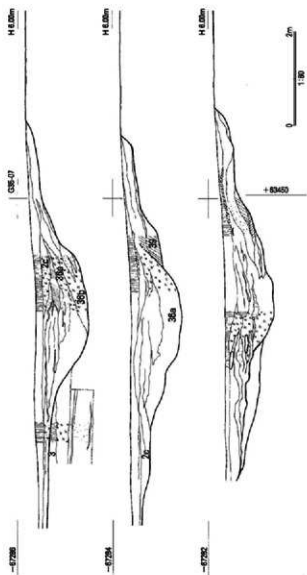
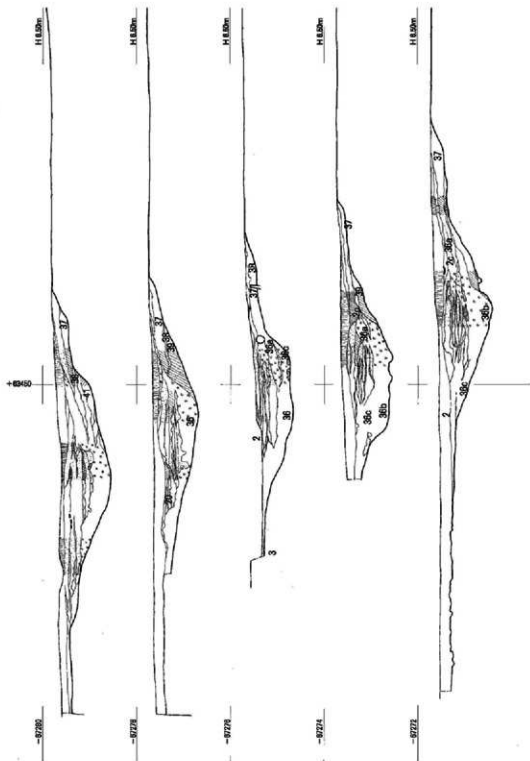
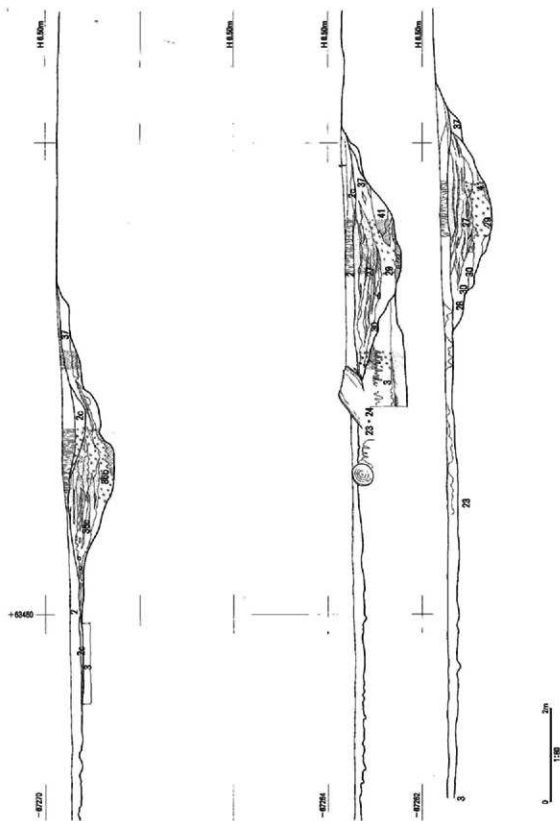


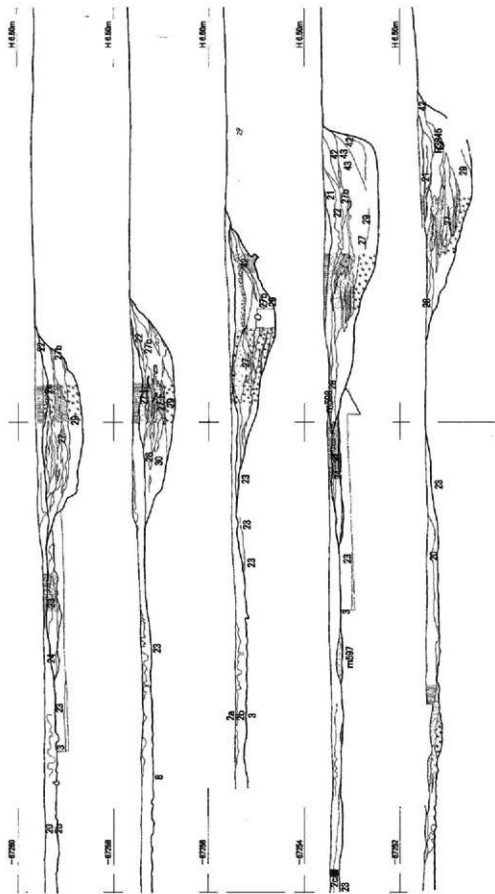
図91 薄427土層 (35-95-05) (1 : 80)





8892 薄层土層 (35-76~85) (1:80)

+8946



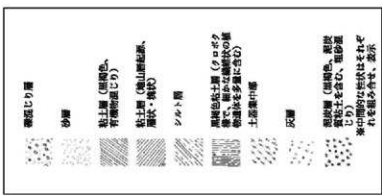
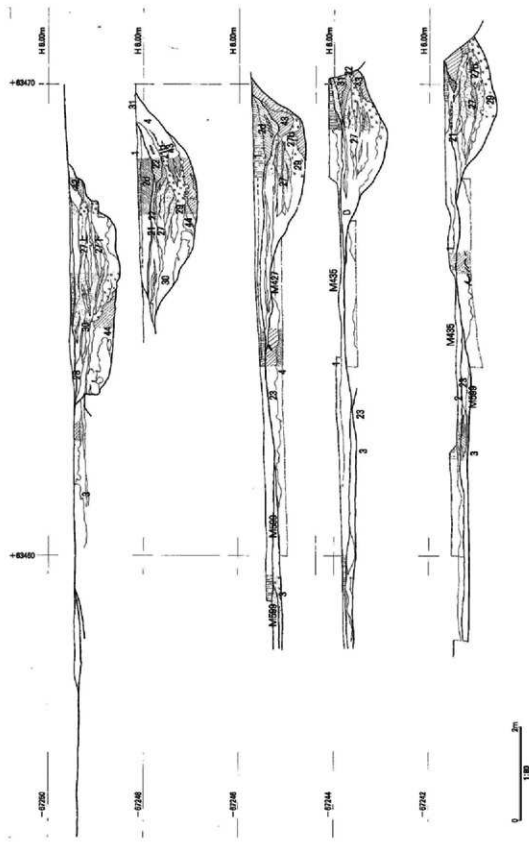
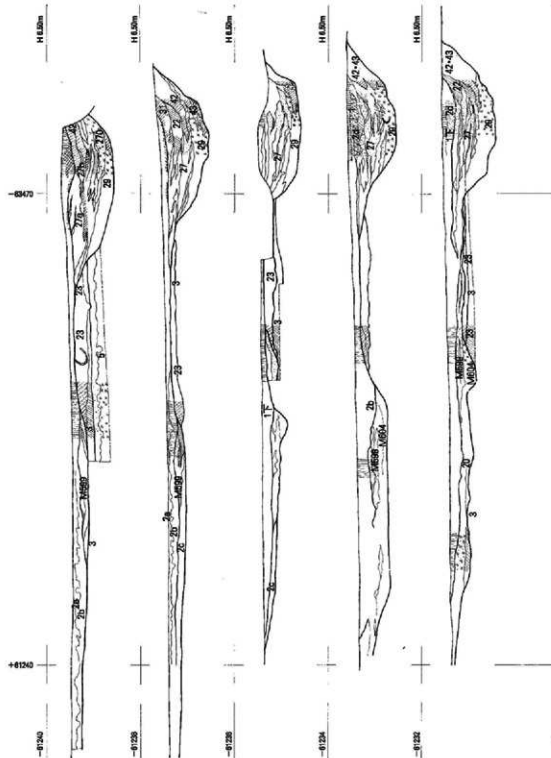
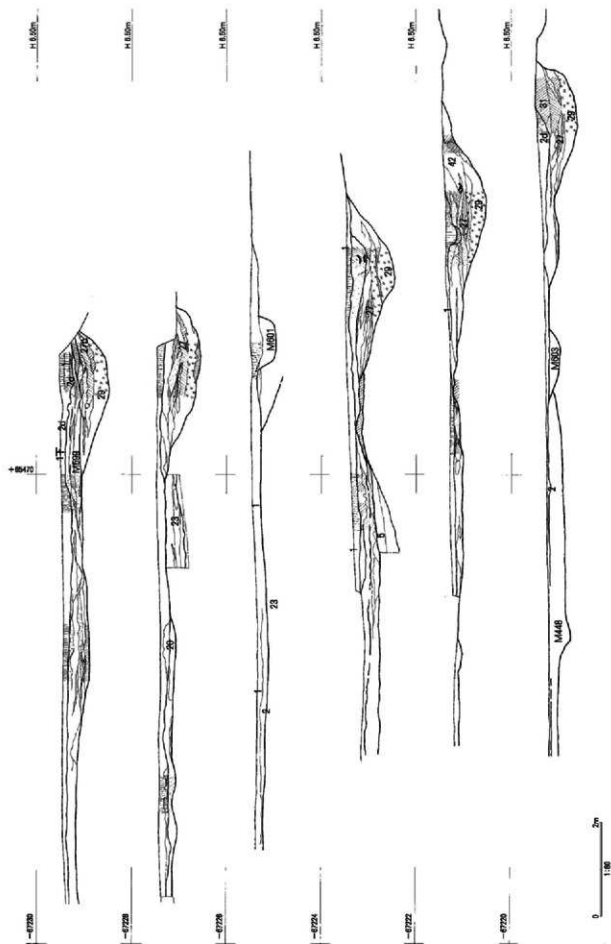


図93 溝427土層 (35-58~66) (1:80)





8504 海42T土層 (365-38~47) (1:80)



図95 溝427上面 (21・27層) (西から)



図96 溝427土層 (35-85・96) (東から)



図97 溝427土層 (35-96) (東から)



図98 溝427土層 (35-76) (東から)



図99 溝427土層 (35-66・67) (東から)

図100 溝427遺物出土状況 [35-6731区]
(西から)



図101 溝427遺物出土状況
[35-6751区27層] (北西から)



図102 溝427遺物出土状況 [35-67区27層]
(北から、R3577ほか)





図103 溝427遺物出土状況 (35-96区)
(北から)



図104 溝427遺物出土状況
(35-48区27・29層層) (北から)



図105 溝427遺物出土状況
(35-6713区27・30層) (北から)

図106 溝427遺物出土状況
 (35-6723区27・29層) (北から)



図107 溝427遺物出土状況
 (35-6751区27・29層) (北から)



図108 溝427遺物出土状況
 (35-8612区27・29層) (北から)



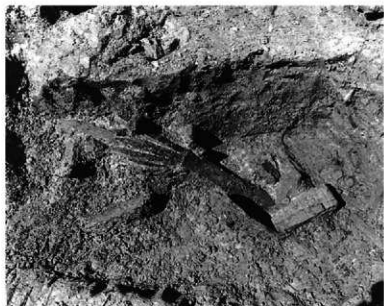


図109 溝427竈971出土状況
〔35-0653区4a層〕（東から）



図110 溝427竈3662出土状況
〔35-6713区27・30層〕（西から）



図111 溝427土器3501出土状況
〔35-6713区27・30層〕（北から）



図112 溝427 (1区) (南から)



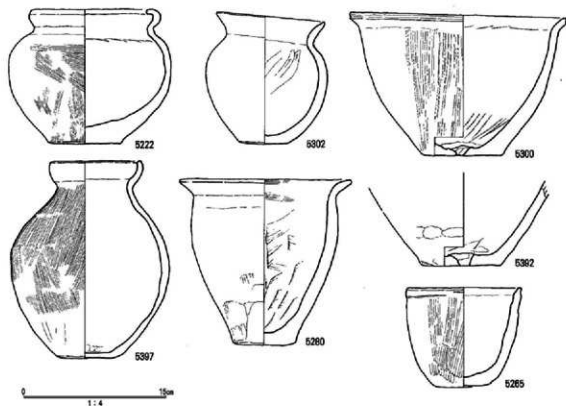
図113 溝427 (3区西中部) (南から)



図114 溝427 (3区東半部) (東から)



図115 溝427 (3区中央部) (東から)



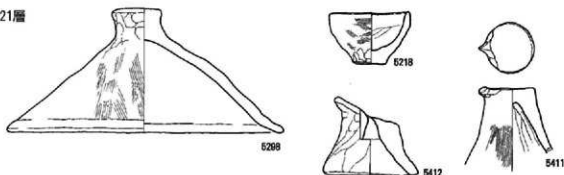
遺物 番号	遺構 番号	区	出土位置	遺物種別	年代	遺物特記	材質(胎土・焼成・施釉)
5222	427	3	G35-2853 2 1層	弥生土器 壺	弥生/ 後期		胎土：粒状性あり、粗砂～細礫を顕著。 断面：薄層状、孔隙を生じる。脆い。 器表：くすんだ赤みの黄(7YR 5.5/4 コルク)。
5265	427	1	G35-0551 4 層(粗砂、 集中部)	弥生土器 深鉢	弥生/ 後期		胎土：粒状性、細砂を顕著に含む。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ヒスケット)。
5280	427	3	G35-5754 (～55) 21層	弥生土器 壺	弥生/ 後期		胎土：粒状性あり、粗砂～細礫を顕著に含む。 断面：団粒状。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(9YR 5.5/2.5 空五倍子色)。
5300	427	3	G35-4841 2 1層	弥生土器 壺	弥生/ 後		胎土：緻密、粗砂を顕著に含む。 断面：団塊状。 器表：やわらかい黄赤(6.5YR 7/6 細羅色)。
5302	427	3	G35-4831 2 1層	弥生土器 壺	弥生/ 後		胎土：粒状性あり、粗砂を顕著に含む。 断面：団塊状。 器表：明るい灰みの黄(2.5YR 7.5/2 砂色)。
5392	427	3	G35-4756 2 1層	弥生土器 壺	弥生/ 後期		胎土：粒状性顕著。砂粒、特に細砂顕著。 断面：団粒状。 器表：灰みの黄赤(5YR 6/6 江戸茶)。
5397	427	3	G35-2854 2 1層	弥生土器 壺	弥生/ 後期	外底面に精緻な模倣 数遺存。	胎土：緻密、粗砂をわずかに含む。 断面：団粒状、細孔を生じる。 器表：上掛けを行う。口縁内面から 底面をのぞく外面の全体で、くすんだ 黄赤(2YR 5.5/6 土器色)を呈す。 内面はやわらかい赤みの黄(9 YR 7.5/4 電粉色)。

図116 溝427-21層出土遺物1(1:4)

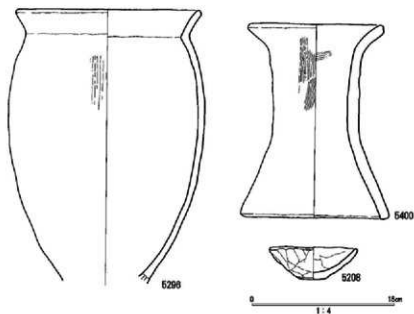


成形・調整	計測 精度	口径/ 長さ	底径/ 器/径	器高/ 厚さ	計測値 備考	遺存 (組・状態)
内面：撫で調整。 外面：体部の全面に刷毛目調整。左上方向。頸部以上口縁部まで 周回方向の撫で調整。 底部：平底。平面形はいびつで楕円形状。	復原	138	80	142		1/3を欠く
内面：撫で調整。成形時の凹凸が残る。口縁端部に粘土縞を貼り つけたものか？ 外面：口縁端付近まで縦方向で粗目の刷毛目調整→部分的に撫で 調整。 底部：体部からの粘土はみ出しによりやや凹面を成す。縁部丸み。	実測	125	54	106		ほぼ完存
内面：体部中位～下半部ジグザグ方向の刷毛目調整（条線微弱）。 外面：縦方向の刷毛目調整、体部中位では、胎土表面を掻き取る ような状態。 口縁部：内面に口縁に沿う方向の刷毛目調整→口縁部内外面に口 縁部に沿う方向の撫で調整。	復原	181	67	175		上部の大部 分を欠く。
内面：縦方向で粗目の刷毛目調整→内面の全体に撫で調整、底部 から放射状に鏝状工具の当て殺。 外面：縦方向粗目の刷毛目調整。 底部：焼成前に底部穿孔。内底面から押しくぼめる。	実測	232	83	149		1/3欠
内面：体部全体に撫で調整。体部下半に右上方に掻き上げるよう な撫で調整。 外面：撫で調整。体部縦い凹凸面で構成される。 口縁部：頸部直下まで周回方向の撫で調整。 底部：緩い凸面を成す。	復原	115	50	132		口縁部の大 部分を欠く。 素表の荒れ 顕著。
内面：籠状の工具による撫で調整。左上方向？ 外面：撫で調整。底部肩縁に鋭角具圧痕。 底部：内面は周回方向の撫で調整（くぼむ）。外底面に撫で調整。 小さな凹凸面が残る。中央に焼成前に外底面方向から穿孔。	実測		84		底面は正 確にいう と、楕円 形。	底部
内面：底面、肩部に指押え痕、底面目それは小径。内面の全体に 撫で調整。 外面：口縁部直下から底部まで縦方向に斜め方向を交える刷毛目 調整→体部下半に撫で調整→。 口縁部：内外面周回方向の撫で調整。 底部：平底、縁部に丸みを生じる。	復原	96	208	63		肩部以上の 半ばを欠く。

21層



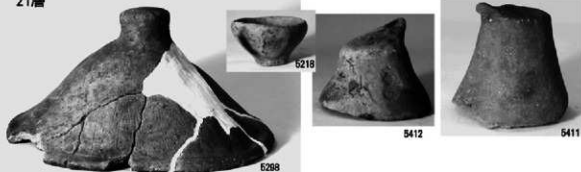
31層



遺物 番号	遺構 番号	区	出土位置	遺物種別	年代	遺物特記	材質(胎土・焼成・施釉)
5218	427	3	G35-7624 21層	弥生土器 手捏土器			胎土：緻密、粗砂を顕著に含む。 断面：団粒状。 器表：上掛けを行う？斑状に残る。暗い灰みの黄赤 (1YR 4.5/4 樹皮色)。施釉部はやわらかい赤みの黄 (9YR 7.5/4 砥粉色)。
5298	427	3	G35-2853 21層	弥生土器 蓋	弥生/後		胎土：粒状性あり、粗砂を含む。 断面：団粒状。 器表：くすんだ黄赤 (5YR 5.5/6.5 胡粉色)。
5411	427	3	G35-4831 21層	弥生土器 器台	弥生/終末		胎土：粒状性あり、粗砂を含む。 断面：団粒状。 器表：やわらかい赤みの黄 (7.5YR 6.5/4 芝蕨茶)。
5412	427	3	G35-6733 21層	弥生土器 器台	弥生/終末期	突起部側の側面1/3に塊状の付着物(黒褐色)。	胎土：粒状性あり、粗砂を含む。 断面：団粒状。 器表：やわらかい赤みの黄 (9YR 7.5/4 砥粉色 *よりにぶい)。
5296	427	3	G35-3824 31層	弥生土器 甕	弥生/後期	体部下1/3の内面に付着物。黒色で、器表の遺存状態から擦ると、器壁に吸着したものか。	胎土：やや緻密、粗砂を顕著に含む。 断面：団粒状。 器表：明るい灰みの黄 (2.5Y 7.5/2 砂色)。
5208	427	3	G35-4851 31層	弥生土器 手捏土器	弥生/後期		胎土：やや粒状性、粗砂を顕著に含む。 断面：団粒状。 器表：上掛けを行う。くすんだ黄赤 (2YR 6/8 緋)。
5400	427	3	G35-3824 31層	弥生土器 器台	弥生/後期		胎土：顕著な粒状性、粗砂・細砂を含む。 断面：団粒状。 器表：やわらかい赤みの黄 (9YR 7.5/4 砥粉色)。

図117 溝427-21層出土遺物 2・31層出土遺物 (1:4)

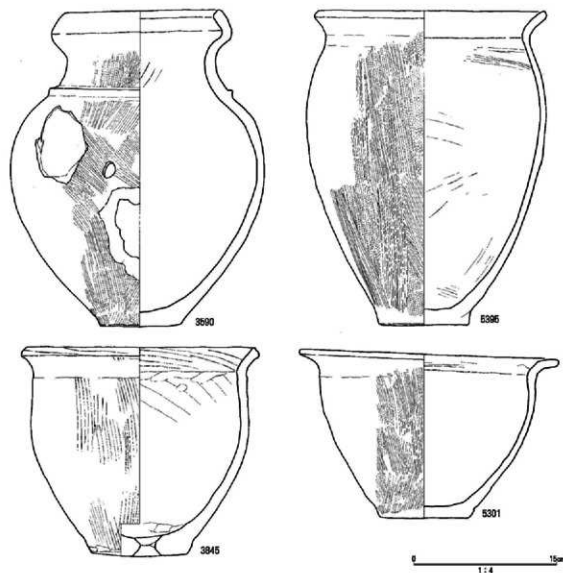
21層



31層



成形・調整	計測 精度	口縁/ 長さ	底径/ 幅/径	器高/ 厚さ	計測値 備考	遺存 (組・状態)
内面：撫で調整、工具条痕が残る。 外面：体部に不定方向で、不整の短い単位の磨磨き調整（疎）。 底部：平底。	実測	88	38	52		完存
内面：撫で調整(斜め方向のものは条線を残す)、唇部を先行→ 外面：放射方向に粗目の房毛目調整。→口縁部内外面周回方向の 撫で調整。	実測		287	132	持ち頂部 径：52 (いびつ)	1/3欠
内面：縦方向撫で調整。 外面：縦方向の房毛目調整。 上縁の一端をつまみ出し尖起を整形。	実測	53			径は受部 の径	基部を欠く を欠く
内面：唇部に粗い房毛目調整(縁部に沿う)→撫で調整。 外面：指押え痕(右上方でらせん状)→撫で調整。 孔部分は焼成前に整形か？	実測		105	82		唇部の一部 を欠く
器表は荒れて調整の詳細は不詳。体部外面に縦方向の房毛目調整、 内面は撫で調整。	復原	197			器高は29 0mmを 守り越える。 器表は荒れて、大部分 剥離？	1/2の破片。 底部を欠く。 器表は荒れて、大部分 剥離？
内外面：指押え痕。 底部：わずかに凸面。周縁に丸み。	実測	96	30	32		口縁の一部 を欠く。
器表の荒れが顕著で調整の詳細は不明。内面は撫で調整か。いち ぶんに水平方向の房毛目調整痕。外面には縦方向の房毛目調整痕。 受部端部は、内外面の周回方向の撫で調整により最終的な整形が 行われる。	復原	137	150	202		上部欠。器 表荒れ。



遺物番号	遺構番号	区	出土位置	遺物種別	年代	遺物特記	材質(胎土・焼成・施釉)
3590	427	3	G35-6722 2 2層	弥生土器 甕	弥生/ 後期	体部の内外面に火 鉄ね状の剥落。外 面のものは大きく、 大きな孔となる部 分がある。 体部に穿孔。器表 面の剥落の一部か とも考えられる。 径は16mm、内面の 器表が広く剥落し ている。	胎土：粒状性あり、粗砂・細礫を含 む。 断面：団粒状。 器表：やわらかい黄赤 (6.5YR 7/6 無釉色)。
3845	427	3	G35-6724 2 2層	弥生土器 甕	弥生/ 後期		胎土：粒状性あり、粗砂を顕著に含 む。 断面：団粒状。 器表：明るい灰みの黄 (2.5YR 7.5 /2 砂色)。体部中央部の外面が欠く、 剥落する。
5301	427	3	G35-4851 2 2層	弥生土器 鉢	弥生/ 後期		胎土：粒状性あり、粗砂を顕著に含 む。 断面：団塊状。 器表：やわらかい赤みの黄 (9YR 7. 5/4 砥粉色)。
5395	427	3	G35-4851 2 2層	弥生土器 甕	弥生/ 後期	外面の体部中位に 片側に楕状付着物。 内面の体部中位～ 下位に斑状の付着 物(楕状)。	胎土：粒状性あり、粗砂を含む。 断面：団粒状。 器表：やわらかい黄赤 (6.5YR 7/6 無釉色)。



3590



5365

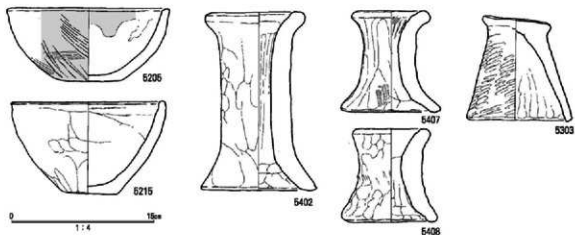


3845



5301

成形・調整	計測 精度	口径/ 長さ	底径/ 幅/径	器高/ 厚さ	計測値 備考	遺存 (體・状態)
<p>内面：全体に撫で調整。頸部には鍍状の工具当て痕。</p> <p>外面：頸部から体部の全体に粗目の刷毛目調整。頸部では縦方向、体部上部では右上方、肩部から下半部かけて左上方、底部付近では縦方向。</p> <p>口縁部は、端部に粘土を継ぎ足して？内方に湾曲整形。内外面は周回方向の撫で調整。口縁端は内方を向く端面を形成する部分がある。</p> <p>底部：ごくわずかな凸面で平滑。</p>	実測	198	92	334		ほぼ完存。
<p>内面：撫で調整。体部から口縁部への屈曲部に指押え痕。体部上半部に左上方に挿えて刷毛目調整(条線跡著)。</p> <p>外面：口縁端直下から縦方向粗目の刷毛目調整→口縁部には周回方向の撫で調整。</p> <p>口縁部：内面側に粗目の刷毛目調整、口縁部に沿う。口縁端部刷毛目調整後、周回方向の撫で調整。</p> <p>底部：緩い凸面を成す。内底面同様に沿う指押え痕。中央部に焼成後内外面両方向からの穿孔、刷り削りにより縁部に丸み。</p>	復原	250	101	218		1/3を欠く。
<p>内面：全体に撫で調整。口縁部付近では斜め方向で幅広(条線が残る)。</p> <p>外面：縦方向不整で粗目の刷毛目調整。</p> <p>口縁部：周回方向の撫で調整。端部は最終段階で上面の周回方向の撫で調整により整形。</p> <p>底部：平底。外面に磨れ。</p>	実測	272	92	182		上半部の一部を欠く(破片接合資料)。
<p>内面：撫で調整。体部上部に左上方の条線。下半部に右下に鍍状の工具当て痕。</p> <p>外面：縦方向に挿えた刷毛目調整→口縁部に周回方向の撫で調整。</p> <p>底部：平底。ややうねり。一部に黒斑。</p>	実測	244	96	334		体部の中位を欠く。



遺物番号	遺構番号	区	出土位置	遺物種別	年代	遺物特記	材質(胎土・焼成・施釉)
5205	427	3	G35-5831 2 2層	弥生土器 鉢	弥生/ 中期?		胎土:粒状性あり、細砂~粗砂を。 断面:団粒状。 器表:底部を含む外面の全体、口縁部付近の内面まで化粧掛けを行う。くすんだ黄赤(2YR 6/8 極)。
5215	427	3	G35-4851 2 2層	弥生土器 鉢	弥生/ 後期	内底面に付着物。 黒褐色で厚みをもつ。	胎土:緻密、粗砂を含む。 断面:薄層状。明るい灰みの赤みを帯びた黄(10YR 7/2.5 ベージュ)。 器表:やわらかい赤みの黄(9YR 7.5/4 磁粉色)。
5303	427	3	G35-4851 2 2層	弥生土器 蓋台	弥生/ 終末	受部上面煤状付着物。	胎土:粒状性あり、粗砂を含む。 断面:団粒状。 器表:やわらかい赤みの黄(9YR 7.5/4 磁粉色)。
5402	427	3	G35-6733 2 2層	弥生土器 蓋台			胎土:粒状性あり、細砂を含む。 断面:団粒状、細孔を生じる。 器表:くすんだ黄赤(2YR 6/8 極)。
5407	427	3	G35-4851 2 2層	弥生土器 蓋台			胎土:粒状性あり、粗砂を顕著に含む。 断面:団粒状。 器表:灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット)。
5408	427	3	G35-6741 2 2層	弥生土器 蓋台		受部縁から縦方向の亀裂。	胎土:粒状性あり、粗砂を含む。 器表:灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット)。

図119 溝427-22層出土遺物2 (1:4)



5206



5216



5402



5407



5408



5303

成形・調整	計測 精度	口径/ 長さ	底径/ 幅/径	器高/ 厚さ	計測値 備考	遺存 (種・状態)
内面：撫で調整。 外面：縦方向の刷毛目調整→底部から放射方向にひろがる粗目の刷毛目調整→化粧掛け。 口縁部：断面弧状の端面。 底部：平底、刷毛目調整。縁部に丸み。	実測	172	65	73		口縁の一部を欠く(破片接合資料)
内面：左上方向の撫で調整。内底面に覆状の工具当て痕。 外面：撫で調整。かすかに凹凸面が残る。 口縁部：内外面口縁に沿う方向の撫で調整。 底部：平底。	実測	165	55	10		口縁の一部を欠く。
内面：縦方向の指押え痕、平行。 外面：粗目の叩き目調整。 受部：上面平坦、叩き目調整。	実測	70	110	107		ほぼ完存
内面：縦方向に細かな絞り痕。 外面：縦方向を主とした撫で調整。 受部：撫で調整。方向は一定しない。 唇部：設置面を兵隊に撫で調整。唇部の粘土は外面方向にはみ出す。	実測	105	120	189		唇部を部分的に欠く
内面：縮れ部に絞り痕。受部・唇部に斜め方向の刷毛目調整→撫で調整。 外面：縦方向の刷毛目調整、周回方向に配列(大半の器表は剥落して調整単位の面として残る)。	実測	83	104	103		受部の縁部に欠落部。器表剥落。
内外面：指押え痕(左下から螺旋状に配列)。縮れ部中央には帯状に爪痕(右上方から)。	実測	83	101	10		完存

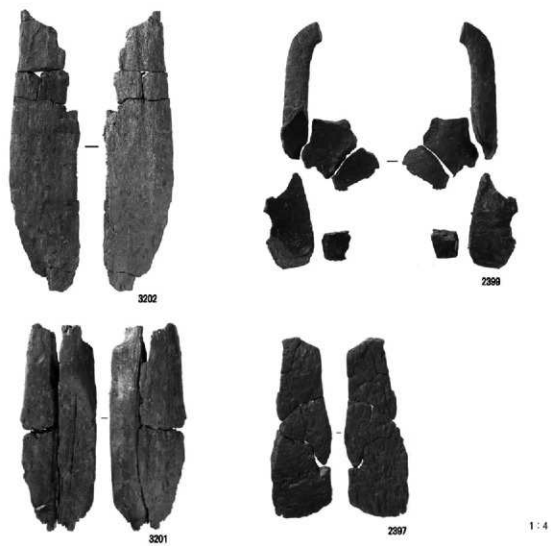


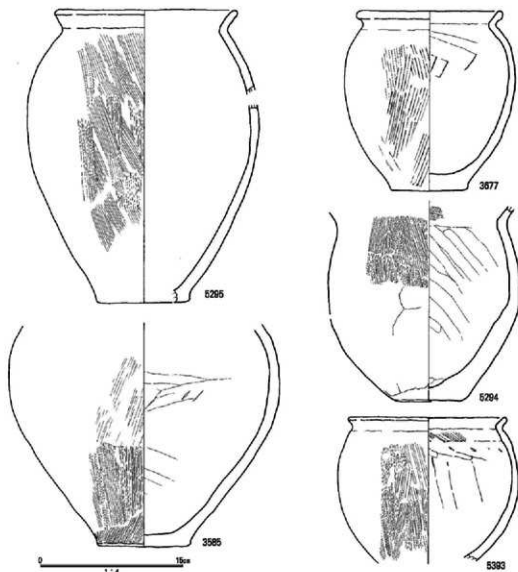
图120 溝427-21層出土遺物 3



3284

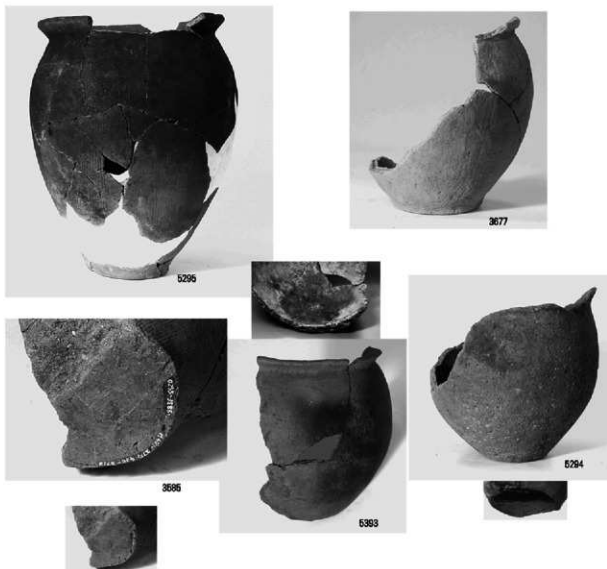
1:4

图121 溝427-22層出土遺物 3

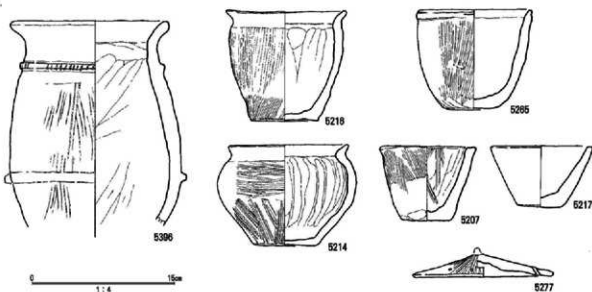


遺物番号	遺構番号	区	出土位置	遺物種別	年代	遺物特記	材質(胎土・焼成・施釉)
3585	427	3	G35-6713 2 7層	弥生土器 甕	弥生/後期		胎土：粒状性、粗砂を顕著に含む。 断面：薄層状。 器表：やわらかい赤みの黄 (7.5YR 6.5/4 芝蕨茶)。
3677	427	3	G35-6722 2 7層	弥生土器 甕	弥生/後期		胎土：粒状性あり、粗砂を僅か含む。 断面：団粒状。 器表：やわらかい赤みの黄 (2YR 7.5/4 砥粉色)。
5295	427	3	G35-4811 2 7層下部	弥生土器 甕	弥生/後期	外面：体部中位以上口縁端部まで葉状の付着物。特に口縁部には多く付着。 内面：体部下半2/3の部分に付着物(器表に吸着したものか、器表の変化にみえる)。	胎土：粒状性あり、粗砂を含む。 断面：団粒状。 器表：赤みの灰色 (2.5R 5.5/1 ローズグレー)、器表に吸着物?。
5393	427	3	G35-5734 2 7層下部	弥生土器 甕	弥生/後期	下半部片割の内面に付着物(つよい赤 (4R 4/11 燕脂)、斑状)。	胎土：粒状性あり、粗砂を含む。 断面：団粒状、細孔を生じる。 器表：灰みの赤みを帯びた黄 (8YR 6.5/3 ビスケット)。
5294	427	1	G35-0654 4 層a	弥生土器 甕	弥生/後期	上半部に煤状の付着物。	胎土：顕著な粒状性、粗砂を顕著に含む。 断面：顕著な団粒状、くすんだ黄赤 (2YR 5.5/6 土器色) を呈す。 器表：灰みの赤みを帯びた黄 (8YR 6.5/3 ビスケット)。

図122 溝427-27層出土遺物 1 (1:4)



成形・調整	計測 精度	口徑/ 長さ	底径/ 幅/径	器高/ 厚さ	計測値 備考	遺存 (量・状態)
<p>内面：縦溝(特に周回方向)に撫で調整。条線顕著。器表は水を含んだ状態か。体部最大径部に刷毛目調整工具かと思われる工具痕の圧痕。集積方向に配列。</p> <p>外面：下半部に縦方向の刷毛目調整→体部上半部に斜め方向粗目の刷毛目調整。</p> <p>底部：平底。縁部では体部側に粘土張り出し。</p>	復原		99			底部小破片
<p>体部内面：全体に撫で調整(縦方向)→上部に左上がりの刷毛目調整(粗目で極細い条線、工具の留め痕明瞭)。</p> <p>外面：縦方向粗目の刷毛目調整。</p> <p>口縁部：内外面撫で調整。器表の荒れが顕著で詳細不明。</p> <p>底部：平底。縁部体部外方に膨らみを生じる。</p>	復原	153	52	189		1/4の破片
<p>内面：撫で調整。</p> <p>外面：体部の全体に縦方向の刷毛目調整。短い単位で繰り返す。口縁部：周回方向の撫で調整。外面の撫で調整→内面の撫で調整(体部側の撫で調整に先行)。</p> <p>底部：平底。</p>	実測	211	102	304		底部、口縁部を欠く
<p>体部内面：口縁直下の体部斜め方向の刷毛目調整→左上方の撫で調整。浅い角度で口縁に沿い左回りに進行。それ以下は縦方向の撫で調整(条線が残る)。</p> <p>体部外面：縦方向短い単位の刷毛目調整(密)。</p>	復原	168				底部を欠く小破片(1/4)
<p>内面：底部指押え痕。体部に左上がり平行する撫で調整(飯伏の工具により、単位ごとに浅い凹面を生成。端部に爪痕状の圧痕)。</p> <p>外面：体部上半部に縦方向で粗目の刷毛目調整(短い単位を繰り返す)。下半部に撫で調整(幅広で下方向。砂粒が移動して器表は著しく荒れた状態)。</p> <p>口縁部：内面に口縁に沿う方向の刷毛目調整。外面に撫で調整。</p> <p>底部：平底だが、凹凸あり。縁部に丸み。</p>	実測		74			体部、下半部器表は非常に濃い。

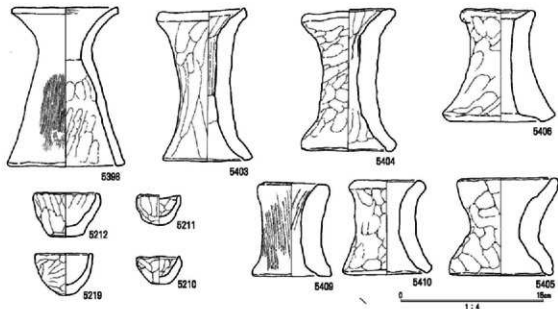


遺物番号	遺構番号	区	出土位置	遺物種別	年代	遺物特記	材質(胎土・焼成・施釉)
5207	427	3	G35-6645 2 7層	弥生土器 深鉢	弥生/ 後期		胎土：粒状性あり、粗砂を含む。 断面：団粒状。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(9YR 3.5/2.5 空五倍子色)。
5214	427	3	G35-5751 2 7層下部	弥生土器 甕		内部内面に赤色顔料？付着、こい赤(4R 3.5/11 茜色)。	胎土：やや粒状性、粗砂を含む。 断面：薄層状。 器表：暗い灰みの赤みを帯びた黄(8.5 YR 4.5/2 フェーン)。
5216	427	3	G35-3833 2 7層	弥生土器 甕	弥生/ 後期	片側外面に黒斑。	胎土：やや粒状性、粗砂を含む。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット)。
5217	427	3	G35-3851 2 7層下部	弥生土器 鉢			胎土：やや粒状性。 器表：上掛けを行う：くすんだ黄赤(2YR 5/8 糠)。露胎部：明るい灰みの赤みを帯びた黄(10YR 8/3 薄霽)。
5265	427	1	G35-0551 4 層(粗砂、 集中部)	弥生土器 深鉢	弥生/ 後期		胎土：粒状性、細砂を顕著に含む。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット)。
5277	427	1	G35-0544 4 層a	弥生土器 蓋	弥生/ 中期		胎土：粒状性あり、わずかに粗砂を含む。 断面：均質。 器表：化粧掛け部：暗い黄赤(10R 4/5.5) 稷状に残る。
5396	427	3	G35-2854 2 7層	弥生土器	弥生/ 後期		胎土：粒状性あり、粗砂を顕著に含む。 断面：団粒状。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット)。

図123 溝427-27層出土遺物2 (1:4)



成形・調整	計測 精度	口径/ 長さ	底径/ 高さ	器高/ 厚さ	計測値 備考	遺存 [個・状態]
内面：縦方向の刷毛目調整→粗い撫で調整。 外面：縦方向の刷毛目調整→下半部に収伏工具による撫で調整(多面体状を呈す)。 口縁部：縁部に刷毛目調整→荒く撫で調整(刷毛目調整痕が部分的に残る)。非常に不整な口縁端部。 底部：平底。撫で調整。	実測	104	57	78		ほぼ完存
内部内面：撫で調整(縦方向)。頸部から底部付近まで続く指押え痕が均等に配列。内底面は往復方向の撫で調整。 外面：磨き調整。上半部に水平、やや斜め方向のもの→下半部に残るいはやや斜めになるものを一定範囲ごとに行う。 口縁部：周回方向の撫で調整。 底部：平底。撫で調整。	実測	123	71	104		口縁の一部を欠く。器表の荒れ顕著。
内部内面：指押え痕→縦方向の撫で調整。 外部外面：縦方向粗目の刷毛目調整→底部付近に縦方向粗目の刷毛目調整→口縁部に続く周回方向の撫で調整。 口縁部：内外面周回方向の撫で調整、一部は体部外面に及ぶ。 底部：凹面を成す。工作台瓦痕を残す？	実測	96	67	115		完存
内外面：撫で調整。 底部：わずかに凸面。平滑。	実測	109	44	63		完存。器表の荒れ顕著。
内面：撫で調整。成形時の凹凸面が残る。口縁端部に粘土紐を貼りつけたものか？ 外面：口縁端付近まで縦方向で粗目の刷毛目調整→部分的に撫で調整。 底面：体部からの粘土はみ出しによりやや凹面を成す。縁部丸み。	実測	125	54	106		ほぼ完存
全面に化粧掛け。 内面：指押え、中央部に凹部→撫で調整。 外面：中心から放射状に磨き調整。	実測		152	25	器高は、積み部を欠く。上面の荒れ顕著(2/3があげた状態を呈す)	縁部の一部、積み部を欠く。上面の荒れ顕著(2/3があげた状態を呈す)
内面：体部に右上方を主とした撫で調整。条線、単位が明瞭な部分がある。 外面：縦方向粗目の刷毛目調整→突起貼り付け・突帯部を中心とした周回方向の撫で調整→部分的な撫で調整。器表の凹凸が残る。 口縁部：周回方向の撫で調整。	復原	167				上下部を欠く



遺物番号	遺構番号	区	出土位置	遺物種別	年代	遺物特記	材質(胎土・焼成・地味)
5210	427	3	G35-3832 2 7層下部	弥生土器 手捏土器			胎土：やや粒状性、粗砂を顕著に含む。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット)。
5211	427	3	G35-6732 2 7層	弥生土器 手捏土器			胎土：やや粒状性、粗砂を含む。 断面：団塊状。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット)。
5212	427	3	G35-6655 2 7層	弥生土器 手捏土器	弥生/後期		胎土：やや粒状性、粗砂を顕著に含む。 器表：くすんだ赤みの黄[7YR 5.5/4 コルク]。
5219	427	3	G35-7633 2 7層	弥生土器 手捏土器			胎土：緻密、細砂を含む。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット)。内面の全体、外面の半ばが黒化。
5398	427	3	G35-3851 2 7層下部	弥生土器 器台	弥生/終末		胎土：粒状あり、粗砂を顕著に含む。 断面：薄層状。 器表：やわらかい赤みの黄(6YR 7/6 杏色)。
5403	427	3	G35-4812 2 7層下部	弥生土器 器台	弥生/		胎土：粒状性顕著、粗砂を顕著に含む。 断面：薄層状。 器表：灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット)。
5404	427	3	G35-3814 2 7層	弥生土器 器台	弥生/後期		胎土：粒状性顕著、粗砂・細砂を含む。 断面：団塊状。 器表：フィールド1 灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット)。
5405	427	3	G35-3832 2 7層下部	弥生土器 器台			胎土：粒状性あり、粗砂を顕著に含む。 断面：団塊状。 器表：やわらかい赤みの黄(8YR 6.5/5 パフ)。脆い。
5406	427	3	G35-7634 2 7層	弥生土器 器台	弥生/後期	受部内面の凸部に 周回方向帯状の擦れ(部分的)。受部内面の一部とそれに連なる嘴部の一部に煤状の付着物、斑状に残る。	胎土：粒状性あり、粗砂・細砂を含む。 断面：団塊状。 器表：薄く付着物？(灰みの赤みを帯びた黄(8YR 5.5/2.5 空五倍子色)。それ以外はくすんだ黄赤(2YR 6/8 壤)。
5409	427	3	G35-6723 2 7層	弥生土器 器台	弥生/後期		胎土：粒状性あり、粗砂を含む。 器表：明るい灰みの黄(2.5Y 7.5/2 砂色)。
5410	427	3	G35-3813 2 7層	弥生土器 器台	弥生/後期	完存。器表の荒れ顕著。	胎土：粒状性あり、粗砂を顕著に含む。 断面：団塊状。 器表：やわらかい赤みの黄(8YR 7.5/4 紙粉色)。



成形・調整	計測 精度	口径/ 径き	底径/ 幅/径	器高/ 厚さ	計測値 備考	遺存 〔體・状態〕
内外面：指押え痕。 底部：やや凸面状。	実測	51	24	27		完存
内外面：指押え痕。 口縁部：肩部を内面に折り返す。	実測	48		31		口縁部分欠
内外面：指押え痕、密。 底部：やや凸面状の底面をつくる。	実測	77	37	45		完存
内面：撫で調整。 外面：指押え痕。	復原	63	21	40		上部の2/3 を欠く。
内面：肩部内面では縦方向に断続する指押え痕、放射状に配列。 受部内面では、肩部に口縁に沿う方向に刷毛目調整一撫で調整。 外面：肩部では縦方向の刷毛目調整(刷毛目を除く)を行わず。受部 には、粗目の刷毛目調整後周回方向の撫で調整。 受部：端面を整形。下縁→上縁の順に整形。 基部：不整に粘土の膨らみを生じる。	復原	129	131	165		上下部分欠。 器表の荒れ 顕著(半ば 剥落)。
内面：結部は縦方向に絞り痕とみられる縦方向の皺が並ぶ。 外面：縦方向の指押え痕が並列し、基部端に及ぶ。 受部：内面は口縁に沿う方向の撫で調整(製状工具痕)・斜めの 撫で調整→周回方向の撫で調整。外面は、肩部に周回方向の撫で 調整(端面は丸く整形)。 基部：内面撫で調整。	実測	94	95	159		結部の一部 を欠く。
内面：結部は縦状の工具当て痕か、縦方向で内面に配列。外面は 受部端から基部の全体に指押え痕。横状に断続。 受部：内面は斜め撫で調整。絞り痕が残る。肩部は丸く整形。 基部：内面に指押え痕。肩部は外面側から丸みをもたせて整形 (内側へ粘土の膨らみ)。	実測	95	102	152		ほぼ完存
内面：撫で調整。 外面：全面に指押え痕→撫で調整。	実測	108	112	103		受部の器表 に顕著な剥 落
内面：結部は横状に撫で調整し、平滑。受部は撫で調整。基部 は指押え痕。結部を残して押こぼめたような整形。 外面：指押え痕→撫で調整。 受部：一端を工具(刷毛目調整工具のようなもの?)でついで突 起を整形。	実測	75	117	118		受部の一部 を欠く。
内面：結部には絞り痕が残る。受部上端面・基部底面に粗目の刷 毛目調整。 外面：半ばに指押え痕。以外は縦方向粗目の刷毛目調整。		76	86	92		完存
内面：受部・基部に縦方向の指押え痕。 外面：指押え痕→撫で調整。	実測	82	99	101		完存。器表 荒れ。

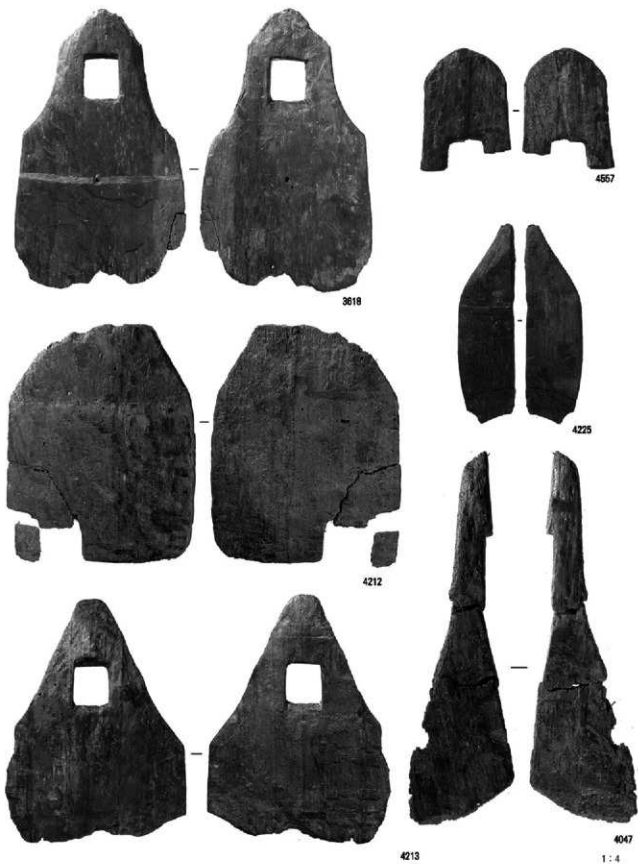


图125 濠427-27層出土遺物 4

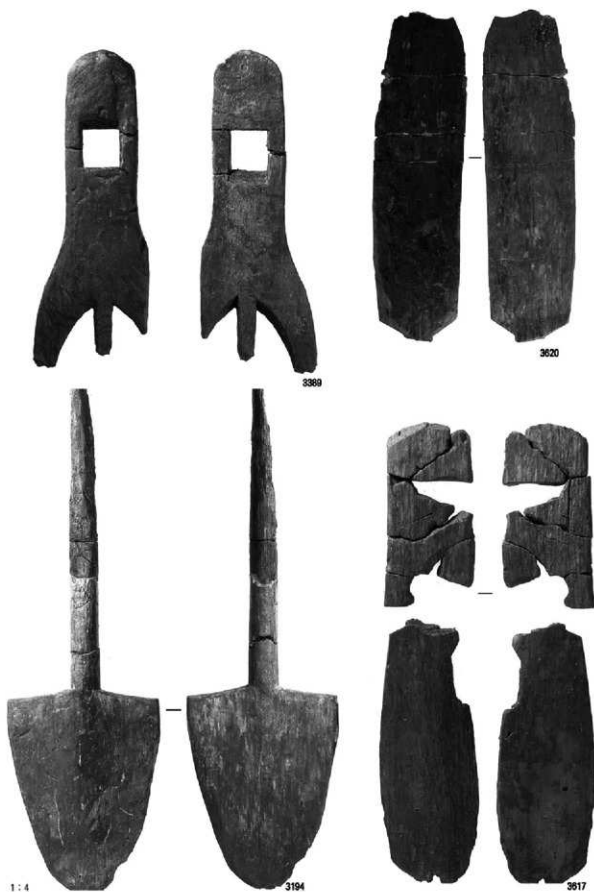


图126 溝427-27層出土遺物 5



图127 溝427-27層出土遺物 6

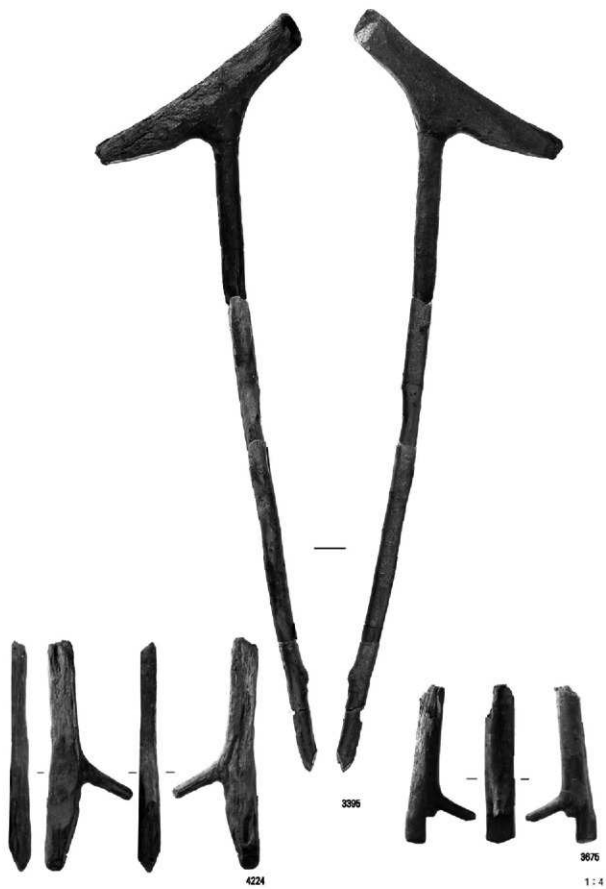


图128 濠427-27层出土遗物 7



图129 溝427-27層出土遺物 8

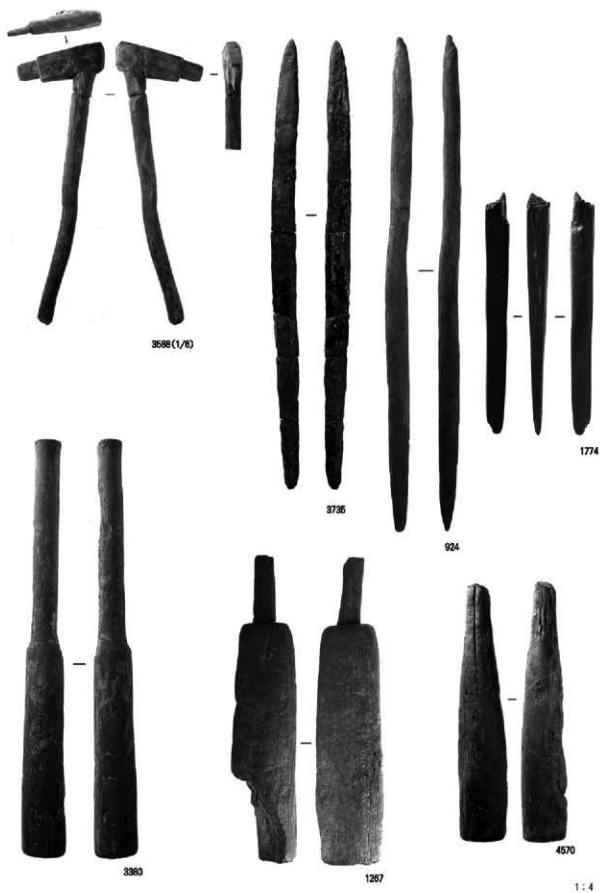


图130 溝427-27層出土遺物 9

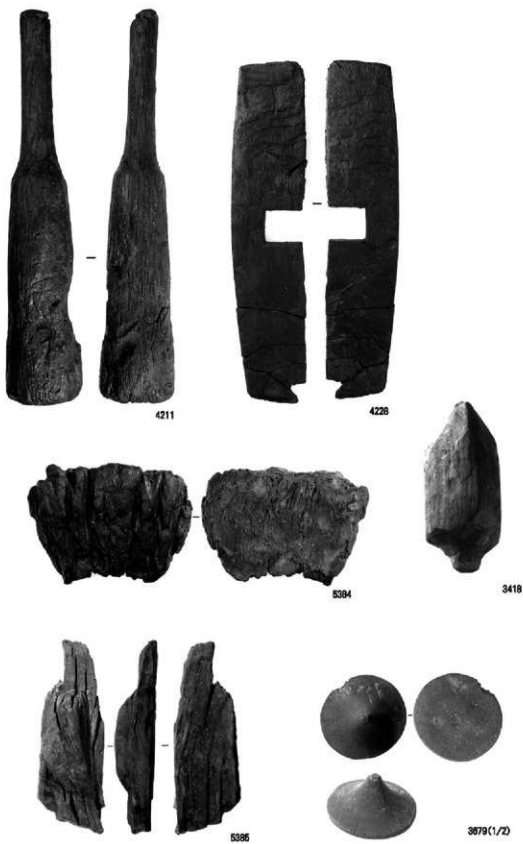


图131 溝427-27層出土遺物10

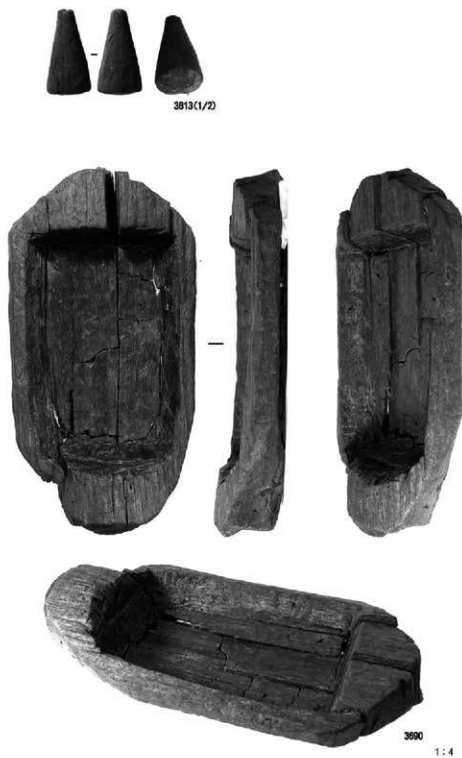


图132 溝427-27層出土遺物11

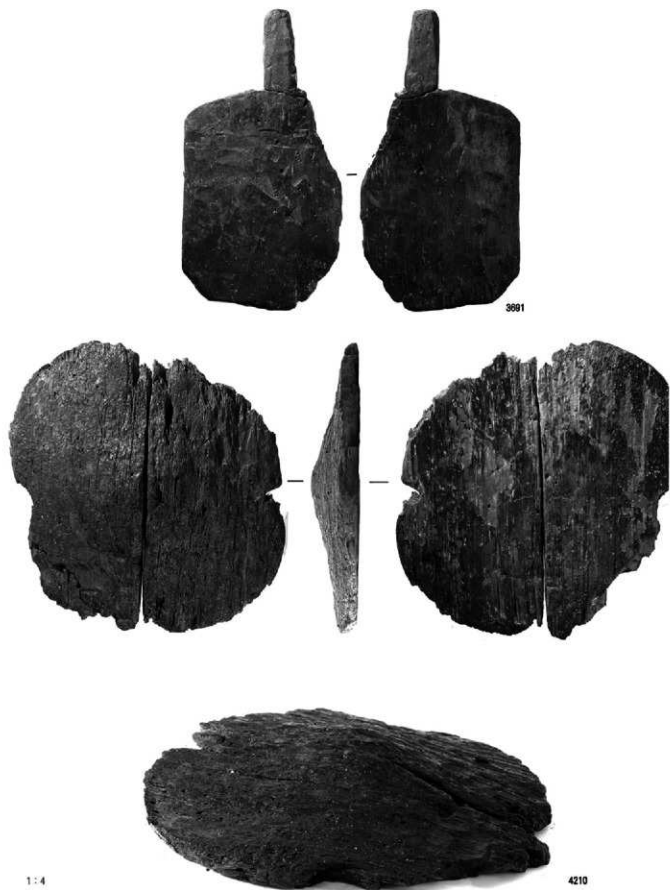


图133 葬427-27层出土遗物12

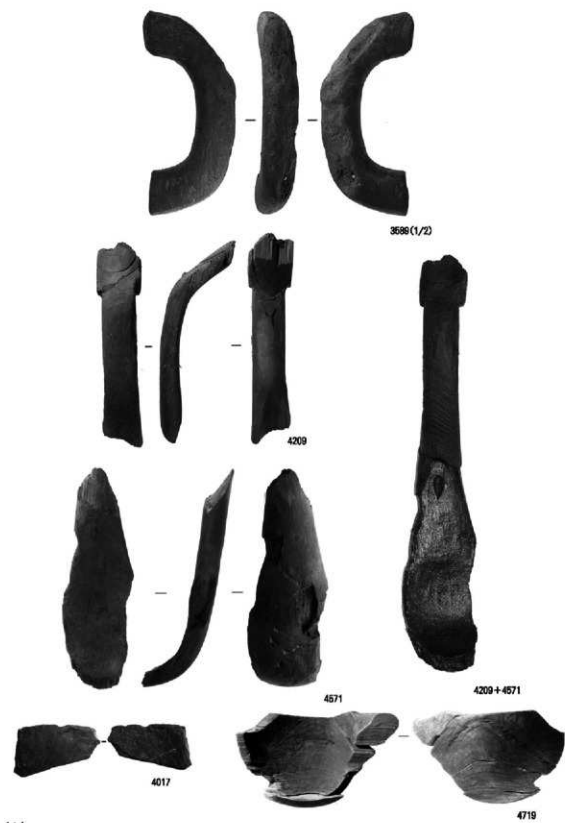
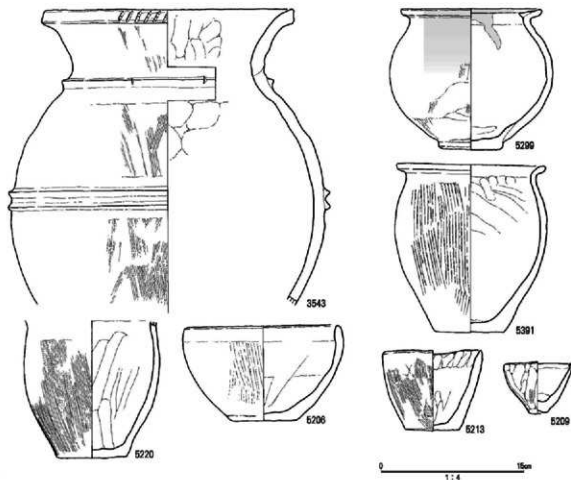


図134 溝427-27層出土遺物13

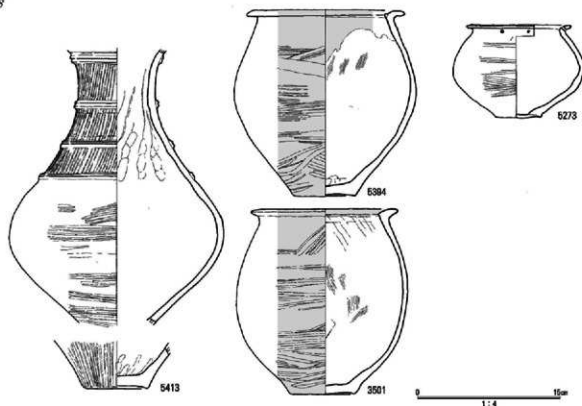


遺物番号	遺構番号	区	出土位置	遺物種別	年代	遺物特記	材質(胎土・焼成・施釉)
3543	427	3	G35-6742 2 9層	弥生土器 壺	弥生/後期	頸部突帯に刻み目。遠状工具での刻突よる。現況で3箇所。2箇所は近接し(間隔75mm)、他の1箇所は対向する位置にある。(突帯の1/6剥落)	胎土:粒状性顕著、粗砂を含む。断面:団粒状。器表:明るい灰みの黄(2.5Y 7.5/2 砂色)。
5206	427	3	G35-6741 2 9層(砂質)	弥生土器 鉢			胎土:粒状性あり、粗砂を含む。断面:団粒状灰みの黄赤(5YR 6/6 江戸赤)。器表:明るい灰みの赤みを帯びた黄(8YR 7/3 シャンパン)。
5209	427	3	G35-6525 3 6層(北岸斜面)	弥生土器 手捏土器			胎土:緻密、粗砂を含む。器表:灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット)。
5213	427	3	G35-6741 2 9層	弥生土器 深鉢	弥生/後期		胎土:やや粒状性、粗砂を含む。断面:灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット)。
5220	427	3	G35-4841 2 9層	弥生土器 壺 弥生土器 甕	弥生/後期	体部下半の対向する両外面に黒斑。	胎土:粒状性あり、粗砂を含む。断面:団塊状、くすんだ黄赤(2YR 5.5/6 土器色)。器表:灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット “やや黄味”)。
5299	427	3	G35-6741 2 9層	弥生土器 壺	弥生土器		胎土:緻密、粗砂を顕著に含む。断面:団粒状。器表:口縁部内外面から体部上半部に上掛けを行い、くすんだ黄赤(10R 5.5/6.5 赫)。器表:灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット)。
5391	427	3	G35-6741 2 9層	弥生土器 甕	弥生/後期		胎土:粒状性顕著、粗砂を含む。断面:団粒状。器表:灰みの赤みを帯びた黄(8YR 6.5/3 ビスケット)。

図135 溝427-29層出土遺物1(1:4)

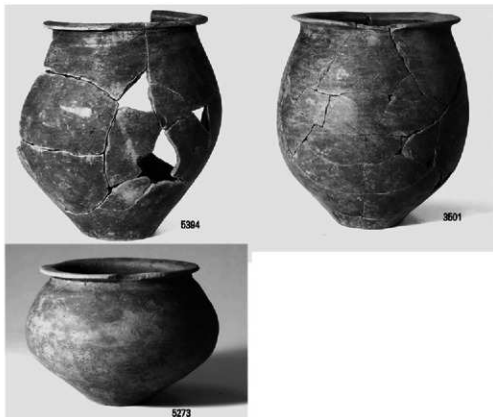


成形・調整	計測 精度	口径/ 長さ	底径/ 幅	器高/ 厚さ	計測値 備考	遺存 (観・状態)
<p>体部内面：緩い凹面(指押え痕、あるいは当て貝痕)→撫で調整(水平、やや左上方)。</p> <p>外面：縦、斜め方向の刷毛目調整、部分的な撫で調整→頸部基部、体部最大径部に突帯貼り付け→突帯部を中心に帯状に周回方向の撫で調整。下位の2条の突帯は下位、上位の粗で整形。</p> <p>口縁部：内面縦方向の指押え痕間隔をあけて配列。外面周回方向に指押え痕2条間隔をあけて配列→縦方向の刷毛目調整→周回方向の撫で調整。編みに間隔をあけて板状工具(刷毛目調整工具)に同じ7端による刻み目。</p>	復原	265			割部最大径：330mm、器高は底部を欠く現状で308mm。	下半部を欠く
<p>内面：撫で調整。不規則な凹面が全体に残る(指押え痕、撫で調整痕などが入り交じる)。</p> <p>外面：縦方向粗目の刷毛目調整→撫で調整(ごく軽度で、下位の刷毛目調整痕が残る)。</p> <p>口縁部：体部の内外面にかけて周回方向の撫で調整。</p>	復原	165	69	100		上半部の半ばを欠く。
<p>内面：撫で調整。</p> <p>外面：縦方向の指押え痕。</p> <p>口縁部：内面がわから口縁端部に周回方向の撫で調整。</p> <p>底部：顕著な凹面を成す。指押えか。</p>	実測	73	19	53		完存
<p>内面：指押え痕→撫で調整。</p> <p>外面：指押え痕→縦方向粗目の刷毛目調整。</p> <p>底部：ごくわずかな凸面。</p>	実測	104	55	87		完存
<p>体部内面：縦方向(上方)の撫で調整、上下2段にわたり、断面弧状で明瞭な帯状を成す。</p> <p>体部外面：縦方向の刷毛目調整→口縁付近は口縁に続く周回方向の撫で調整。内底面は指押え痕。</p> <p>底部：平底。縁部の粘土は外方にはみ出す。</p>	実測		72		器高は150mmをやや超える。	口縁部を欠く。
<p>体部：内面)全体に凹面の分布→撫で調整。口縁部付近では左上方に条線。外面)全体、特に下半部に整形時の凹面を残す。縦方向で短く区切る刷毛目調整→撫で調整(全面に及ぼす、刷毛目調整痕が部分的に残る)。</p> <p>口縁部：内外面、直下の体部をよくめ周回方向の撫で調整。</p> <p>底部：平底。作業台の圧痕を残し、凹凸顕著。縁部は体部側へ膨れる。</p>	復原	149	68	152		1/2を欠く。
<p>体部内面：口縁部よの接合部に指押え痕、全面に撫で調整。上半部では左上方に帯状の凹部として残る。</p> <p>体部外面：縦方向粗目の刷毛目調整。</p> <p>口縁部：内外面周回方向の撫で調整。外面は体部上部に及ぶ。</p> <p>底部：平底。平滑。</p>	復原	156	76	177		1/2を欠く。



遺物番号	遺構番号	区	出土位置	遺物種別	年代	遺物特記	材質(胎土・構成・施装)
3501	427	3	G35-8631 3 6層	弥生土器 壺	弥生/ 中期		胎土：やや粒状性をもち、均質。極まれに粗砂。 断面：薄層状、層状に空隙を生じる。 器表：上掛けを行う；暗い黄赤(10 R 4/7 緑瓦色)。露胎部はやわらかい赤みの黄(9YR 7.5/4 磁粉色)。
5273	427	1	G35-0543 4 層b	弥生土器 壺	弥生/ 中期		胎土：粒状性をもつが、均質。 断面：やや団粒状。くらい灰みの赤ろを帯びた黄(8.5YR 4.5/2 フェーン)。 器表：底面以外の外面と内面の上半部に上掛け、くすんだ黄赤(5YR 5.5/5.5 焦香)。
6394	427	3	G35-9525 3 6層(北岸斜面)	弥生土器 壺	弥生/ 中期		胎土：緻密、細砂・粗砂をごくわずか含む。 断面：部分的に薄層状。 器表：上掛けを行う部分は暗い黄赤(10R 4/7 緑瓦色)、露胎部は薄茶明るい灰みの黄赤(4YR 7/4 薄茶)。
5413	427	3	G35-9545 (と付近)	弥生土器 壺	弥生/ 中期		胎土：緻密、粗砂をごくわずか含む。 断面：団粒状。 器表：上掛けを行う；暗い黄赤(10 R 4/7 緑瓦色)、露胎部：灰みの赤ろを帯びた黄(8YR 6.5/3 ヒステット)。

図136 溝427-29層出土遺物2(1:4)



成形・調整	計測 精度	口縁/ 長さ	底径/ 幅/径	編高/ 厚さ	計測値 備考	遺存 (破・状態)
<p>内面：(体部) 指押え痕ほか凹面が全体に分布→全体にわり強で調整。口縁部付近では左上方向に指えた撫で調整が行われる。内底面には指押え痕。</p> <p>外面：(体部) 上掛け(口縁部状隆起面突出部直下の体部から口縁部、外面の全面に及ぶ)。→口縁部直下から底部までの全面に飽磨き調整。上部2/3では水平歩行細目の調整痕が主となり、右上がりの粗目の調整痕が部分的に加わる。底部付近では左右斜めの、方向を指えた調整が交互に行われ、線状の文様となる。</p> <p>底部：唇縁部が盛り上がり、僅かな凹面を成す。底面には指押え痕が残る。</p>	実測	156	85	194		体部中央の一部を欠く。 (接合)
<p>内面：頸部、内底面に指押え痕。</p> <p>外面：上半部に横方向で往復する飽磨き調整。口縁部：周囲方向の撫で調整。外底面：往復する方向の飽磨き調整。やや凹面(周縁部)を呈す。</p>	実測	112	98	46		ほぼ完存
<p>体部：内面凹面が各所に分布、上半部では右上がりの指押え痕とみえるが、それ以外は計測く蹟である。→全体に撫で調整。</p> <p>外面(口縁部付近を除き底部まで、飽磨き調整(左右に傾斜を持った単位で一定面積を埋め、次の面を作業する繰り返しで、一部では線状文様を呈す)。全面に施工されているものとみえるが、上掛けの影響もあり、ほとんどみえない部位がある。底部近くのものには、単位巾がやや大。体部中央では、帯状の撫で調整が加わる。→上掛け(口縁部直下の体部から口縁部、外面の全面に及ぶ)。</p> <p>口縁部：上下面から直下の体部まで周囲</p>	復原	167	67	196		上半部の1/2を欠く。
<p>頸部内面：上半部に絞り痕、ややねじれた状態。下半部に縦方向の指押え痕、周囲方向に配列。</p> <p>胴部内面：全体に撫で調整。指押え痕による凹面が全体に分布。頸部との境界近くでは周囲方向に配列。胴部最大部には爪圧痕、帯状に分布する。</p> <p>頸部外面：胴部境界部から口縁部直下まで4枚の突帯を貼り付け(突帯を中心として帯状に周囲方向の撫で調整)。→上掛け(外面の全体)→突帯間に縦方向の飽磨き調整(粗目で、間隔を開けて施工。全体に右に傾斜)。</p> <p>胴部外面：全面飽磨き調整。水平方向を主とし密に施工。部分的に左右に傾斜をもつ。</p>	復原				口縁部・底部を欠く現況で高さ：28.5mm、胴部径227mm。	口縁部・底部を欠く1/2の破片。

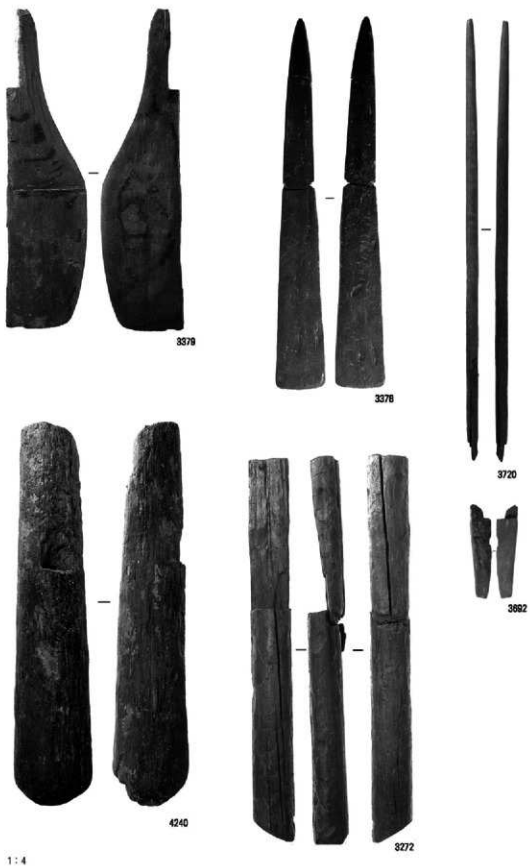
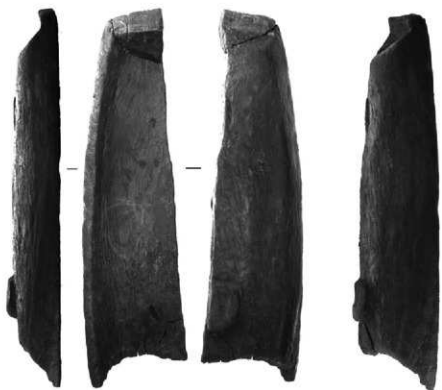
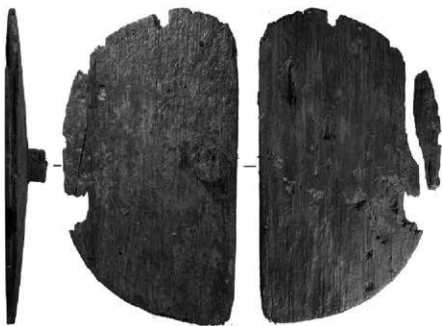


图137 葬427-29層出土遺物 3



1227



2443

1:4

圖138 溝427-29層出土遺物4

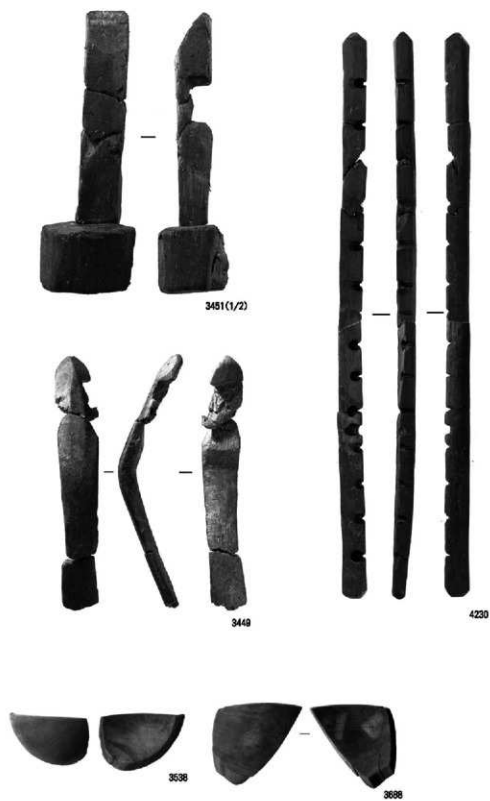


图139 溝427-29層出土遺物 5

内外面とも赤色・黒色顔料で塗り分ける。表面は赤色顔料で楕円、帯状の文様、裏面は赤色顔料で同心円文を描く。原状では1.5cm間隔で横方向に糸で綴っており、現状全面に孔列が残されている。また、部分的に薄板を当てて固定する。縁部と上端近くに横位の棧を都地漬けた痕跡が残る。

29層出土遺物（図135～139）

図135・136に弥生土器を示す。図135には後期土器、図136には中期土器をまとめる。調整の細部は表中に記述する。

3543は壺である。下半部を欠く。頸部突帯に刻み目がある。現状で3箇所、2箇所は近接して、1箇所はそれと対向する位置にある。5299は無頸壺である。

5391・5220は甕である。比較的小形の資料である。5220の体部には対向する位置に黒斑が残る。

5213・5209は手捏ね土器である。

5413は長頸壺である。接合しないが底部がある。底面はやや凹面状。

図136に示す無頸壺には高低2者がある。いずれも底面がやや凹面を成す。5394・3501は口徑に対して器高大の壺である。外面に上掛けを施す。5305は器高貫のつぼである。口縁直下の内面に2対の踵孔を対向する2箇所にもうける。

図137～139に木器を示す。出土した器種に特に纏まりはない。

3379は平楸である。長さ33.4cm、幅8.2cm、ほぞ部での厚さ1.8cmを測る。

3378は刃部をもつ利器であろう。平面が楔状を呈し、底辺が斜めにそがれて刃縁の様に見える。状態は尖頭状を成すが、鈍く収まる。一見して鶴嘴のような形状である。長さ39.0cm、幅5.3cm、厚さ1.6cmを測る。他の多くの資料とは異なり黒色硬質の材を用いている。ただし現状は器表が腐蝕し粉状に剥落する。

4240は壺柄である。柄部を欠く現状で長さ39.0cm、径7.8cmを測る。

3272は丸太状の材を途中まで半割したような資料である。下端は切り落とす。長さ31.3cm、幅8.3cmを測る。

3720・3692は尖頭器とする資料である。3720は細身で、長さ46.7cm、幅5.3cm、径1.3cmを測る。3692はやや太い資料で、基部であろう。平らに整形している。現況の長さ9.6cm、幅2.1cm、厚さ1.4cmを測る。

1227は脚付きの槽である。1/2弱の部分が遺存する。長さ75.0cm、幅20.5cm、高さ10.5cmを測る。

2443は蓋である。1/2弱を欠失する。つまみがつくものである。径32.8cm、高さ4.6cmを測る。

3455は、ほぞ孔を穿ち、何らかの部材であるが、原形を推測できない。ほぞ孔は資料中軸線に斜め方向にあり、断面長方形。長さ14.2cm、幅下端部の径5.4cm、厚さ1.6cmを測る。

4230は火きり臼である。上下端を面取りした角柱状を呈す。1面の片縁に溝を刻みその位置に回転による半球状の「臼」部が形成されている。臼部は一部除き等間隔で、15箇所設けられている。臼部の表面は炭化する。長さ59.3cm、幅2.3cm、厚さ2.0cmを測る。材は、繊維状の構造がみえる広葉樹である。

3449は杓子柄である。長さ24.7cm、幅3.9cm、厚さ2.0cmを測る。

3538・3688は杓子身部である。硬質の材で、同一個体の可能性を考えたが、接合しない。3538は幅11.9cm、高さ8.7cm、3688は幅8.3cm、高さ8.9cmをそれぞれ測る。



図140 谷4-23層 3区東半部 (南から)



図141 谷4-23層土層 (東から)



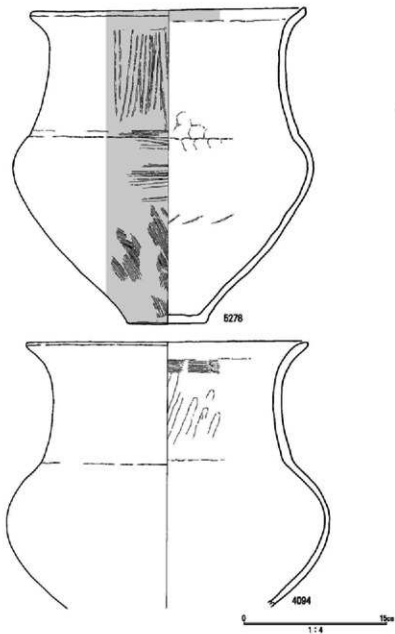
図142 谷4-25層（西から）



図143 谷4-25層遺物出土状況（西から）

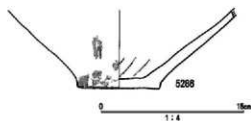


図144 谷4-25層遺物出土状況
〔35-6654〕（東から、M729）

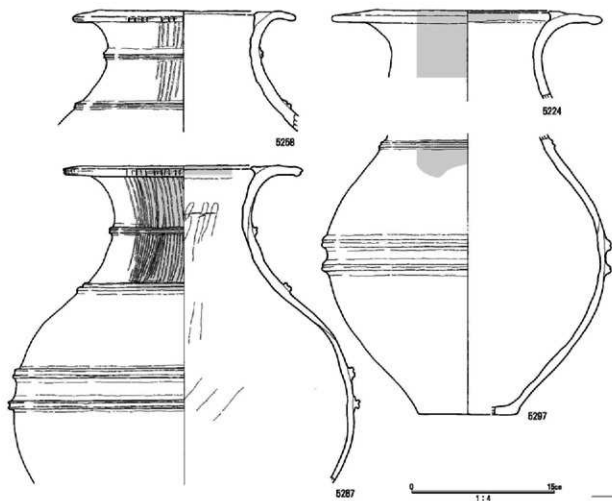


遺物番号	遺構番号	区	出土位置	遺物種別	年代	遺物特記	材質〔胎土・焼成・施釉〕
4094	720	3	G35-6654 2 3層	弥生土器 壺			胎土：緻密。粗砂を含む。 断面：やや粒状、細孔を生じる。 器表：明るい灰みの黄〔2.5YR 7.5/2 砂色〕。
5278	4	3	G35-57か? 23層	弥生土器 壺	弥生/ 中期		胎土：緻密で均質。砂粒をこくわず か含む。 断面：薄層状。 器表：口縁部内面から底部をのぞく 外面の全体に化粧掛け。その部位く すんだ黄赤〔10R 5/6.5 赭〕。それ 以外はやわらかい赤みの黄〔9YR 7. 5/4 砥粉色〕。
5286	4	3	G35-5724 2 3層	弥生土器 壺	弥生/ 中期		胎土：緻密。 断面：薄層状。 器表：柔らかな黄赤〔10R 7.5/5 赤膏〕。

図145 谷4-23層出土遺物 1 (1:4)



成形・調整	計測 精度	口径/ 長さ	底径/ 幅/径	器高/ 厚さ	計測値 備考	遺存 (破・状態)
<p>内面：(体部) 撫で調整、頸部縦方向の指押え→頸部口縁近くに口縁に沿う方向の刷毛目調整→口縁部に周回方向の撫で調整。</p> <p>外面：頸部縦方向の刷毛目調整→口縁端から頸部に周回方向の撫で調整。体部周回方向の撫で調整(磨きか?)。</p>	復原	298			体部径： 337mm	底部を欠く 1/2の破片、 器表やや荒 れ。
<p>内面：口縁までの全体に楕円形状の凹面が分布し、鋭い凹凸で埋まる。特に頸部と体部との接合部に密集。指押え痕とするが、当て具等の可能性はないか。体部には工具の当て痕が残る。全体に撫で調整を行う。</p> <p>外面：肩部以下の体部には、底部から斜め方向で細目の刷毛目調整→外面の全体に化粧掛け→胴部を中心として、頸部近くまで口縁に沿う方向の磨き調整。頸部に縦方向で間隔の広い磨き調整(磨文)。</p> <p>口縁部：周回方向の撫で調整→端面を整形。</p> <p>底部：平底。撫で調整を行う(中央部に往復する方向の、周縁部に周回方向の)。</p>	実測	294	80	327		体部、口縁 部の一部を 欠く(破片 接合)。
<p>内面：撫で調整。底部に接する体部内面に放射状の工具圧痕。</p> <p>外面：縦方向で細目の刷毛目調整→撫で調整。</p> <p>底部：平底。平坦。</p>	実測		87			底部



遺物番号	遺構番号	区	出土位置	遺物種別	年代	遺物特記	材質(胎土・焼成・胎施)
5224	4	3	G35-4734 2 3層	弥生土器 壺	弥生/ 中期		胎土：緻密、粗砂を含む。 断面：豆粒状。 器表：外面、口縁上端面に化粧掛け。 暗い黄赤(2.5YR 4/4.5 洗低色)。 露胎部) やわらかい赤みの黄(9YR 7.5/4 砥粉色)。
5258	4	3	G35-6711 2 3層	弥生土器 壺	弥生/ 中期	口縁以下の内面は 顕著な火跳ね状の 剥落。	胎土：緻密、粗砂を含む。 断面：薄層状。 器表：口縁状端面から外面の全体に 化粧掛け。くすんだ黄赤(10R 5/6, 5 純)。
5287	4	3	G35-5724 2 3層	弥生土器 壺	弥生/ 中期		胎土：緻密。 断面：薄層状。 器表：頸部以上の外面から口縁端直 下の内面まで化粧掛け、つよい黄赤 (9R 4.5/9 赤茶)。露胎となる体部 下半・内面はやわらかい赤みの黄(9 YR 7.5/4 砥粉色)。
5297	4	3	G35-4714 2 3層	弥生土器 壺		体部下半の一部赤 化。	胎土：やや粒状性、粗砂を含む。 断面：やや薄層状。 器表：上部外面に化粧掛けを行う； くすんだ黄赤(10R 5/6.5 純)。露 胎部は明るい灰みの赤みを帯びた黄 (8YR 7/3 シャンパン)。

図146 谷4-23層出土遺物 2 (1:4)



6266



6224

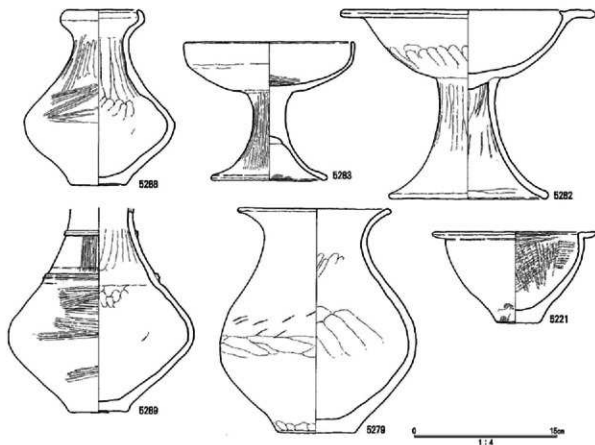


6267



6267

成形・調整	計測 精度	口縁/ 長さ	底径/ 器/径	器高/ 厚さ	計測値 備考	遺存 (個・状態)
内外面：撫で調整。 口縁部：内外面周回方向の撫で調整。	実測	278				口縁部
内面：口縁端以下、ほぼ全面にわたり、火跳ね状の表層が分布し、調整の詳細不詳。 外面：頸部の上下に各1条突帯を貼り付け、それぞれ2条頂部を作り出すが、いずれも下位の頂部を先に作り出す(周回方向の撫で調整による)→口縁下、突帯間に縦方向で確かな起層を調整(暗文)。 口縁部：周回方向の撫で調整、端面を整形(中央に凹線を生成)→端面に刺み目を加える。	実測	237				口縁部
内面：撫で調整。体部下半では斜め方向、おそらく刷毛目調整が先行する。それ以上では縦方向、ときに周回方向。 外面：頸部以上では、周回方向の撫で調整→上掛け縦方向の暗文。暗文は、間隔が広く、突帯間の2段に施される。上段の暗文は、口縁端近く、一部は口縁端まで及ぶ、これにつながるように口縁端面にも暗文が残る。体部では撫で調整→突帯貼り付け→突帯を中心に周回方向の撫で調整。 口縁部：上下周回方向の撫で調整。口縁端面整形(浅い沈線状の凹部生成)→下面では、頸部からの暗文、端面にもそれに続くように暗文(刺み目状)。	復原	96				
内外面：撫で調整。 頸部・体部に突帯貼り付け→突帯を中心に周回方向の撫で調整。	復原	106				体部1/2の破片。

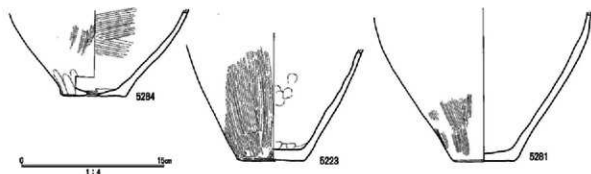


遺物番号	遺構番号	区	出土位置	遺物種別	年代	遺物特記	材質(胎土・焼成・施釉)
5279	4	3	G35-4754 2 3層	弥生土器 壺	弥生/ 中期	体部の対向する位置に黒斑。中央部黒化、周縁部赤化。	胎土：粒状性あり、粗砂を含む。 断面：均質。 器表：やわらかい赤みの黄〔9YR 7.5/4 磁粉色〕。
5221	4	3	G35-6723 2 3層	弥生土器 鉢	弥生/ 中期		胎土：やや粒状性、細砂を含む。 断面：団粒状。 器表：内面上掛けを行う。くすんだ黄赤〔5YR 5/5 団十郎茶〕。外面灰みの赤みを帯びた黄〔8YR 6.5/3 ヒスケット〕。
5282	4	3	G35-5742 2 3層	弥生土器 高坏			胎土：粒状性、夾雑物なく均一。 断面：薄層状。やわらかい赤みの黄〔9YR 7.5/4 磁粉色〕。 器表：上掛けを行う(坏部のみか)。大部分は剥落。くすんだ黄赤〔10R 5/6.5 種〕。
5283	4	3	G35-5733 2 3層	弥生土器 高坏			胎土：粒状性、夾雑物なく均一。 断面：薄層状。やわらかい赤みの黄〔9YR 7.5/4 磁粉色〕。 器表：上掛けを行う(坏部のみか)。大部分は剥落。くすんだ黄赤〔10R 5/6.5 種〕。
5288	4	3	G35-4734 2 3層	弥生土器 壺	弥生/ 中期	器表に火跳ね状の剥落。夾雑物部分で発生。	胎土：やや粒状性、粗砂を含む。 断面：薄層状。やわらかい赤みの黄〔9YR 7.5/4 磁粉色〕。 器表：化粧掛け？ 大部分は剥落する。くすんだ黄赤〔2YR 6/8 種〕。
5289	4	3	G35-5724 2 3層	弥生土器 壺	弥生/ 中期	外面に火跳ね状の剥落。	胎土：緻密、粗砂をごくわずか含む。 断面：薄層状。やわらかい赤みの黄〔9YR 7.5/4 磁粉色〕。 器表：化粧掛け？ 大部分は剥落する。くすんだ黄赤〔2YR 5.5/6 土器色〕。

図147 谷4-28層出土遺物 3 (1:4)



成形・調整	計測 精度	口径/ 長さ	底径/ 幅/径	器高/ 厚さ	計測値 備考	遺存 (観・状態)
内面：全体に撫で調整。体部中央部に斜め方向の指押え痕が残る。 外面：全体に撫で調整。体部中央部に指押え痕（斜め方向に北东）。 体部上半部に工具当て痕（左上～右下）。胴部上半部から口縁部までは周回方向の撫で調整。 底部：平底。縁部では体部がわにわずかにみ出し。	復原	162	84	235	底径・器高は実測値。	口縁部を欠く。
内面：口縁に沿う方向に往復する磨き調整を密に行う。→斜め方向で粗い磨き調整。 外面：撫で調整。底部近くに脚毛目調整。 底部：平底。縁部に沿い周回状に凹部。	実測	174	47	95		1/2の破片。器表特に外面荒れ。
口縁部：周回方向の撫で調整。 坯部：底部突起を坯部に差し込み接合。内面撫で調整。外面撫で調整。下半部では縦方向の痕跡。内外面に上掛け。 脚部：内面・上半部に貼り痕。下半部周回方向の脚毛目調整。縦方向の工具痕が認められる。胴部縁部に沿う撫で調整。外面縦方向の撫で調整(条線、面が明瞭に残る)。	復原	268	196	199		1/2遺存。器表上掛けの大部分剥落。
口縁部：周回方向の撫で調整。 坯部：内面・上半部の器表剥落。底面往復する磨き調整。外面撫で調整。 脚部：内面撫で調整。外面縦方向で密に磨き調整。	復原	181	123	145		坯部の半ばを欠く。器表の荒れ顕著。坯部上部では剥落。
内面：頸部上部に絞り痕。下部から体部上部にかけて指押え痕。体部下半部から底部は撫で調整。 外面：頸部に縦方向の磨き調整。体部上半部に斜め方向の磨き調整。体部下半部に撫で調整。 口縁部：端部を内方に折り、内外面周回方向の撫で調整。 底部：底面やや凹面を成す。著しいあばた状を呈す。	復原	88	61	184		体部・口縁部の一部を欠く。器表の荒れ顕著。
内面：頸部上部に絞り痕。頸部と胴部の接合部に指押え痕。体部下半部から底部は撫で調整。 外面：頸部に2段突起貼り付け。周回方向の撫で調整→頸部に縦方向の磨き調整。体部斜め方向で往復する磨き調整。 底部：平底。周縁部に凹部。	実測			65		下半部。器表の剥落顕著。



遺物番号	遺構番号	区	出土位置	遺物種別	年代	遺物特記	材質(胎土・焼成・施釉)
5223	4	3	G35-4734 2 3層	弥生土器 甕	弥生/ 中期		胎土：やや粒状性、粗砂を含む。 断面：団粒状。 器表：やわらかい赤みの黄 (9YR 7.5/4 低粉色)。" "内面：指押え→撫で調整。
5281	4	3	G35-57か? 2層	弥生土器 甕	弥生/ 中期		胎土：粒状性顕著、粗砂を含む(細粒の比大)。 断面：均質。 器表：柔らかい黄赤 (6.5YR 7/6 低紅色)。
5284	4	3	G35-6625 2 3層	弥生土器 甕	弥生/ 中期	底面に焼成後、外方からの衝撃により穿孔。	胎土：やや粒状性、均一。 断面：やや薄層状。くすんだ赤みの黄 (7.5R 5.5/4 キヤメル)。 器表：内外面に化粧掛けを行う。暗い灰みの黄赤 (5YR 4.5/3 灰赤)。

図148 谷4-23層出土遺物4 (1:4)

6. 谷4-23層と出土遺物

谷4-23層 (図3・4・5・140~144)

谷4-23層とするのは、明らかに人為的に形成された層である。溝427の項で触れたように、その掘削にあたり、廃土はすぐ脇の位置に捨てられていたと考えられる。それが23層として遺存するものである。

溝掘削時点で地表面は泥炭層とそれを薄く覆う粘土層(3層)であったことが土層断面からわかる(図93、14)。付図1に示すように、現状でも、等高線に表れるようにわずかながらの高まりをもって遺存しており、見る角度によっては、土手状にかなりの高まりがあった可能性も考えられる(図141~143)。

谷4-23層の分布は35-76区以東に限られるが、これは溝427の掘削された基盤層がこの位置では隠層であったことによっており、それ以西の谷堆積層を掘削した区域では当然それが盛り上げられていたものと考えられる。この区域では、調査に際して断面観察によりその片鱗を確認したにすぎないが、今回、谷4-2層として報告する遺物中のあるものは、その廃土層に含まれていた可能性がある。ただ、厳密な検討の余裕が無く、今回遺物の報告は、確実に谷4-23層ととらえることのできた層出土資料のみを報告する。

出土遺物 (図145~148)

遺物出土状況を図141・143・144に示す。特に偏在して密集する訳ではないが、大破片、あるいは



成形・調整	計測 精度	口径/ 長さ	底径/ 器/径	器高/ 厚さ	計測値 備考	遺存 〔態・状態〕
内面：指押え→撫で調整。 外面：縦方向の磨毛目調整。 底部：やや凹面を成す。体部側に粘土はみ出し。	実測		70			底部
内面：撫で調整。 外面：縦方向で細目の磨毛目調整。 底部：外底面平滑で、平底。	実測		70			底部。器表の平ばは剥落。
内面：横方向で往復する鋭磨き調整。 外面：縦方向で細目の磨毛目調整→撫で調整。底部際に指押え痕。 底部：外底面平滑で、平底。	実測		69			底部。器表やや荒れ。上掛けの大部分剥落。

完形に近い形で出土する点特異である。図144に示すように確認面に露出した状態では、いかにも人為的に埋設されたような状態に見えるが、実際は図141・142にみるような状態の上部が露出したものである。これら一群の土器は限定された時期のものに限られるようである。

以下、図145～148に接合復原できた土器を示す。出土遺物はほかに今回報告しないが、石錘を含む石製品があった。

図145・146に弥生土器壺を示す。5278・4094広口壺である。壺4094は図144に出土状態を示す資料である。当初埋設されたものと考え、別遺構番号を付したものである。5286は底部資料である。

図146に示す5258・5224・5258は鋤先状の口縁をもつ。体部資料5297を含めいずれも化粧脷を行う。5258のほかは上部に部分的に施す。

図147に示す弥生土器のうち、5288は袋状口縁壺である。5289も同様の器形で突帯をもつ。5279は小形の広口壺である。5283・5282は高環である。5221は小形の鉢である。以上のうち、壺5279以外の資料には化粧掛けが施される。

図148に甕、甔を示す。5284は甔である。底面の穿孔は焼成後、外方からの衝撃によっている。5223・5281は甕底部である。いずれも底面がごくわずかに凹面状を成す。

Ⅲ まとめ

谷部を中心とした変遷をまとめてみる。

今宿五郎江道跡第9次地点で出土した遺物は、3区で採集した先土器時代の台形石器にはじまり、各時代の遺物を多少なりとも含んでいるが、谷部に限ると、隣接する谷1次調査において出土した。縄文晩期土器が最もさかのぼる時期の資料である。資料数はごく少数で、谷底の砂層から出土している。この砂層に相当する層を本地点では確認できていない。3区の深掘りトレンチでは、谷底を埋めているのは泥炭層である。その上位には粘土層をおいて砂層が分布するが、いずれも弥生時代後期をさかのぼる遺物は出土してない。流路448・449、597・598、599といった流れにより流失したものであろうか。

本地点谷部に分布する遺構で最も古いものは溝427である。その埋没までの時間幅を考慮するとその掘削に伴い形成された谷4-23層は更に1段階古い遺構とすることができる。層中からは弥生時代中期土器のみが出土する。圧潰した状態で出土する資料もあり、投棄あるいは埋置を考えたが、層中全体に散在してしており、意図されたものとはできず、出土に至る経緯については、多地点の成果を併せて考えてみたい。なお、溝427でも下部層では中期土器が出土する率が高いようにみえるが、詳細な検討はできなかった。

次いで、おそらく溝427の埋没に平行するか、遅れて形成された凹地604の段階が考えられる。後期後葉の弥生土器が出土している。

溝427の埋没は、27層に示されるように砂層が堆積し、急速に進行したように見える。木器などの遺存状態が良好なもののためか。木質遺物には、道具・容器類だけでなく、割材が多数を含まれている。また、削片なども取上時に破損してしまうために分量を明らかにできないが、顕著に出土している。弥生土は後期前葉から後葉までの資料が出土した。

溝427の埋没最終段階は更に細礫混り粗砂が堆積した後の、谷4-2層の生成の時期であろう。調査時は両者前後関係にあるものとして、掘り下げ、記録を行ったが、木器の出土位置、流路から出土する遺物の時期幅からみても、全体に一律に生成したものではないと考えられる。

溝427埋没最終段階から谷4全体の埋没が進み、谷4-2層に続いて谷4-1下層が生成される。この段階では、地点的に遺物の投棄層が形成されている。谷4-1下層では、土壌600・601といった古墳時代前期の遺構が検出されており、この段階で谷底部分もかなり乾燥した部分が出現していたものと思われる。

この後、泥炭質質、有機質に富む層の生成はなく、そういったものが十分に分解される環境下で更に1層にみるような包含層の形成があり、それと前後して溝423～425・432、流路431・432が流れている。谷4-1層の形成時期は、古代後期あるいは中世にかかる時期が考えられる。

報告書抄録

ふりがな	いまじゅくごろうえ 6							
書名	今宿五郎江 6							
副書名	今宿五郎江遺跡第9次調査報告書(2)							
巻次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	924							
編集者名	杉山富雄							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号 TEL 092-711-4667							
発行年月日	20070330							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いまじゅくごろうえ 9次 今宿五郎江9次	福岡県 福岡市西区 今宿町	40130	0626	33° 34' 24"	130° 16' 22"	20021226 ~ 20040331	3,520	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
今宿五郎江9次 (谷部)	集落	弥生時代 (後期)	溝・土壇・杭列		弥生土器(中期・後期)・ 木器・貨泉・鏡・ガラス製玉・		溝の1条 は遺跡外 縁に沿う 大溝	
要 約								

いまじゅくごろうえ

今宿五郎江 6

今宿五郎江遺跡第9次調査報告書(2)
福岡市埋蔵文化財調査報告書第924集
2007年3月30日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷 協文社印刷株式会社
福岡市西区小戸4丁目24番5号